目次

第1話　瞳にハイライト……3
第2話　ラッセル博士の発明品……79
第3話　黄昏の少女……149
第4話　凸凹ベター・ハーフ……193
第5話　ナイアル&ドロシー……237

第1話　瞳にハイライト

ドロシー・ハイアットは好奇心の塊である。
それは記者であるナイアル・バーンズとて同じなのだが、厄介なことにドロシーには怖いものがなかった。
幽霊、と聞けば、「面白そう」と言ってカメラを構えるような性格なのだ。
だからこそ、見えるモノもあるのだけれど……。

※

「なあんで、俺が撮るとこうなるかなー」
ナイアルは写真を指ではじいた。
ひらりと机の上に落ちた一葉は、ひとりの娘を映したもの。
彼女の名は、ドロシー・ハイアットというのだが……。
「ただいまー」
噂をすれば影。ホテルの部屋の扉を開けて当人が帰ってきた。
「おう、ドロシー」
「今、戻りました。取材は進みましたか、ナイアル先輩」
「いやまったく」

前市長の逮捕というスキャンダルに端を発するルーアンの市長選挙は、対立する二候補の激しい戦いになっており、今のところ趨勢は五分。どちらが勝つかわからない状況だ。
取材対象を絞るわけにもいかず、ナイアルはやや疲れ気味だった。記事のほうもさっぱり進まない。
「……すらんぷですかぁ？　おや、それは何でしょう？」
しまったとか、待てと、声を上げる間もなく、ナイアルの傍に駆け寄ってきたドロシーが写真を摘みあげる。
「ああ、これは。この前の打ち上げでナイアル先輩が酔っぱらったときにわたしのポチくんを奪って撮った写真ではないですか」
「その丁寧な思い出しっぷりは、絶対嫌味だろ」
「ええまあ」
「否定しろよ！」
「オーバルカメラのオート機能を使ってさえのこの手ぶれっぷりと、生気を失ったゾンビのような顔で写された当人としては、これくらいは言ってもよいかと」
「う……まあ。すまん」
そうなのだ。
ナイアルは文章を書くのが本業であってカメラは本職ではない。目の前にいるリベール通信

社始まって以来の天才カメラマンと呼ばれるドロシーには及ぶべくもない。
　とはいえ、下手にもほどがある、とナイアルは毎度思う。
　まさか、「ゾンビみたいな顔」とまで言われるとは思わなかったが。自分の顔だぞ、それ。
「おまえさんが撮ると、妙に生き生きして写るよな」
「ポチくんへの愛情の差です」
「カメラ愛の差だけとは思えんのだが。なんか、コツとかあるんじゃないのか？」
　ポチくんってのは、愛用しているオーバルカメラにドロシーが付けた名前だ。
「まあ、多少はありますよぅ」
　言いながら、片腕に抱えていた紙袋をテーブルの上に置いた。袋の口が開いて、写真の束が顔を覗かせる。
　そういえば、焼き付けた写真があがってくるから取りに行くと言って出たのだった。
　一枚を選んでナイアルのほうへと向ける。
「これとか」
　写真は制服の少女三人を写したものだった。
　ジェニス王立学園の生徒たちだ。
　ホテルのあるルーアンの街から半日ほど歩いた距離にある全寮制の学園で、良家の子女も多く集まる学校だった。国内での知名度も高い。

　つい先日、ドロシーは、その学園からやってくるという『白い影』を追って、エステルという名の遊撃士の少女とともに訪れたのだ。
「本当は、その前の学園祭の時期に訪れたかったんですよねぇ」
「ほう」
「飾りたてられた校舎や寮を見てみたかったですし、お姫さまの格好をしたヨシュア君を写真に撮りたかったですー」
「お、おう」
　撮られる当人の気持ちになると、来ないでくれと言いそうな気もするが。
「残念です。次の機会に期待ー　でしょうか」
　ヨシュアが聞いたら嘆くだろうことを、さらりと言っていた。
「そ、それより、こっちの写真だが」
　三人娘の写真を見る。
「体育系と文系とお洒落系といった感じだな」
「三人とも可愛いですよぅ」
「可愛くないとは言ってねぇ」
「なるほど。先輩は制服フェチでしたか」
「ちげえ！　人聞きの悪いことをぬかすな！」

同じ制服を着ているからこそだろうか。写真の中の三人は個性の差が際だって見えた。仲良く肩を並べ、三者三様のポーズをして笑顔で映っている。
ナイアルが写した写真と、明らかに違う。
いったいどこが……。
「たとえばですね、ほら、ここです」
ドロシーの細い指が三人娘の瞳を指した。
「ん？　確かにちがうな。んっと」
「瞳が空の色を反射して光っているでしょう？　いわゆるハイライトってやつですねー」
なるほど、そのとおりなのだった。
瞳の部分だけ拡大すれば、おそらく青い空が映っているにちがいない。
対して、ナイアルの撮った写真はといえば――。
「目にハイライトがねえな」
「だから、死んだ魚の目みたいなんですよう。いわゆる、デビルフィッシュアイですね」
「それを言うなら、デッドフィッシュだろ」
悪魔にするなってーの。だから自分の顔だろうが。いいのか？
「てか、その言い回し正しいのかよ」
――いまいちコイツの専門用語は信用できねえ。

「とにかくですね。屋内なんだから、相手に導力灯のほうを見てもらうなり、フラッシュを使うなりしないと」
――話を逸らしやがった。
後に続くカメラ技法の説明をナイアルの脳は聞き流した。どうせ聞いてもわからない。
しゃべり疲れたドロシーが水差しを傾けるタイミングで、ナイアルは口を挟む。
「で、今からそいつを届けに？」
「はい。といっても、必要なのはこの――」
言いながら、一枚の写真を見せてくる。
「こいつはランチか？　えらく豪勢だな。量は少なめみたいだが」
「お嬢様プレートって名前のランチです」
皿の上に乗ったセットランチの写真だった。
「ひゅう。お嬢様、ときたか。さすがはジェニス王立学園ってところだな」
「食堂のメニューを、白黒イラストから総天然色の実物の絵にしたいそうで」
「そこは素直にカラー写真って言えよ。おばあちゃんか、おまえは。……うまそうに撮れてるじゃねーか」
「先輩が誉めるなんて、胃腸の調子でも悪いんでしょうか」
「いや俺だって誉めるときはちゃんとだな」

そんなに鬼先輩と思われているのだろうかと、ナイアルは内心複雑な気持ちだ。

いや、そんなことよりも心配なことがあった。

「これから学園までひとりで届けに行くつもりか？」

こくりと頷く。

「先輩はお忙しそうですし」

「王立学園までって、あぶなくねーか？」

「手配魔獣は遊撃士さんたちによって退治されたばかりですし、街道から外れさえしなければ大丈夫かとー」

「外れなければなー」

「信用してください」

「したいが、できねーな」

ツァイスでほけっと街道を外れて魔物に絡まれたのはいったい誰だったか。後で話を聞いて、ナイアルはとても焦ったのだ。

「古い学園だからな。旧校舎には魔獣が出たって話だし、幽霊だってほんとに出ないとは限らねえぞ」

「そ、それは……おっかないですねー」

「瞳をキラキラさせながら言うんじゃねえー」

「もし出たら、今度こそ絶対撮ってきますからー」

「あぶねえから、気をつけろって言ってるんだよー　いいか？　誰も付いていけねえんだから、自重しろよ、自重ー」

「しくしく」

口では泣きまねをしつつ、ドロシーはうきうきと旅の準備を始めた。

——言い出したら聞かねえのはお互い様か。ほんとにこいつは怖いもの知らずで。せめて街道を付き添ってくれる遊撃士でもいねえか、問い合わせてみるとするか……。

ナイアルはこっそりとため息をついてしまう。

かくなる上は——。

学園に行っておとなしく写真を渡すだけで帰ってきてくれることを空の女神エイドスに祈るのみだ。

そう思いながらもナイアルは、ドロシーは歩いた先から事件に巡り合う体質じゃないだろうかと、疑いを捨てきれない。

——こいつの好奇心を刺激するような事件が起きなきゃいいんだが……。

†

半日後――。
夕焼け空を背景にして、ドロシーはジェニス王立学園の門を通り抜けた。
――まったく先輩は心配しすぎですよう。
心の中で独りごちる。
街道に危険なんてなかった。
道中で魔獣に絡まれることもなく、学園に至る直前までヴィスタ林道を同行してくれた遊撃士の人だってあまりに安全だったので拍子抜けしたくらいだ。
いや――正確には一度だけ魔獣を見ている。
学園から十セルジュほど手前の林道で一頭のウリボアと出くわしたのだ。猪に似たその魔獣は気性が荒く、目についたものすべてに突進してゆく性質をもっている。
姿を見たときは口の中がカラカラになるほど緊張したのだけれど。
そいつはドロシーたちに目もくれずに、林道を横切ると、山のほうに向かって走っていってしまった。獲物を追いかけている最中だったのだろう、と遊撃士のおじさんが言っていた。拍子抜けしたのって。
起こったことと言えばそれくらいで、日の落ちる前にドロシーは学園に辿りつけたわけだった。

門を越えて、敷地の東のほうへと歩いてゆく。
夕映えに赤く染まる本館の右手に、二階建てのクラブハウスが建っていた。その建物の一階が食堂になっている。
中に入ると、カウンターにいた給仕係のおばさんがドロシーを見つけた。
「あら、あんた」
「こんにちは、デボラさん。写真ができあがりましたよー」
鞄から出した写真を見せる。
「早かったわねえ。あらまあ。綺麗に撮れていること。すごいね、あんた。さすがはプロだよー」
手放しの褒めようがドロシーにはちょっと照れくさい。
体温がわずかに上がってしまう。
「あ、あの、いちおう確認をお願いします」
チェックのためにデボラが食堂のメニューをカウンターまでもってきた。
置かれた紙片に視線を落として、ドロシーは「おや？」と思う。薄手の上質紙に飾り文字を使って書かれたメニューは、細ペンで描かれた料理の絵が添えられていて、前に見たときもおいしそうだなと思ったものだが……。
「あれえ、アイスがないの？」
ドロシーの背後から可愛らしい声がかかった。振り返ると、王立学園の女生徒がひとり、ド

ロシーの肩越しに伸びあがるようにしてメニューを見つめていた。
見つめる先のメニューには、彼女の言ったとおり、ロイヤルジェラートのお品書きを隠すように付箋が貼ってあり、『品切れ』と上から書かれている。
「品切れって、ほんとに一個もないわけ？」
と、疑わしげな目でデボラを見つめている。
——あれ、この子ってば。
その少女は、つい半日前にナイアルに見せた写真に写っていた子だ。仲良し三人娘のひとり。ナイアル先輩が『お洒落系』と評していた子だ。制服ではなくまるで衣装のような可愛らしい服を着ていた。もう夕方だし授業は終わっているのだろう。この子の名前は確か……。
「アリスちゃん、あのね」
「どこかに一個くらい隠してあるんじゃないの？」
「ど、どこにも隠してやしないよ。それに、アリスちゃん。もうすぐ夕食の時間だよ？」
「甘いものは別だから大丈夫！」
「そう言って、みんな乙女の秘密を増やしていくんだよ……」
デボラの言葉に、ぐさり、と心臓に矢を突き刺されたような仕草をしてしまう。
アリスと——ドロシーと。
「あんたたちね……」

「し、仕事の後にはですね。疲れた身体には甘いものが必要でして……」
「そ、そうよ！　そうなの。勉強に疲れた脳は糖分を必要としてるんだってば！　食べれば頭もすっきり眠気もふっとぶってもんよ！　ね、そうよね。おねえさん！」
「そ、そうです。そうですよぅ！　そのとおり！」
「あたしたちとっても気が合いそう！」
「ですです！」
「あんたたち……言って欲しいのかい？」
「え」
「う」
「太るよ、と」
「言わないでぇええええ！」
ドロシーとアリスはきれいなユニゾンで悲鳴をあげたのだった。

†

と、カウンターの向こうでデボラが肩をすくめた。
「うちのは自家製だからさ。作り置きがなくなると、入荷待ちってことになるね」
「ミルクなんてどこにでもあると思うけど」
アリスの言葉に、デボラが首を振る。
「ダメダメ。ロイヤルジェラートにはとびきり新鮮なミルクを使うってのが大事なんだからねー　とれたての卵と新鮮なミルク。それが美味しいアイスクリームを作る秘訣だよー　明日には入ってくるから我慢しておくれ」
「残念ですー」
ドロシーとしては職人気質もわかるのでおとなしく頷くしかない。
まあ、ロイヤルジェラートならば王都の本社に帰れば食べられるし。アリスは不満そうな顔をしたままだったけれど、ないものは仕方ない。
写した写真でも見て心を慰めるしかなかった。お腹はちっとも膨れないけれど。
「おねえさん、カメラマンなの？」
カウンターに広げたままの写真を見てアリスが言った。
「あ、はい」
「あれ？　そういえば、この前あたしたちのこと撮ってたひと？」

そうですよ、と頷く。
覚えていてくれたようだ。
先輩記者にも見せた写真を封筒から取り出してみせた。
「あ、これこれ。パープルやモニカと一緒に撮ったやつ！」
「はい。お会いできたらお見せしようと思いまして。あ、デボラさんのも、こちらに」
前回訪れたとき、先生や生徒たちの写真を三十枚ほど風景を五十枚ほど写している。それらはひととおり焼き付けて持ってきていた。
「はあ。これがあたしかい。うまく撮るもんだねぇ」
「ホント！　まるで別じ……あ、ちがうってば」
食事の盛りを減らされたいのか、そんな視線で睨まれていた。
「ま、でも、十歳は若く見えるね！　これなら、学園の生徒にも混ざれそうだよ！」
「え……」
それはどうだろう？　という言葉を慌てて呑み込む。
「でも、ほんとにきれい。食べちゃいたいくらい」
料理の写真を見ながらアリスが口許に小さな指をあてた。
「お腹減ってきちゃったなぁ」

「余計お腹が空いちゃうってば！」
　喜んでいいのかわるいのか。
　カメラマンとしてはうれしいけれど。
「ねえねえ、おねえさん。お仕事はもう終わり？　写真、友だちにも見せてあげたいんだけど」
「あ、ええと。まだ、こちらから選んでいただかないと――」
「選ぶだけでいいんだろ？　戻ってくるまでに見ておくよ」
　そう言われて、ドロシーはお願いしますと頭を下げた。食堂のメニュー用の写真とデボラを写したものだけ置いて、アリスに付いていく。
「そういえば、食堂に何か用事があったのでは？」
「生徒会室のほうにね。会長さんに会いに行ったんだけど、いなかったの。これ、学園祭で着た衣装で、今度これを着てモデルをするのよ」
「モデルですか。すごいですねぇ」
「すごくないよ。うちの美術部のだもん」
　アリスが着ている服は、元々美術部に所属している生徒が作ったものらしい。終業後に時々引っ張り出して着ていたところを見つかってしまい、モデルを頼まれた、という話。
　衣装みたい、と感じたドロシーの感想は的を射ていたわけだ。
　アリスは謙遜するけれど、同性の目から見ても、カメラマンとしても、可愛らしい衣装を着

こなしていて、モデルにしたいという気持ちがよくわかった。
　頭の左右でお団子にした髪型もとても似合っている。
「あたしだけだと恥ずかしいし、どうせなら、他の人にもモデルさせちゃおうかなって。それで、学園祭の時の衣装を貸してもらえるか訊きに行ったんだけど」
　生徒会長は不在だったわけだ。
「会長さんたちが便りにしていた人がひとり休学しちゃって……。最近、忙しいみたいなんだよね」
「そうなんですかー」
　女ふたりで話をしているとあっという間だ。女子寮へと辿りつく。
　二階建ての寮は、庭を挟んで男子寮と向かい合うように建てられており、王立学園の歴史を感じさせる造りをしていた。
　具体的に言ってしまえば古めかしい。いわくありげというか。
　この前、アリスたちの写真を撮ったときは、彼女たちの部屋の中だった。一階の奥だったはずだ。
　四枚扉の正面玄関をくぐる。左右に伸びる廊下と二階へと上がる階段が目に入る。
　廊下は市松模様のタイル張り。左手の空きスペースには、来賓用だろうか、椅子とテーブルがいくつか置いてあった。

「二階はぜんぶ三人部屋だけど、一階には、四人部屋から個人部屋まであるのよ」
アリスが言った。
廊下の片側にずらりと並ぶ扉はみな同じ形をしていて、飾り付けなどもされておらず、それがなんとなく学校っぽい雰囲気を醸している。
「この前はアリスさんたちのところしかおジャマしませんでしたけれど、改めて見ると部屋がいっぱいありますねー」
「玄関くぐったところから見ると、二部屋ぶんの扉しか見えないもんね」
「わたしも二部屋しか記憶してませんでしたから」
「やだなあ、もう！　そんなはずないってばー！」
「ですよねー」
廊下の端の扉を開けて、アリスが中へと声をかける。
「たっだいまー！」
しん、と静けさが返った。
人の気配はあるのだけれど、返事はない。
角部屋だから、左手が窓になっていた。
明りの点けてない部屋に、かすかな黄昏の光だけが差し込んでいる。
奥のテーブルに背中を向けて座っている生徒の姿が見て取れる。
振り返らずに、覆いかぶさるようにして机に向かっている。声が聞こえてきた。
「ふふふ……。そう、そのとき老婆は壁に向かって囁いたの……」

†

地の底から響いてくるかのようなおどろおどろしい声だった。
後ろ姿はカチューシャをつけたふつうの女生徒なのに。
アリスが壁際のスイッチを入れると、導力灯がチカチカとまたたいてから点った。
だが、背中を向けた少女は明りが点ったことにも気づかないみたいだ。
小声で独り言を言っている。
「『リアや……そこにいるのかい？』と。真っ白く塗られたばかりの壁に向かって老婆は囁き、周りの人々は老婆の気が狂ったのかと思う。そのとき、ガリガリ、という微かな音が響いて……。ええと、そう。『爪で引っ掻くような』と。壁の『中から』そんな音が聞こえてきて、それからそれから。そうだわ！　猫の鳴き声が――いえ、だめ！　どこかにあったもの、そんな話。考えて、考えるのよ、パープル。ここが頭の使いどき……」

ぶつぶつとつぶやきながら、机に向かっている。
怯えた表情を浮かべていたアリスが、げんなりとした表情に変わった。
「閃いた！　血よ！　真っ赤な血が白い壁からじわっと染み出してくるの！　次の瞬間に、音を立てて壁が剥がれ落ちる！　崩れる土壁。倒れ込んでくる血まみれの死体。あがる悲鳴、飛び散る血しぶき、空の女神エイドス様を祭っている校内礼拝堂は一瞬にして阿鼻叫喚の地獄絵図！　きゃああ！　素敵だわ！　これこそホラーだわあああ！」
「いーかげんにしてよ、パープルったら！」
ずかずかと近づいて行ったアリスが、机の上の原稿用紙をひったくった。
「ああ、だめ待って。書くまで待ってぇ。消えちゃう。思いついたイメージが消えちゃうから書き終わるまで待ってぇぇ！」
叫びながら涙まで流していた。
「あの……アリスさん」
いたたまれなくなってしまった。だって、ドロシーにも覚えがありすぎて。
執筆中に声を掛けられても返事を返せるナイアル先輩がうらやましい。事件記者は切り替えが早いのだろうか？
「もう！」
アリスが原稿用紙を返すと、パープルと呼ばれた少女は、二度と渡すまいとばかりに紙の上

に覆いかぶさってペンを走らせる。
腕を組んでアリスは書きあがるのを待っていた。
その間に、ドロシーは部屋の中を見回した。
四人部屋とあって、けっこう広い。
ベッドが左右に二つずつで四つ。扉に掛けられた名札は三つだったから、ひとつは使われてないのだろう。シーツに皺ひとつ寄っていない。机も四つ。そのうちのひとつがパープルの座っている奥の机で、彼女の机の脇にだけは本棚が置いてあった。
どうやら、このパープルという少女は本好きのようだ。そういえば、ナイアル先輩はこの生徒を「文系」と評していた。
大きめの衣装箪笥が二つ。制服が標準の彼女たちだから、二つでも賄えるということなのか、それとも余計なものまで持つなという学校の方針なのか――考えているうちにパープルが書き終えたようだ。
のろのろとだがパープルの脳は現実世界へと復帰を果たし、徐々に焦点の合ってきた瞳でドロシーのほうを見ている。
「どなた……？」
「ドロシーさん」
「どこのドロシーさん？」

「あのねえ！　もう、パープルったら、ほんと書いてるときのあんたって、ロクデナシのデクノボウになっちゃうんだから……」
「うーん。でも、どこかで見たことがある人だっていうのはわかるんだけど」
「あの……リベール通信社のカメラマンをしております、ドロシーです。先日、お写真を撮らせていただきました」
　アリスたちを撮った写真を見せる。
　ああ、とパープルの顔に理解の色が広がった。
「それにしても、パープルったら、今度は何を書いているのよ。おっかないったら。それに、明りも点けないでやってると目を悪くするわよ？」
「照度と視覚の衰えは関係ないっていう最近の研究もあるけど？」
　反論するパープルは、アリスにじろっと睨まれて口をつぐんだ。
「はい。心配かけてごめんなさい」
「わかればいいの」
「小説を書いてらっしゃるんですかぁ？」
　ドロシーはとりなすように質問する。
　はい、とパープルは言った。
「わたし、小説家になろうと思っているんです。今回は、学園を舞台にした恐怖小説を書いてみようと思って。エイドス様の前で愛を誓ったカップルが校内礼拝堂で悪霊に魅入られて次々と殺されていくっていう……」
「あ、あんたねー。罰当たりにもほどがあるわよ！」
「えっ。そんなことないですよ。現実には起きないと思っているからこそのフィクションですからね。それにこれ、エンターテインメントですし」
　言い合うふたりに水を差すように、のほほんとした声が割り込んだ。
「なんだいなんだい。何を揉めてるんだよ？」
　振り返ると、いつの間にか部屋の中にもうひとり増えている。
　仲良し三人娘の最後の三人目だ。『体育系』の彼女。部活動を終えたところらしく、体操着を着ていて、なぜか肩当てのようなものをつけている。
　弓……の武具だったような気もする。
「あ、モニカ！　聞いてよ、またパープルったらロクでもない話を考えてるのよ！」
「ちょっと、ロクでもないとかないでしょ。ホラーを馬鹿にしないで！」
「はいはい。そこまで。お客さんの前でなにやってんのさ」
　ハキハキした口調で言った。
　赤毛の、背の高い少女だった。後から思えばこのときに気付くべきだった。
　モニカと呼ばれた彼女は、口調とは正反対の少し警戒するような目でドロシーを見ていたの

だから……。

†

モニカに促されてアリスもパープルもドロシーの存在を思い出したようだ。わずかに頬を赤らめつつモニカにドロシーを紹介してくれた。
「へえ。カメラマンさんか」
「ドロシーさんってばとっても写真が上手なのよ。ほら見てよ。あたしたちだって三割増しくらい美人に写ってるって思わない？」
アリスの言葉にモニカが頷きを返した。
「確かによく撮れてるな」
「上手ですね。こちらの旧校舎なんか、暗く物悲しい雰囲気が良く出ています」
どうやら風景写真の一枚が気に入ったようだ。
「今にも隠れている悪霊が姿を現して学園を煉獄へと変えてしまいそうです」
「や、やめてよー　そういうこと言うのー」
「あー、確かに何か出そうだよな」
「やめてってばー　夜中にトイレに行けなくなったらどうすんのよぉー」

すっかり涙目でアリスが口をとがらせる。
「あら？　でも、壁に塗り込められた少女の話っていうのは、リベールに伝わる昔の伝説を元にしたのよ？　つまり、実際にあったのかもしれない話なわけ」
「へー、そうなんですかぁ」
とドロシー。すっかり聞き役に回ってしまっていた。
「そうなの。おっかないわよね」
「で、伝説でしょー　絶対そんなのなかったってー」
どうやら怖がりらしいアリスは手で耳を覆って聞こえないふりをする。
そんなアリスをからかうようにパープルは容赦なく話を続けた。
「もちろんその話は伝説よ。でも、小説は想像だけで書いちゃうと薄っぺらくなっちゃうからね。ホントを混ぜることでフィクションは生きてくるわけ。ほら、ここのくだりだけどさ――」
原稿用紙を叩きながら声を張る。
「やめてぇー、聞きたくないー」
「この前の夜の出来事をそのまま使ってみたのね。夜中に起きたポルターガイスト」
「ぽるたーがいすと？」
思わずドロシーは口を挟んでしまった。面白そうな事件の匂いがする。
「騒々しい幽霊ってこと。家具がガタガタ揺れたり、奇妙な音がしたりするの」

「へー」
「三日前くらいにこの部屋で起こったんです。そのときのアリスったら、もう怯えちゃって怯えちゃって」
「わ、悪いか！」
「かわいいって言ってんのよ。ま、たいていは風の音だったり、家鳴りだったりするんだけど」
「面白いですー」
「面白くない！　ちっとも面白くないってば！　ゆ、ゆうれいなんていないんだからね！」
「えー、でも幽霊は、出たばかりじゃないの。ほら、『白い影』が旧校舎をさ迷っていたっていう」
パープルが言って、ぎくりとアリスが身をすくませた。
すっかり顔が青ざめている。
何かを思い出したように声を出したのはモニカだった。
「そういえば……。ちょうどその頃だね、ドロシーさんがうちの学校に来たのって。ひょっとして取材か何かで？」
「あー、えー、まあ」
「わあ、そうだったんですか！　記者が取材に来るほど有名だったんだ！　じゃあ、あれは本当だったんですね！」
パープルが顔を輝かせて詰め寄ってきた。

反対にアリスのほうはますます顔を青くさせている。
「それで白い影の写真は撮れたんですか！」
「そ、そうですねえ……」
ドロシーは困ってしまった。
いわゆる『白い影』事件については、遊撃士協会から詳しいことは話さないでくれ、と釘を刺されている。あれはどうやら幽霊ではなかったらしいのだけれど、それだけに実は幽霊よりも厄介なことになっている――らしい。
ナイアル先輩も市長選挙が終わったら調べてみたいと言っていたけど。
今はドロシーから言えるようなことは何もないのだ。
「あ、それよりみなさんそろそろお食事なのでは？」
仕方なく話を逸らした。
「いっけない！　もうそんな時間なの!?」
慌てたのはパープルで、「わたし、締切に間に合わないから、ルーアンまで行ってくる」と言って原稿を整えると身支度を始めたのだ。
街から外れた学園には、郵便配達は日に一回しかやってこない。毎日午前に来るそうで。でも原稿の投稿は明日では間に合わないらしい。確かに明日から休日だった。ルーアンの街まで出れば王都への荷は飛行船に乗せられるから速達便を使うなら街に出るしかない。

「こ、これからですか。もう日が沈みますよ」
心配になってしまった。
だが、パープルは友人の馬車に同乗させてもらう予定だとかで、大丈夫だと言った。
「ぎりぎりまで待ってもらってるの。こうしていられないわ。もう出るから！」
そう言い置いて、書き上げた原稿を抱えて部屋から駆け出していった。
「明日には戻るから〜〜〜！」
「パープルったら、もう」
週末の外出許可は取ってあるのかしらとアリスが口を尖らせる。
「仕方ないなぁ。モニカ、食堂に行こ。ドロシーさんも」
「あ、はい」
とドロシー。
だが、モニカは、
「悪い。あたしも夕食はパスなんだ」
「えー！」
「アーチェリー部の合宿でね。講堂を使って三日間の泊まり込み。食事も一体感を高めるためとかいってみんなで自炊なんだよ。ああ、風呂だけは寮に入りにくるけどさ。今は着替えを取りに来たところだったんだ」

「そんなっ！　え？　じゃあ、あたし……今夜はひとりきり!?」
「悪いね。でもさ——」
パープルの真似をして、からかうようにモニカが言った。
「アリスはひとりでも平気だろ？　『ゆうれいなんていないいないんだからぁ』さ」
「！　！」
アリスが声も出せずに口を開けたり閉じたりする。
笑いながら、モニカは着替えを箪笥から引っ張り出す。
「あはは。怖かったら、布団にくるまってさっさと寝ること！　いいね！」
「モニカのばか〜〜〜〜〜〜！」
涙の粒を目尻に溜めながらアリスが叫んだ。
そのときにはもうモニカは部屋を出てしまっていて、閉まった扉を前にしてアリスは立ち尽くすだけだった。
くるりと振り返る。
大粒の涙がぽろりと頬を伝って落ちた。ドロシーの心臓がどきりと跳ねる。
——ああ、どうしましょう！　こんな可愛い子を泣かせてしまいました。いえ、泣かせたのは自分ではないのですけれど。
動転しているドロシーに向かってアリスが言った。

「おねえさま、お願いします。今夜はいっしょに寝てください！」
……はいい？

†

夕映えが白い外壁を赤く染めている。
ジェニス王立学園の女子寮を見上げながら、ドロシーはため息をついた。
——どうしてこうなったんでしょう？
玄関を抜け、一階の端の部屋へと辿りつく。扉を開けると、アリスが期待に目を輝かせて待っていた。
「ど、どうでした⁉」
「許可していただきました。部屋が空いているなら構わない、と。宿直室にでも泊めてもらえれば、というつもりだったのですが」
「そんなっ。ドロシーさんは、学園のために写真を届けに来てくれたんでしょう」
「いえいえ。個人的なお願いでしたし」
リベール通信社とも学園とも関係なく、取材写真を撮る傍ら、食堂のデボラと私的に交わし

た約束なのだ。
「そうなんですか？　でも、よかった！」
言いながら、ベッドの上で座ったままアリスがぽんぽんと跳ねる。
純粋に喜んでいる彼女の顔を見て、まあいいかとドロシーは思い直した。好奇心が疼いているのも確かだ。
「それで、先ほどのお話なのですけれど……」
ドロシーの言葉にアリスの顔から笑みが消えた。頬を引きつらせる。アリスの怖がりは本物のようだ。誰もいないのに左右を見回してから話し始める。
「ええと……。一週間ほど前からなんですけど……。真夜中頃です。家具がガタガタと鳴ったり、足音みたいなのが聞こえたり……」
「それは、他の部屋でも？」
「物音を聞いたっていう子はけっこういます！」
「それで……幽霊だと」
「パープルが、ポルターガイストじゃないかって言い出して」
ポルターガイスト——騒霊現象というのは、心霊現象のひとつで、誰もいないのに物が動いたり、音が聞こえたりすることらしかった。怖がりのくせにアリスは詳しく教えてくれたのだ。
幽霊の仕業ということになっているらしい。

「パープルってば、最近、自分がホラー小説に凝ってるものだからってもう！　きっと風の音とかに決まってるんですよ！」
「本当に？」
　ドロシーの問いに、うっ、とアリスは言葉に詰まった。
　泣きそうな顔になったアリスを見て、ドロシーは頭を掻く。しまった、これは言いすぎだ、と反省する。怖がらせるつもりはなかったのだが……。ドロシーとしては幽霊がいるならば、ぜひ見てみたい、できれば写真に収めたいと思っているわけで――。
　ひとまず話題を変える。
「パープルさんは作家志望なんでしたっけ？」
「そうみたいです。あたしたち三人って、ばらばらなんですよね」
　その言葉は前に彼女たちの写真を撮ったときにも聞いた気がする。
　アリス、パープル、モニカの三人組は、それぞれ異なる方向に個性的な生徒たちだった。お洒落系、文系、体育系。
　可愛い物好きらしいアリスがお洒落系というわけだ。
　先ほど原稿を投稿しに街へと向かったパープルが文系少女。
　部活で合宿中だと言った活発そうな女の子が体育系のモニカだ。
「パープルって、執筆に入ると、周りが見えなくなるんですよ」

「あー」
　身に覚えがありすぎる。ドロシーも、おまえはカメラを構えると周りが見えなくなる、とナイアルから始終言われている。
「街にあのまま行っちゃったけど、履いてた靴下の柄が昨日とおんなじだってこと気づいてるのかしら」
「ははは……」
　アリスは同じ柄の靴下を連続して履くことに抵抗があるらしい。
「こ、細かいですね！」
「あったりまえじゃないですかー！」
「だって、この学園って制服ですよね……」
「だからこそ、小物に拘るんです！」
　しまった。なにかボタンを押してしまったらしい。
　そこから十五分ほど、みなと同じ制服を着つつ、どうやって差別化してお洒落するかについて延々とまくしたてられ、そのことに気づいてくれないルームメイトへの繰り言がさらに十五分続き、気づいたときにはもう夕食の時間。
　食堂で夕食を済ませて寮に戻ってきたときには、すっかり夜だった。

†

真っ黒な闇の帳が窓の外に降りている。

ベッドに腰掛け、アリスと向かい合って、寮の話などを聞かせてもらっていた。寮生活の経験がないドロシーには興味深いことばかり。

「面白いです～。あと、さっきから、パープルさんとモニカさんのお話ばかりですね」

何気なく口にしていた。

「えっ？　そ、そうかなぁ」

「はい。『パープルったら』とか『モニカはね』とか」

「それはその……同室だし」

「それもあるのでしょうけれど」

ドロシーは微笑んだ。

「大好きなんですねー、おふたりのことが」

アリスの顔が真っ赤になった。

そのときだ。

ガタッ、と物音が聞こえた。

はっとなったアリスの視線を追って、ドロシーは顔を巡らせた。部屋の隅にある衣装箪笥に

目が向く。

そちらから聞こえたっぽい。

息を殺してじっと見つめていたけれど、物音は一度きりで収まってしまった。

「ド、ドロシーさん……」

「はい」

「今の、聞こえました？」

「……一応」

顔をそむけたままアリスが答える。意地でも見ないぞと言わんばかり。

まさか本当にポルターガイスト？　でもまだ真夜中にはほど遠い。幽霊が出るには、早すぎないか？

けれど、一度疑ってしまうと、室内導力灯（ルームライト）の影に何かが潜んでいる気がしてしまう。

思い切って立ち上がる。四人部屋の隅に置かれた箪笥のほうへと歩き出そうとして気づいた。

――えっ？

ドロシーの巡らせた思考を断ち切るように、ノックの音が響いた。

「入るよ」

声とともに体操着に上着を羽織っただけの少女が入ってくる。モニカだ。

「風呂の時間だよ、おふたりさん！」

言って、自分のものらしきベッドの上にどかっと胡坐を掻く。そういえば、お風呂は入りにくるとか言ってたっけ。

「ちょっとモニカってば。お行儀が悪いよ。ドロシーさんが呆れてるじゃないの」

「いえそんな……」

ドロシーは呆れてはいない。驚いただけだ。

「いいじゃんか、別に。あたしたちだけなんだし」

「あたしたちが見てるでしょ！」

「アリスに見られても別に。減るもんじゃないからいいと思うけど」

「あたしが恥ずかしいの！　もう！」

まあまあとドロシーがなだめる。

「それより、わたしも、お風呂をいただいてしまって良いんでしょうか？」

言ったら、アリスが目を剥いた。

まさか入らないつもりなのかと尋ねてくるので、一日くらいは我慢すると返したら、すごい勢いで腕を掴まれた。

「すぐに行きましょう、ドロシーさん！　お姉さまが汚いままなんてあたし我慢できない！」

アリスの言葉にモニカががりがりと頭を掻きながら言う。

「女子が汚い恰好で存在するのが女子寮ってもんじゃないのか？」

「そんな伝統はあたしの代で駆逐してやるわ！」

「はいはい」

「モニカにも言ってるの！　さっさと、その汗まみれの服をどうにかしなさいよ！」

言われて、モニカが自分の身体に視線を落とす。そうかなー、そんなに汚いかなー、と首を捻っている。

「あの……でしたら、みなで一緒に行くというのは？　あっ、入れるかどうかわかりませんけど」

「それは大丈夫です。四人いっぺんに部屋ごとに入れるようになってるから」

「あ、なるほど」

寮は最大が四人部屋だと言っていたっけ。

「ほら、モニカも行こうよ」

「あたしは後から行くよ。先に行ってて」

そう言って、ごろりとベッドに横になってしまう。アリスがまた目を吊り上げた。

視線から逃れるようにモニカが背中を向けた。

「えっとその……。では、先にいただいてしまいましょう」

「でも、ドロシーさん……」

「ほらほら。案内していただけますか？」

アリスの背中を押す。

部屋を出るときに、ちらりとドロシーは衣装箪笥に視線を走らせた。
それから寮の長い廊下を歩いて浴場へ。
歩いている途中ですれちがったメガネの生徒が、わたしも一緒にと合流した。この子は確か、とドロシーは記憶を浚う。
生徒会長のはずだ。名前はジル。
「あんたたち三人部屋でしょ。じゃ、いいよね！」とにっこり。
同室だという生徒が不在らしく、ひとりきりで入る予定だったとのこと。
男子寮と女子寮にそれぞれ存在するという浴場は、四人が入っても余るほどの大きなもので、まるで温泉に来たかのようだった。
「温泉いいですねー。行きたいなぁ」
一瞬で脱いで湯船に浸かった生徒会長が、はあと息を吐きだしながら言った。メガネが曇った。お風呂に入るときまでかけてるらしい。
「会長、おじさんみたいですよー」
「むっ。アリスさんってば、あなた、若き乙女に対してなんと失礼な！　……と、ところで聞きそびれてたんだけど、そちらの胸の大きいお客様って、前に学園の『白い影』事件のときに訪れた……」
「はい。リベール通信のドロシーです。お、大きくはないですよぅ」

じっと視線を注がれて、ドロシーは湯船に身体を沈めた。
「お姉さまって着やせするんですね！」
「ア、アリスさんまで」
「うう……。うらやましい」
「あるところにはあるってものなのね……」
うらやましげな視線を投げられ、なぜかツァイスの温泉に若い遊撃士の少女と入ったときのことを思い出してしまった。
「どうしたらそんなになるんですか」
「お、おふたりはこれからじゃないですかぁ！」
アリスに真面目な顔で聞かれてしまったので、真面目に考えた。
「そうですねぇ。湯上りにフルーツ牛乳を飲む、とか」
この話はあまり続けたくないので、ドロシーは話題を変えることにする。
「あの……ところでですね。お部屋のふたつの衣装箪笥って、アリスさんたち三人で使っているんですよね？」
アリスが頷いた。
「奥のやつがモニカとパープルので、手前があたしのです」
予想通りの答えが返ってきた。

「アリスさんはひとりで一個使ってるんですねー」

「モニカとパープルがそれでいいって。あのふたり、自分たちはそんなに服を持ってないからって」

なるほど、とドロシーは頷く。

ふたりともこう言ってはなんだけれど、確かに服に気をつかうタイプには見えなかった。つまり、あの奥の箪笥は――物音が聞こえたほうだ――モニカとパープルの共用箪笥だったわけだ。

そして、先ほどアリスは言っていた。

執筆に入ると、パープルは周りが目に入らなくなる、と。

「そうそう。そのモニカさんなんだけど、近頃、どう？」

何気ない口調で切り出したのはジルだ。

「モニカが何か？」

「んー。いや別に何もなければいいの。ただ……彼女、最近、ちょっと部活をサボりがちらしいのよね。そのへんを、アーチェリー部の部長に言われててさー」

「えー⁉　だってあの子、毎日部活に出てますよ。今日だって合宿にちゃんと参加してたし」

「そ？　それならいいんだ」

そう言って、生徒会長は気にしないでと話を切り上げた。

――ひょっとして……。

ジルはこの件を切り出すために、お風呂に割り込んできたんじゃないかな、とドロシーは気づいた。たまたますれちがった風を装っていたけれど。

メガネを曇らせたジルの表情は読めない。

けれど、たぶん間違いない。どうやらジェニス王立学園の生徒会長は気配りの利く、やり手のようだとドロシーは思った。

そのあとは他愛無い会話が続いた。女三人寄ればというが、話はあっちにいったり、こっちにいったりを繰り返し、いい加減に出なさいと後続の生徒に促されてようやく風呂をあがった。

いいお風呂だった。湯上りにフルーツ牛乳がないのが惜しい。

モニカは浴場に姿を見せず、部屋に帰ってもいなかった。合宿所に戻ったのだろうとアリスが言う。お風呂に入らない気かしらと憤慨していた。

ドロシーは、ちらりと部屋の隅の衣装箪笥に視線を投げる。

こうしてみると、けっこう大きい。そう……何かを仕舞い込んでおくには充分なほどの大きさがある。

開けてみればはっきりするけれど――おそらくもう……。
「ドロシーさん、あの……」
　寝間着に着替えたアリスが心細そうな顔をする。部屋に戻ってきてポルターガイスト騒ぎを思い出したのだろう。アリスの服は、可愛らしいお菓子がいっぱい散らばった柄だった。服の裾を握りしめながら、ちょっと青い顔をしている。
「大丈夫ですよ。今夜はたぶん幽霊さんは来ないと思います」
「えっ……」
　きっぱりと言ったドロシーにアリスが不思議そうな顔をする。
　夜更けまでたっぷりとおしゃべりをして、いつの間にかふたりとも寝てしまった。
　その夜はそれから物音ひとつ聞こえず。
　ふたりとも夜更かしがたたって、昼ごろになるまで目が覚めなかった。
　あくる日――休日の朝、というかもう昼だったけれど。ジェニス王立学園内には、ちょっとした騒ぎが持ち上がっていた。
　旧校舎の一部が壊されるという事件が起こったのだ。

†

　食堂で遅すぎる朝食を食べていると、ルーアンの街からパープルが帰ってきた。
「あんたたち、まだお昼、食べてなかったの？」
「ちがうわよ」
　アリスが言った。
「これ、朝食だもん」
　呆れ顔になったパープルがアリスの隣に腰を下ろす。
「ま、いいけどさ」
「間に合ったの？」
「一応ね。世紀の傑作よ。『王立学園に潜む魔獣ウーライ・バーチャの復讐は血の惨劇の夢を見るか？』っていう、痛快ホラー青春アクションなの」
　アリスもドロシーも言葉を失った。
「そ、そうなの？」
「スゴイデスネー」
　とだけ返す。
「エンターテインメントに徹したわ。イマドキ、暗くて陰気な作品なんて、誰も読まないと思うのよね！」
　充分、暗くて陰気なタイトルに思える――とは言いだせなかった。

きっと本人の中では明るく楽しい痛快アクションなんだろう。

想像もできないけれど。

「このために遊撃士の魔獣手帳と遊撃士（プレイヤー）手帳と釣り手帳を写させてもらって読み込んだの！資料集めから勝負は始まるのよね！」

「釣り手帳って読む意味あるの？」

「リアリティってやつよ！」

アリスが納得いかないという顔になった。ドロシーも同じ気持ちだが、まあ、作家の頭の中なんてどこでどう繋がっているのかわからないし。そういえば、ナイアル先輩も役に立つのか立たないのか不明な本をよく読んでたっけ。『子育て上手のママになる方法』とか。ナイアル先輩にもっとも縁のなさそうな……。

「ところで、何かあったの？」

食堂のあちこちでひそひそと噂話が繰り広げられている。周りを見回しながら、パープルが少しだけ声を潜めて言った。

「旧校舎がまた立ち入り禁止になるかもって」

「あら」

「旧校舎って、あの、柵の向こう側の建物ですよね？」

ドロシーが尋ねると、アリスもパープルも頷いた。

ジェニス王立学園の敷地の東側には、張り巡らされた囲いの向こうに古ぼけた校舎が建っている。今の校舎ができる前に使われていたものだ。老朽化してしまい、魔獣が棲みついたりなどもあって、危ないからと立ち入り禁止になっていた。

ドロシーが前に学園を訪れたときは、幽霊が現れるというので出入りできる扉には鍵が掛けられていた。

「遊撃士さんが退治してくれたから危険はなくなったはずなんだけどなー」

「何かあったの？」

パープルに問われて、アリスが答える。

「旧校舎の裏庭に面した窓の一部が壊されてたんだって」

ドロシーもアリスも先ほど知ったばかりだ。食堂に来て、ざわついている人たちに訊いて教えてもらった。

鍵が新調され、当直の守衛を雇うことも検討しているらしい。

「また、何か出たのかな？」

パープルが言って、アリスの顔が引きつった。

「ちょっとやめてよ。せっかく寮に出なくなったと思ったのに」

「出なかったの？」

「久々にぐっすり眠れた」

「それで今頃になって朝ごはんなのか。そういえば、ドロシーさん、泊ってたんですね」
「はい。大きなお風呂も堪能させていただきましたー」
「別に一晩じゃなくても、ずーーーっと泊ってくれてもいいですよー」
「無理を言うんじゃないわよ、アリス。ほら、ドロシーさんだって困ってるじゃないの」
「まあ……。ああでも、できればもう一日泊めてもらえればって……よろしいでしょうか」
ぱあああっとアリスの顔が明るくなった。やはりまだ心細かったのだろう。
「まだお仕事が?」
パープルが言った。
「それもあるんですけど……」
昨日も今日も色々あって、食堂メニューに使う写真をまだ選んでもらっていないけれど、それだけではなかった。
「ポルターガイストなんですけど——」
ぎくり、とアリスが身をすくめる。
「たぶん、今夜には片がつくと思うんですよぅ」
「片がつく?」
「はいー。ところでパープルさん。小説家に大事なことってなんだと思いますか」
「観察……かしら」

「ですよねー。じゃあ、今夜、肝試しをしませんか?」
パープルが好奇心満々の顔つきになり、アリスが顔を引きつらせた。

†

その日のドロシーは忙しかった。
まずは食堂のデボラに相談して、メニューに使う写真を選んでもらった。
食堂には前回からのわずかな時間で新しいスイーツが増えていたけれど、パンプキンパイは甘すぎ、シナモンティーは癖が強すぎると、男子生徒たちからは不評らしい。メニューに加わるかどうかは微妙なところだ。
それから、ルーアンの街に滞在するナイアル先輩へと連絡を取る。学園のオーバル通信機を使用させてもらって、ホテルへ繋げた。帰るのが一日遅れてしまうから心配かけるとまずい。
驚いたことに、折り返しですぐに連絡が入った。手渡された通信文を読む。
「オマエガ珍シク気ヲ回シタノガ心配ダ。雨デモ降ルンダジャネエカ?」
と、書いてあった。
「……何でしょう。この言いようのない脱力感は」
心配するかもと思ったのは確かだが、こういう心配をされたかったわけではない。

「いや、絶対これ、心配してないですよねー」

　思わず独りごちた。

　それから、学園内のあちこちをカメラ片手に見て回る。

　こういうときカメラマンは得だ。カメラを手にしていればうろついていても怪しくない。

　旧校舎へと繋がる扉は確かに鍵が新調されていた。金属製の柵で取り囲まれた敷地内にあるから、誰も入れない。

　というわけでもない。もし、本当に誰も入れないなら、魔獣が棲みつくこともなかったはずなのだ。裏手は森になっているから、どこか柵が壊れているのかもしれない。あるいは地下で繋がっているか。

　そのことを相談に学園長室も訪れた。ジェニス王立学園のコリンズ学園長は穏やかなおじいさんで、このままトンガリ帽子をかぶせればおとぎ話の魔法使いか賢者になれそうな人だった。突然の来訪者なのに温かく迎えてくれる。

「なるほどのぉ。確かにそこまで点検はしておりませなんだが……」

「危ないです」

「だが、そもそも夜に学園の外に出る生徒はおらんのです」

　あ、なるほど、と思い至る。学園の外は魔獣のうろつく森だ。遊撃士でもなければ、夜に出歩こうと思わない。

「でも、昼は外まで出ますよね？　運動部とか……アーチェリー部、とか」

「鍛錬のために森を走ったりしているようですな。だが、それも決められた安全なコースを走るようにと言い聞かせてありますよ」

　ドロシーの不安そうな表情を読み取ったのだろう、コリンズ学園長がつけ足した。

「だが……やんちゃ者はどこにでもおりますからな。わかりました。これを機会に、旧校舎の周りの柵は今一度点検することにしましょう」

　縁もゆかりもない一介の通信社のカメラマンの言葉を真摯に聞いてくれるのだから、この学園長さまって良い人だー、とドロシーは思った。

　それからひととおり学園内を見てまわる。

　休日だけあって園内には人がやや少ない。実家に帰っている生徒も多いからだ。それでも運動部系の部活はいつもどおり、よく聞き取れない掛け声を張り上げている。いつも思うが、あれは何の意味があるんだろうか。学生時代に運動とは縁がなかったドロシーには永遠の謎だ。

　先生たちの多くは学園内に住んでいて、溜まった仕事を片づけていた。テストの採点だったり、部活の指導だったり、授業のための資料作りだったり。休日だというのに休んでいない。先生という仕事も大変だ。

　学園祭で生徒会が劇を披露するのに使用されたという講堂も寄った。大きな箱型の仕切りのない造りで、床は板張り、正面にステージがある。今は女子の一団がダンスの練習をしていた。

あのステージに立って、エステルちゃんとヨシュア君が劇をしたわけだ。エステルは騎士の役を、ヨシュアは王女の役だったという。
「本物のお姫様みたいってすごい評判だったのよー」
というのは、前回来たときに同行していた遊撃士エステルの言葉だ。
千載一遇のシャッターチャンスを逃したのが悔しい。
ナイアル先輩はばっちり見たという話なのに。
講堂の片隅を見ると、寝袋が山になっていた。合宿をしているというアーチェリー部のものだろう。モニカはいなかった。そもそもアーチェリー部の生徒たちの姿がない。どうやら別の場所で修練に励んでいるようだ。そういえば弓を引く専用場ってどこかにあるんだろうか？もしかして、森のほうにあるのかもしれない。
結局、モニカとは会えずじまいで寮に戻る。
空がふたたび茜色に染まっていた。もうじき日が暮れる。黒々とした翼の鳥が一羽、西に向かって飛んでいった。
部屋に戻ると、アリスとパープルが向かい合って話し込んでいた。
ドロシーを見て、ふたりとも身体を向けてくる。
「あ、ドロシーさんっ」
「あの……これ」

パープルが視線を箪笥に走らせながら手を差し出してくる。その手に握られているのは、ぼろぼろになった小汚い毛布だった。
「これは……？」
「言われたとおりに、その箪笥を漁ったら……」
パープルが言った。
「やはりそうでしたかー」
ふたつある箪笥のうち、奥の箪笥の下の段。つまり、モニカとパープルが使っているほうのモニカのほうから見つかったのだろう。
「幽霊……じゃなかったんですか？」
「そうですねぇ」
ドロシーは自分の推理を話して聞かせることにした。
初めに気づいたのは、最初にポルターガイストらしき物音がしたときだ。奥の箪笥を見て、ひとつの段を除いて、服がはみ出しそうになっていた。
「モニカってば、いっつもそうなんですよー。ちゃんとしまえって言ってるのに」
アリスの言葉に、ドロシーは思わず苦笑いをしてしまう。そういう意味で言ったのではないのだけれど。
「失礼ですけれど、アリスさんに比べれば、モニカさんもパープルさんも、あまり服はもって

いらっしゃらないんでしょう？」
「それはまあ……制服があるから」
「ですよねー」
なのに、はみだしそうになっていた。つまり、これは箪笥の中のものを無理に移動させたからではないのか？
おそらくですけれどぉ、と前置きしてから言う。
「モニカさんは部活中に子犬か子猫でも拾ったのではないでしょーか」
ふたりともが驚いた顔になる。
「まさか、ここで飼ってたっていうんですか」
パープルが首を捻る。
「はい」
「家具が鳴ったりとかの夜中の騒音はその拾った子が立てた音だとっ」
「そうなりますね」
「それは、いくらなんでも気づくような……」
パープルが言って、ドロシーは首を首を横に振る。
「そうでしょうか？　パープルさんは数日前から原稿を書いてたんですよね？　執筆中は周りがまったく見えなくなるって聞きました。事実、わたしたちが最初、部屋に入ってきたときもそうでしたよ」
「うっ」
「でも、あたしもいたのに」
「アリスさんは本当だったら気づけたはずです。けれど、昨夜もそうでしたけれど、音がしたとき、怖がって、絶対に音のほうを見なかった」
「あ」
ふたりともが絶句した。
「でも、それなら言ってくれればいいのに」
「おふたりに迷惑を掛けたくなかったんだと思います」
寮は原則ペット禁止なのだそうだ。バレれば同室のふたりにも責が及ぶ。
「子犬か子猫だろうって思うのは、モニカさんがしばしば部活を抜け出していたからです。それだけ世話が必要だったんだろうなって。もしかしたら、ケガをしていたのかもしれません」
だが、この休日を利用してアーチェリー部は合宿を行うことになった。
しばらく寮に帰れなくなる。
そこであの日——ドロシーがやってきた日だ——モニカは拾った猫だか犬だかの隠し場所を変えることにしたのだ。
「じゃ、じゃあ、モニカがお風呂を入りにきたとき……」

「はい。まだ草叢の中にその子は隠れてたんだと思います。わたしたちをお風呂に追いやっておいて、こっそりと連れていった……」
それでモニカがお風呂に来なかったのも納得がいく。
ドロシーの説明に、アリスもパープルも聞き入っていた。
「じゃ、じゃあ、モニカが拾ったっていうその子は、今はどこに――」
「それも見当がついています」
ドロシーはにっこりとほほ笑んだ。
「だから言ったんですよ、肝試しをしましょうって」

†

月だけが夜空に輝いている。
黒い影がひとつ、鋼鉄製の柵に駆け寄った。
身長よりもわずかに高い鉄の棒へと飛びつくと、足がかりもないのに柵を蹴って自分の身体を持ちあげた。尖った天辺で身体を傷つけないよう身体をひねって飛び越える。
背中には部活で使った弓が背負われたままだった。
モニカだ。

旧校舎へと振り返らずに走ってゆく。
しばらくして隠れていた茂みの中からドロシーたちは姿を現した。
「あの子ったら、部活の道具を置いてくるくらいできなかったのかしら」
アリスが言った。
「それだけ心配なんでしょうね。しかし、鍵をつけたくらいじゃ防げないもんですねー」
モニカの運動能力に、ドロシーは感心してしまう。
「あたしたちはどうするんですか。あの子のマネは無理ですよ」
パープルが、心配そうな目をモニカの消えたほうに向けながら言った。
「鍵を借りてあります」
ポケットから鍵を出した。かちゃっという鍵の開く音が夜の中に響く。鉄の柵は握りしめると冷たかった。
開ける。
ドロシーたちはゆっくりと旧校舎へと向かって歩いてゆく。
旧校舎の敷地内にはロクに導力灯も点いておらず、まったくの闇がそこここにわだかまっている。ドロシーはわくわくするが、アリスには少々辛いようだ。さっきからパープルの服の裾を掴んだまま離さない。
「ひょっとして旧校舎の窓が割れたのって……」

「モニカさんが割ったとは限りませんが、状況的に何か関連はありそうです」
裏庭のほうへと回ると、確かに窓がひとつ割れている。さらにその窓は開けたままになっていた。無理をすればそこから入れそうだ。
「こ、ここから入るんですか？」
アリスはすっかり怯えた顔になっている。元々、あまり怖いものが好きではないようだし、夜の旧校舎というだけで嫌なのだろう。それに加えてあまり運動も得意ではない。
無理をせずに待っていてくれてもよかったのだが。
「い、いえ。行きます。やれと言われれば、よじのぼるくらい。こ、これくらい！」
「正面の鍵も預かってますので、そっちから入りましょう」
あっさり言ったら、拍子抜けした顔になってへたりこんだ。腕を掴んでパープルが引っ張りあげる。
「ふえぇえ」
「まったく、世話の焼ける……」
「パープルってば怖くないの」
「魔獣は怖いけど、幽霊は別に。だって、元人間なんでしょ。じゃ、夜道で酔っ払いに絡まれる怖さと似たようなもんだと思うし。確実に厄介な酔っ払いに比べれば、害があるとは限らない幽霊のほうが……まし、でしょ」

パープルの斬新な意見にアリスが目を剥いた。
「だってもう死んでるのよ！」
「そりゃ、誰でも一度は死ぬわよ。あれ？ でもそーなると幽霊が成仏するって、二度死ぬことになるのかな？ それは滅多にできない経験だわ。あたしも死ぬときは一度は幽霊になってから死にたいかも」
「ぱーぷるってば〜〜〜〜やめてよ〜〜〜〜〜」
アリスが涙目になった。
「あの……もうちょっとお静かに」
いつもナイアル先輩に言われている台詞を自分が言うことになろうとは思わなかった。
ともあれ、それでふたりともがぴたりと口をつぐむ。
正面玄関に廻り、鍵を開ける。
錆びついた音を立てて扉が開いた。
玄関ホールを抜けて、南側の廊下へと出る。その先に中庭へと続くテラスがあるはずだった。
南側から差し込む月の光に照らされて、廊下が青白く輝いている。
数えてふたつめの扉が細く開いていた。
あそこにいる。ドロシーの直感が告げていた。
と、そのときだ。

それまでの静けさを破って慌てた声が聞こえた。「ばか、こら待て！」という叫びの直後に、ドゴン、と派手な音を立てて扉が粉砕される。破片を廊下に撒き散らしながら、そいつが飛び出してきた。

「きゃあああ！」

たまらずにアリスが悲鳴をあげてしゃがみこむ。

廊下に後を追って飛び出してきたモニカが、びっくりした顔になって振り返った。

「えっ……アリス？」

「あたしもいるわよ」

パープルが腰に手を当てたまま言った。

ルームメイトたちの邂逅をしり目に、教室の扉をぶちやぶったそいつは、鼻を鳴らしながら、ドロシーと見つめ合った。小さいながらも、身体の毛を逆立てて、ドロシーを威嚇しようとしている。

ドロシーは己の間違いを悟った。なんてことだろう。

モニカが拾ったのは、子猫でも子犬でもなかった。

魔獣だったのだ。

とりあえず壊れた扉はそのままに、ドロシーたちは教室へと入る。

魔獣の子どもはモニカが抱えていた。ミルクを飲ませると、あっという間に寝てしまった。今は目を閉じてすやすやと寝息を立てている。後ろ脚の片方とお腹に包帯がぐるぐる巻かれていた。

森をランニング中に拾ったのだ、とモニカが言った。

「ま、魔獣だよ⁉」

「でも、放っておけなかったんだよ！」

ケガをしたらしく、死にかけていたのだと言った。拾った直後はほとんど身動きもしなかった。わずかなミルクだけを飲んでずっと寝ていたらしい。

「ミルク……？　って、ひょっとして食堂のミルクですか？」

ドロシーの問いにモニカが答える。

「うん。ただ、目を覚ますと、こいつ意外と大食いでさーだから食堂のおばちゃんにかけあって……」

なるほど。それで売り切れてたのか。

「水くさいんだから！　わかってたら、協力してあげたのに」

アリスが言った。

「でも、實は動物飼うの禁止だしさ……。ばれたら、みんなにも迷惑かけるかなって」
「あたしたち、友達じゃないの！」
「ま、どのみち、あたしは締切明けるまでは何もできなかったと思うけどね」
「……パ、パープルってばー！」
アリスが火を噴くような目で睨む。パープルが肩をすくめた。それを見て、モニカがやれや
れと苦笑を浮かべる。
ああ、この三人はいつもこうなんだろうな。そう思える瞬間だった。
アリスとパープルはしばらく言い合っていたが、モニカがなだめてようやく話が元に戻った
モニカは、拾った動物が魔獣だということは見当がついていたが、どんな魔獣かまではわから
かった。
「コウリボア……」
パープルが言った。
「ウリボー……なんだって？」
「こうりぼあー、よ、アリス。ウリボアの子どもだって言われてるの。後先考えないで突
ることを『ウリボアの突進』って言うでしょ。遊撃士も手を焼く厄介な魔獣ね」
壊れた扉を見ながらパープルが言った。
「ずいぶん元気になってるみたいじゃないの」

「昨日くらいからだよ。元気になるとじっとしてられないらしくってさ」
寝入っているコウリボアを撫でながらモニカが言った。
犬よりもコロコロしていて豚に似ていた。毛皮に縦縞が入っている。脚を縮めて丸まって
ると、なんとなく瓜を思わせる身体つきだった。なるほど——だから瓜なんとかって名前な
でしょうか。それとも偶然？
「まさか、窓を壊したのもこの子ですか？」
ふと思いついて聞いてみたのだが、モニカが頷きを返した。昨夜、コウリボアを寮からこ
旧校舎に連れてきたときに腕から逃げ出して割ってしまったらしい。
「まあ、だいぶよくなったからさ。もう、森に帰さなくちゃいけないのかなって……」
少しさみしそうに言った。
「そっか……」
アリスも神妙な顔になった。
鍵も新調され、見張りもつくかもしれないとあっては、そうそう旧校舎に忍び込むことも
きなくなる。それに、そもそも野生の魔獣なのだ。あまり人間の手に馴染むのもよくないか
しれない。
「だからお姉さん、今夜には片がつくって言ってたんですね」
パープルが言った——正解。

「休日も終わりますから」
明日からは日常が戻ってくる。
なんとなくみんな黙ってしまって、寝入っているウリウリした坊やを見つめていた。
月の影がゆっくりと動いてゆく。
壊れた扉越しに差し込む明りがのろのろと瓜坊やを抱いたモニカの足下から這い登ってく
る。寝ている魔獣の顔を照らした。まぶしさに目をしばたたかせ目を開ける。ゴヒッ？　と
ニカを見上げて嘶いた。くすりと抱きかかえたモニカが微笑む。
「よし。森に帰ろうな」
言い聞かせた。自分に、かもしれない。
「いいの？」
とアリス。
「いいんだ」
「じゃ、行きましょ。そろそろ寒くなってきたわ」
二の腕をさすりながらパーブルが言った。そっけなく現実的な言い回しが、この子が自
割り振った役割なのだろう。
一瞬むっとした顔になったアリスだが、ぷいと顔を逸らして言う。
「わ、わかってるわよ！」

それを見て、パーブルが微笑む。
友達っていいものだな～、とドロシーは思った。カメラに夢中だったドロシーは学生時代
ひとりでいることが多かった。それはそれで後悔していないが、それでも――。
友達っていいものだ。
なぜか、遠い街で待っている小言の多い先輩の顔が浮かんだ。
壊れた扉に応急の修理（椅子と机でバリケードを作った。魔獣が棲みついては困る）をほ
こしてから廊下に出た。
「中庭の端に柵が壊れてるところがあるんだ。そこから森に出られる」
運動部員たちの間では有名な話らしい。
ときどきサボるために使っている、と言われて、ドロシーは苦笑してしまう。名門ジェニ
王立学園の生徒も、やっぱりふつうの学生だったというわけだ。
廊下から中庭へと出ようと歩き始めたところでそれが起こった。
翼の羽ばたく音が聞こえて、天井から何かがぶつかってきたのだ。
「うわあ！」
モニカが悲鳴をあげて倒れる。コウリボアが腕からこぼれた。
「な、なに!?」
「ボールバット！」

パープルが息を呑んだ。

†

蝙蝠に似た、だが、ほとんど球形の身体をもつ翼ある怪物は、ふたたび天井付近まで舞い上がって、そこで翼を振って留まっている。

　こいつは確か旧校舎の地下にいた魔獣だ。

　エステルたちがここの地下を探索したときには付いていけなかったドロシーだが、そこで何が起こったのかはだいたい聞いている。

「地下の魔獣はぜんぶ倒してきたって聞いていたのですけれど……」

　だからこそ、ここまでこれたわけで。あまりに遅くなったときの言付けはしてきたものの、ここで魔獣と遭遇するとは計算外だ。

　決して強くはない。

　その証拠に、ドロシーたちの人数を見て、相手は警戒しているようだ。

　一対四。数の上では不利だと思っているのだろう。

　ボールバットがドロシーたちを順に見回している。ドロシーを、モニカを、パープルをアリスを見て、それから一点で視線が止まった。目で見ているのかどうかはわからないが、少なくと

も顔が向いた。

　向いた先に、小さな手負いの獣がいる。

　ボールバットは狙いを定めた。

　金物を引っかくような不快な声をあげ、翼を強く打ち振って飛びかかってくる。

　コウリボアを狙ってきた——。

　かばうように人影が動いて、間一髪で瓜坊やをさらって廊下を転がったのは——。

「アリス！」

　動いたのは一番近くにいたアリスだった。転がった拍子に膝を打ったらしく顔をしかめている。しかも、頬にすり傷が走って、血が滲んでいた。

「ば、ばか、なにやってんだよ、アリス！」

　モニカが慌てて駆け寄る。

「だって——」

　包帯を巻いたコウリボアを抱きしめながらアリスが言う。

「この子せっかく助けたんでしょ！　き、傷ついたら、モニカ悲しむじゃないの！」

「そりゃそうだ」

　パープルが相変わらずの飄々とした言い回しで肩をすくめる。

「けど、アリスが傷ついても、モニカは悲しむと思うよ」

「ー　あ……」
泣きながら見上げるアリスの目を見て、モニカが頷いた。
「うん」
「ごめん……」
いい場面だが、あえてドロシーは口を挟む。ここでドロシーまで感激していては、誰も助からなくなってしまう。
「あのー。それで我々が助かるためにですねー」
急襲に失敗したボールバットが天井付近で次の手を練っている。今はこちらの手番らしいから、早急に対処法をとる必要があった。
「なにか、あのボールバットについて情報をお持ちではないでしょうか、魔獣手帳を読破したパープルさん」
精一杯、場をなごませる口調で言ってみたが、よく考えてみると、ナイアル先輩だったら、なごんでいる場合か、と叱りそうだ。
一瞬だけ目を瞑ったパープルが、目を開いてから「確か、暗所を好む、とあったような」と言った。
——暗所を好む。
——ということは、明るいところは苦手、ということでしょうか。

なるほど、それで月明かりさえ避けて、天井の暗がりに逃げるわけか。
「充分です。では、逃げましょう」
三人に中庭の出口へと向かって走るように促す。
「で、でもドロシーさん」
「わたしは最後から行きますから、みなさん合図したら走ってください。いいですね。3、2、1、ゼロですよー！　ほらほらー！」
コウリボアを抱えた三人が走り出した。逃がすまいと、天井からボールバットが襲いかかってくる。ドロシーは魔獣の前に立ちはだかり、ポシェットからカメラを抜き取った。
ボタン操作なんて見なくてもわかる。
オーバルカメラの操作盤である導力器を指でなぞり、一瞬で導力を起動させる。
構えてシャッターを切った。
夜を昼に変える閃光が、愛用のカメラから迸る。
魔獣の影が天井に向かって長く伸びた。
ギャアアアアー！
ボールバットが絶叫をあげた。だが、それでもそいつはドロシーに向かって飛びかかってきたのだ。尖った爪がドロシーの顔を引き裂こうとすれすれまで迫ってくる。
頬を風がかすめた。

目の前から一瞬でボールバットが消える。勢いよく後方へと吹っ飛んでいった。ボールバットの身体の中央に矢が刺さっていた。アーチェリーの矢だ！

「ドロシーさん、早く！」

「わー　わわわー　はいぃ！」

――怖かった怖かったあー

「さすがに今回はダメかと思ったですよぅ！」

わき目も振らずに出口へと走った。弓を構えたモニカと合流し、そのまま中庭へ出る。

ボールバットは追ってこなかった。

モニカの矢で倒されたのか。深手を負って諦めたのか。それとも、月光の下に出てくることができなかったのか。

どれであるにせよ、どれでもよかった。戻って確かめてみる気にはなれない。

今は無事に脱出できたことを喜ぶときだ。

パープルとアリスによって抱えられていたコウリボアと目が合う。くりくりとした黒目に不思議そうな表情を浮かべてドロシーを見ている。

「あなたは、人間を襲っちゃだめですよー」

言い聞かせてわかってもらえるものかはわからなかったが、格闘家と友情を結んだ魔獣もいたことだし、試してみてもいいだろう。

柵の壊れたところから外へと出た。

森の中を四人と一頭でしばらく歩く。

学園からあまり離れると魔獣が出るからと適当なところで止まった。

モニカが、抱きかかえていたコウリボアをそっと地面に下ろした。

瓜坊やはとまどった表情を浮かべ、モニカを見返している。

「ほら」

声をかけるのだが動かない。

「行きなってばー」

動かない。

だが、そのとき街道の脇の茂みががさがさと音を立てて鳴った。

大きな巨体が現れる。

コウリボアをそのまま何倍にもしたような。けれど、特徴的な縦縞はなくなっていて、茶色の毛皮で覆われていた魔獣だった。

ウリボアだ。

くるり、とそのとき初めてコウリボアが背を向けた。たったったと、小さな足を動かして、大きなウリボアの元へと駆けてゆく。

そのときになってドロシーは思い出した。

そういえば、学園に来る途中で自分はウリボアを見ている。こちらには目もくれずに山を走っていったっけ。同じウリボアかどうかはわからないが、ひょっとして、ドロシーたちに目もくれずに走り回っていたその理由は……。

コウリボアが大きなウリボアのところまで辿りついた。

ふんふんと鼻で匂いを嗅いでから、小さな身体を押しつけている。凶暴さで知られる魔獣が、そのときだけは小さな子のなすがままになっていた。

それから背中を向けるとドロシーたちから離れていった。

コウリボアもたったったと後を追う。

一度だけ立ち止まって振り返った。

「ちび……」

と、小さくモニカがつぶやいた。

目の端に光るものが見え、ドロシーは慌てて視線を逸らした。見てはいけない気がしたのだ。

大きな一頭と小さな一頭は街道を途中で離れると、山のほうに向かって去っていった。

風が一度だけ強く吹いて、森の葉がざわりと鳴った。

それでぜんぶ終わり。

蒼い月だけが街道の砂利を白々と輝かせていた。

†

「とまあ、そういうわけで三日ほど帰るのが遅れてしまったわけです」

「ま、言い訳として聞いておいてやる」

ナイアルが言った。

「これも仕方ないことなのですー。ほら、浮世の義理っていうか。年上としての責務というかですねぇ」

「俺にはな――」

ナイアルが冷め切ったコーヒーに口をつけながら言った。

「話を聞いていて、おまえがしっかり者に見えるってのが納得できん」

「ひ、ひどいことをー！　あんまりですよぅー！　ルーアンのホテルで待ち続けて、ナイアル先輩はきっと精神がささくれだってしまったんです」

そう言ったら、ぎろっと睨まれた。

先輩の机の上には、原稿が山となって積まれている。あれだけの量を自分が学園に行っている間に書いたのだろうか。いつもの三倍くらいはありそう。

――もしかして、自分がいないほうが原稿が進んでる？

恐ろしい考えに思い至ってしまって、ドロシーは慌てて首を振った。

「で？」

ナイアルが言った。

「で、とは？」

「そのあと、どうしたんだよ」

「あー、いちおう翌日に四人で学園長さんにぜんぶ報告しました」

実際には帰ってすぐにドロシーは学園長室を訪れている。帰りが遅くなったときの万が一を考えて相談してあったからだ。ただ、夜も遅かったから、全員が無事だったこともあって、詳しくは翌日と言って寮に戻った。

旧校舎の柵の壊れた箇所は修理されることになったし、遊撃士を呼んで、魔獣の残りを駆除してもらう手配もされることになった。

ただ、拾ったのがウリボアの子どもだということは黙っていた。魔獣を拾ったなんて知ったら卒倒してしまう。野生の猫だったということにした。

事情を知った学園長は理解を示してくれたものの、危険なことに首を突っ込んだからと、三人娘に三日間の補習を課した。まあ、それくらいで済んで幸いだ。

三人娘を返してからドロシーにもお説教がきた。まったくあなたは大人でしょう。子どもと一緒になってうんぬん、と。それも仕方ない。甘んじて受けてきた。最後に、でもあの子たちの面倒をよく見てくれましたと礼を言われ、やっぱり良い人だと思うドロシーである。

「で、これが矢で吹き飛ばされる直前のポールバットの写真でして」

至近距離からのフラッシュで色が飛んでしまって出来はあまりよくないのだが。

「おまえ……ちゃんと撮ってたのかよ」

「はい。ほら、ちゃんと瞳にハイライトが入ってるでしょ。明りは大事なんです」

「モンスターが生き生き取れても意味ねーだろ！　てか、俺の写真はこの魔獣以下だって言いたいのか、おまえは！」

「まあ」

「おいこら」

「冗談ですってばぁ。やだなあ。センパイ」

おまえが言うと冗談に思えないんだよ、とナイアルが言った。

「まあまあ、気を取り直してください。で、こっちがコウリボアを帰す直前の記念写真です」

森の中。コウリボアを抱えているモニカの写真。

モニカの両脇にはパーブルとアリスがいる。

「どーすんだよ、これ。教師たちには見せられねーんだろ」

「だから、こっそり送ってあげようと思ってるんですよう」

三人ともが笑顔だ。

フラッシュに光る瞳にはハイライト。

たぶん、一生忘れない。
しばらく写真を眺めていたナイアルだったが、指ではじいてドロシーに返した。
「ま、いいんじゃねーか。よく撮れてるし」
「ありがとうございます」
「誉めてねえ」
「今、誉めたじゃないですか」
「聞き間違いだ」
まあ、こういう先輩だとドロシーは知っている。
「何笑ってんだよ。しかし……ポルターガイストの正体が拾った魔獣の子だったとはな。面白いが、新聞ダネにはならねーなあ」
ナイアルが言ったので、ドロシーはすかさず訂正した。
「そうでもないです」
「は？」
「実はですね。ひとつだけおかしなところが残ってるんですよ」
「おかしなところ？　さて、聞いてたかぎりじゃ、わからなかったけどな」
ナイアルが首を傾げる。
「気づきませんでしたか？　アリスさんが言っていたじゃないですか。物音を聞いた子が寮に

はけっこういるって」
「ああ。そういや言ってたな」
「でも、コウリボアがいたのはアリスさんたちの部屋の箪笥の中だけ。そこでの物音なんて、そんな遠くまで響くでしょうか？」
「え？　おい待て」
「寮の反対側に部屋がある生徒からもわたし聞いたんですよね。確かに家具が鳴る音がしたって」
　ごくり、とナイアルが唾を呑んだ。
「おいまさか」
「まあ……。怖がるだろうから、彼女たちにはこのことを明かせないんですけどねー」
「お、俺が怖がるのはいいのかよー」
　もちろん、とドロシーはにっこりとほほ笑んだ。
　ナイアル先輩だから言えるのだ。

第2話　ラッセル博士の発明品

「ああ、惜しいっ」
ドロシーの残念そうな声に、ナイアルは手帳から目を上げた。
窓際の席に座る相棒が唇を噛んでいる。手には愛用のオーバルカメラを持っていた。
「何が惜しいって？」
「ひつじさんです」
「は？」
窓の外を指して言われたがさっぱりわからない。
「もうすこしで羊さんなのに、船が遅すぎて……ああ、形がくずれちゃうぅ。もっと早く廻りこんでぇぇぇ！」
「うるせえってのー！」
ナイアルは手帳を丸めてドロシーの頭をぽかりとやる。
「おおう」
「船の中にいるのは、俺たちだけじゃねーだろっ。少しは控えやがれ。あと、こいつ、いちおう最新型だからな？　これ以上スピードは上がらねえよ」
ナイアルは背もたれを叩きながら言った。
リベール通信社の記者であるナイアルとカメラマンであるドロシーは、ただいま飛行船に乗って王都から工房都市ツァイスへと向かっている。乗っている空飛ぶ船はいちおう王国を就航しているものとしては最新型だと聞いていた。
つまり、これより速い船は王都の軍にしかない。
ドロシーに窓際の席を譲り、ナイアルは次に書くべき記事の資料に目を通し、取材の段取りを考えていたところだった。
相棒のドロシーが奇声をあげるまで。
「ううう。美味しそうでしたのに」
「俺にはつぶれたシュークリームにしか見えねえが」
窓の外の雲に目をやりながら言った。それから気づく。ちょっと待て。いまこいつ、あれが羊に見えたとか言っていなかったか？　感想が美味しそうでいいのか、こら。
「美味しそうですよう。ほらほら」
言いながらカメラの背後に付いている投映板を見せてくる。そこには記憶子に保存される前の撮ったばかりの映像が廃棄されずに映っていた。とりあえずシャッターを押しておくところがドロシーらしい。
雲だった。
どう見てもつぶれたシュークリームそっくりだ。
「どこが羊だ？」
「右に三十度ちょっと回転させると、ほら、ここが足に見えるわけですね。こっちが角。ほらほら、

羊っぽいですよぅ」

「回転……って」

「くるっと。頭の中で回せますでしょ？」

「いやさっぱり。のっぺりしてて、そんな凹凸があるようには……」

「ちゃんと影があるから形が予想できますってば。まあ、たしかに先輩にはこの一枚しか見せてないのですが、窓から覗いてるとですねぇ。ちょっとずつ船が進んでいるから、もっと把握できるわけでして――」

ドロシーが言いたいことと理屈はわかった。

早朝の陽射しが斜めから雲を照らしていて、確かに今は雲の立体感を把握しやすい時刻ではある。

それにしたって、とナイアルは思う。自分には無理だ。

外から見た輪郭と、わずかな凹凸の情報を繋ぎ合わせて被写体の立体的な形を思い描き、それを頭の中で自在に回すことなんて。

いったいこいつはどういう脳の構造をしてやがるんだ。天才カメラマンの頭の中をかち割って見てみたい気になる。

まあ噂では、おもちゃ遊びを積み重ねた子は、頭の中でおもちゃをくるくる回転させて、どの方向からでもお絵かきできるのだそうだが――。

ナイアルは昔から平面の上に書かれた活字を追うほうが好きだった。

――第一、そんな芸当ができたら文章で勝負してねえよ。

とも思う。

「あっ！　先輩、先輩！」

惜しい残念を繰り返していたドロシーが、またわめきだす。

「今度はなんだよ……」

「ほらほら！」

窓の下のほうを指さしている。

ドロシーの身体越しに覗き込むと、大きな街が見えた。北側にある小高い丘の上に、ひときわ巨大な、まるでお城のような建物が建っている。

工房都市ツァイスの要――中央工房だ。

「おっ。やっと着いたか！」

「ティーちゃん元気でしょうか」

「どうせ会うことになるさ。それより、今回は温泉に浸かってる暇はねえからな」

「もちろんですよぅ！」

「何故だろう。その台詞を聞いて、俺はいま無性に不安になったんだが」

「センパイってば、心配性ですねー！」

ナイアルはこっそりとため息をついた。

――誰がそうさせたんだろうな。

†

飛行船の到着は定刻通りだった。

昼少し前。太陽が空の頂点へともうすこしで登り詰めようとしている。

ナイアルはドロシーと、船を降りたその足でオーバルエンジンの権威であるラッセル博士の家へと向かった。

アルバート・ラッセル。

『導力革命の父』と称される天才技術者である。

彼の師であるエプスタイン博士が、七耀石から導力エネルギーを取り出すことに成功したのが五十年前のこと。その後、弟子であるアルバート・ラッセルは、導力技術を発展させ、導力によって動く機械――導力器（オーブメント）の数々を世に送り出した。

ラッセル博士がいなければ、導力器の普及には今の倍の時間がかかっていただろう。

専門家たちは口をそろえてこの五十年の導力器の歩みを語った。

その博士も、そろそろ七十に手が届く。資料の写真を見るかぎり、髪はすっかり白くなっていて、年齢相応の顔をしていた。だが、旺盛な発明心は今も衰えることなく、工房都市ツァイスに住み、新たな導力器を産み出し続けている。

「とてもそんなすごい人には見えなかったんですよねー」

そう返したら、ドロシーはぽかんとした顔をナイアルに向けてきた――相変わらず自覚のないやつだ。

「その言葉、そっくりおまえにも言ってやりたいけどな」

飛行船から見えた中央工房を右手に見て、巨大な、エスカレーターと呼ばれる導力駆動の自動昇降階段を降りる。

そのまま大通りを南へと下った。昼の、人通りの絶えない道をせっせと進む。

居酒屋を右に曲がれば、正面に二階建ての家が見えてきた。

ラッセル工房と呼ばれる博士の家だ。

「さて、家に居てくれればいいが」

扉を叩いたが返事はなかった。

取っ手を回す。かちゃりと軽い手ごたえが返る。鍵は掛かっていなかった。遠慮なく開ける。

ラッセル家を一度でも訪れたことのある者なら、みながそうする。そうしろと言われていた。

そうして、そうっと中を窺って、逃げ出す準備をするのだ。

研究に熱中した博士は、呼びかけに返事など返さない。声が返らないから不在とは限らない。

そして、もしいるのならば……。
「セ、センパイ……」
ドロシーが怯えたウサギのような声を出した。
低い、振動音が床を伝わってくる。
「やべぇ……」
案の定だった。
「くるぞっ！　逃げろ！」
次の瞬間、爆発音があがる。同時に建物が大きく震えた。どす黒い煙がどこかから噴き出してきて、あっという間にナイアルたちの視界を覆った。
「げほっ！　げほっっっ！」
「けっ、けむっ。けむいですよぅ！」
即座に往来へと飛び出したものの、煙を吸ってしまって咳き込んだ。喉がひりひりするし、目が痛い。
振り返ると、二階の窓のひとつが吹っ飛んでいた。瓦礫と化した窓枠が庭に落ちている。黒い煙が建物から吹き上がっていた。
ナイアルは通りの左右を見廻す。あれだけの音がしたのに、通りに誰も飛び出してこないのがすごい。

——慣れっこってことかよ……。
アルバート・ラッセル。
リベール王国一の技術者にして天才発明家。
だが、十の発明を産み出すためには、百の失敗が必要だと公言して憚らない。そして研究に熱中した彼は周りが見えなくなることで有名だった。どこかの天才カメラマンのように。
話に聞いていたナイアルだったが、予想以上だった。
振り返ると、扉の向こうから咳き込む声が聞こえてくる。
「けほっ。けほっ、ううむ、パーツがひとつふたつ古かったようじゃな。ティータに頼んであっちから借りてくるかのう……。新しいパーツさえあれば、出力を十倍にしてもいけるかもしれん。よしよし」
まるで懲りてなかった……。
「よしよし、じゃねーよー！」
煙が晴れた。
視界が見通せるようになって、戸口の先に佇む白衣の老人が見えた。
「む？」
ナイアルを見て首を傾げる——アポイントメントを入れてあるのだが、忘れられたか？
「リベール通信のナイアル・バーンズですよ」

そう言って、手を差し出した。
「おう。新聞記者か」
ラッセル博士も握り返してくる。
「ところで君、空いてるなら手を貸してもらえんかの。ちと機械が壊れておってな。修理に必要なパーツがここにはないんじゃよ。その部品というのが……」
「ちょ、ちょっと待ってくれ。俺たちは別に博士の手伝いに来たわけじゃ……」
「なぬ？　なんじゃ野次馬か。なら用はないぞ。帰ってよし！」
背中を向けて奥へと立ち去ろうとするものだから、慌ててナイアルは博士の手を掴んだ。内心で叫ぶ。ここで逃がしてなるものか。ったく、とんでもなくマイペースのじいさんだぜ！
だが、超マイペース人間ならばナイアルだって慣れているのだった。
「用はあります！　こっちがあるんです！　博士の——」
必死で食い下がる。ナイアルにも記者の意地がある。
「——発明品を世間に紹介したいんです！　ぜひ！」
「わしの発明を？」
「ええ。まあ。『天才発明家アルバート・ラッセルの発明品』というタイトルの記事を書こうと思ってまして。博士の偉大な発明品の数々をぜひ！」
熱を込めて捲し立てる。
まったく事件記者の自分がどうしてこんな文化欄の記事を書くはめに、と思いつつだった。
これというのも、担当のファルツが温泉村の取材なんぞに飛んでいるからだ……。
発明、という言葉にラッセルの瞳の色が変わる。
ナイアルは内心でよしと拳を握った。
だが、後から考えればそれが災難の始まりだった気も、する。

†

「なるほど、わしの発明品を記事にしたいと」
「そうそう」
ナイアルはこっそり安堵の息を吐いた。どうやら取材の主旨を理解してもらえたらしい。幸先がいいぞ、と思う。
「ないぞ」
「……は？」
一瞬、何を言われたかわからなかった。
「奥の実験室に仕舞い込んでおいたのじゃがな。入りきらなくなったので引き取ってもらった」
「引き……ど、どこに？」

尋ねるナイアルに向かってラッセル博士は指を壁のほうに向けた。ナイアルの視線が彼の指先を追って動く。
部屋の中なのでイマイチ覚束ないが、ラッセルの指さしている方角は自分たちが飛行船から降りた方に思えた。
そちらにあるものと言えば——。
「中央工房じゃよ。あっちのほうが倉庫がでかいもんでな」
「あー……」
なんてこった。となると、街をもういちど横断して戻らないといけない。
「センパアイ、わたし、おなかが空きましたー」
場違いに陽気な声に振り返る。
戸口に立ったドロシーがひとさし指の先を口の中に突っ込んでいた——子どもかー
「む？　そっちの子は誰じゃ？」
「うちのカメラマンですよ。ドロシー、ほれ」
「あ、はいはい。ええと、わたしはですねえ、ドロシー・ハイアットですよぅ。それでもってこっちがポチ君ですー」
愛用のオーバルカメラを両手でもって前に突き出す。自分よりカメラを強調してどうする、とナイアルとしては言いたい。
「ほう。ぽちくんか」
「はい。いい子ですよぅ。かわいい写真をいっぱい撮ってくれるんです」
「ちょいと見せてもらえるかな」
はいどうぞ、とドロシーがカメラを渡した。
小さな導力器でもあるカメラを、ラッセル博士はためつすがめつしながら何度もひっくり返している。こういった小さな導力器も、いわばラッセル博士の発明品の子孫である。己の手が入っていなくても興味があるのだろう。ナイアルと話していたときと比べて別人のように瞳が輝いている。
「なるほど。小さいがよくできておるな。メンテナンスもきちんとされているようじゃし……。おい、ここの計器が示しているのは何じゃ？」
「被写界深度です。こっちが絞りで、こっちがシャッタースピード。オートにもできますけどぉ、わたしはマニュアルが好きですね。この機種は色々な設定を遊撃士さんたちの使っている導力器のようにここのクオーツをなぞって楽に変更できますし。あ、倍率はこっちです。限度がありますから、望遠やマクロはレンズを取り替えます。カメラはやっぱりレンズですよねっー」
「ほうほうほう。順調に進歩しとるようじゃな」
「記憶子に蓄えられる写真の数も毎年のように増えてますしー」
「うむ」

「でも今は撮った写真が溜まったら、工房に預けて焼いてもらわないといけないんですよねー。記憶子だけを持ち歩けて自分で取り替えられたり、焼き付けられれば、もっと楽になるんですけど」

「できんことはないぞ。そうじゃな、わしがすぐに思いつくアイデアだけでも――」

「待った待った待ったー！」

ナイアルは声を張り上げた。

ダメだこのふたり。誰か止めないと延々と専門的な話を続けかねない。それでは何時まで経っても取材が始められない――俺がよっぽどしっかりしねえと。

ナイアルは気を引き締めた。マイペースな天才ふたりを相手にして、どこまで自分が仕切れるものかと不安ではあったが。

「ドロシー、カメラは用があるまでしまっとけ。ラッセル博士、先ほどの話ですけれど、発明品は中央工房にあるんですね？」

ドロシーが不満そうな顔を隠さずに、それでもポチ君をポシェットにしまった。

博士のほうも新型カメラに未練の視線を送りつつ、頷く。

「そうじゃよ。とくに、ここ数年で作ったやつは、みんなあっちじゃ」

「中央工房って、あのお城みたいにおっきな建物ですねよー。ティーちゃんが働いているっていう」

「工房都市ツァイスの中心じゃ。最近は何かとあっちに行くことも増えてな……っと、ティー……ちゃん？ そりゃもしかして、わしの孫のティータのことか？」

「はい。いっしょに温泉入ったりしましたよう」

思い出すエピソードがそこかよっ、とナイアルは心の中だけで突っ込む。

「なんじゃ、知り合いか。それは話が早い」

「はい？」

「ティータの友人となれば、わしにとっては孫も同然」

――どうしてそうなる。

「というわけで、ちょっとひとっ走りしてだな。中央工房からパーツを持ってきて欲しいんじゃが――」

結局はそこに行きつくらしい。やれやれとナイアルは観念した。

†

猫が出迎えてくれた。

「にゃ～～ご」

「わあー　かわいいですねー」

「アントワーヌっていうんですよ、ドロシーさん」
抱きかかえた猫を撫でながらティータが言った。
「お姉ちゃんでいいよぅ。エステルちゃんにもそう言ってたでしょ。ティーちゃん」
「あ、は、はい。あの……ドロシーおねえ、ちゃん？」
「はいはい」
にこにこぉっとドロシーがほほえむ。
ラッセル博士の孫娘ティータが居たのは、中央工房四階の医務室だった。受付に用件を伝えると、博士から事前に入れてもらった連絡のおかげで、ティータの居場所はすぐにわかった。
ティータ・ラッセルは、大きな蒼い瞳、金色の長い髪をした少女だ。
歳は、おそらく十歳をあまり越えていない。よく知る棒術使いの遊撃士の少女よりも、ふたつか三つは若い。ナイアルからは、まだ子どもにしか見えなかった。
もう中央工房で働いているというのだから信じられない。一人前の技術者として認められているらしい。それどころか――クーデター騒ぎのときには、重要な秘密を握ったラッセル博士とともに逃亡生活を送っていたとかいないとか……。
そのあたりも聞いてみたいところだが……。
ティータとドロシーは、会うやいなや、熱烈な再会の儀式（抱き合って跳びはね、言葉にならない叫び声をあげる、というあれだ）を敢行し、落ち着くまでナイアルはぼうっと眺める―

かなかった。やれやれ。それから、ティータは足下に寄ってきた猫を抱え上げ、ドロシーに紹介したというわけだ。

「なんで医務室に猫が……」

「この子、中央工房に住んでるんです」

ナイアルの問いに答えを返したのはティータだった。

「そりゃ見ればわかるが、問題はなんで医務室なんぞにいるのかってところなんだがな」

「この子は気まぐれですからね。まあ、猫なんてものはみな気まぐれですけど」

そう言ったのは、医務室の主であるミリアムという名の先生だ。女医である。名札の付いた白衣に両の手を突っ込んだまま、アントワースは、誰が飼っているわけでもなく、自由気ままに中央工房を闊歩しているのよ、と続けた。

「動物が与える癒しの効果については、最近リベールでも注目されているの」

「へえ」

「帝国の論文で発表されたのが数年前のことで。まあ、早い話が、この子がいるだけで、中央工房の技術者たちのストレスは、多少なりとも緩和されているってこと。なので、わたしも放任してるわけです」

ミリアム女史の言葉を聞きながら、ナイアルは、アントワースを撫でているドロシーとティータを見る。

——なるほど。

ドロシーはいつでもふわっとした表情をしているが、今はそれに磨きがかかっていた。

「ええと、それで、ナイアルさん」

ティータがようやくアントワースをドロシーに預けて、ナイアルのほうを向いた。

「おじいちゃんの発明品を紹介して欲しい、って聞いたんですけど」

「おう。そうそう」

「えっと……」

「あのじいさん——ラッセル博士は、世に出た発明品はわずかで、それの何倍もの発明をしている、って聞いた。そいつを紹介してくれると嬉しいんだがな」

ナイアルが水を向けると、ティータが困ったなという顔つきになった。おや、と思う。ラッセル博士は、孫娘に話を通しておいてくれると言ったのだが。

「あの……おじいちゃんの発明は、工房の倉庫に置いてもらってるんですけど」

「倉庫が遠いのか？　あるいは見せられない理由があるとか」

ふるふるとティータが首を振った。

違うらしい。

「地下工場のフェイさんに頼めば、すぐにコンベアで送ってもらえると思うんですけれど……倉庫にある発明品って……その……」

「ひとつならここにもあるわよ？」
医務室の奥へと消えていたミリアムが、腕の中に何かを抱えて戻ってきた。
なんだろう、とナイアルはいぶかしむ。
抱えていたものを、テーブルへと置いた。ゴトッと重そうな音が響く。
「にゃぁお～ーん」
ドロシーの腕の中でアントワーヌが鳴いた。
「なん……だ、こりゃ？」
「ポンテーヌ」
「はい？」
ミリアムの返事は短すぎてわからない。ティータが補足してくれた。
「おじいちゃんの作った導力犬です。導力で動く機械のペットなんです。あのその……いちおう、いぬ、です」
「……は？　いぬ？　この焼きたてパン一斤に耳をつけたようなシロモノが？」
「首輪のところにアーツを駆動させる仕掛けがあってね……」
ミリアムが、遊撃士がクオーツをなぞるような手つきで、垂れた耳っぽいものが付いたところにある金属の輪を撫でた。耳の近くに付いていたふたつの丸い窪みに、カッ、と光が点る──
──うぉー　びっくりした。なるほど、これが目か。

「ポンテーヌ、待て！」
がしょん、と音がしてポンテーヌと名付けられた導力機械の身体がひっくり返る。
「これが服従のポーズなの」
「いやあんたいま待てって言わなかったか？」
「撫でると喜ぶわよ」
ナイアルの言葉を無視して言った。
──撫でろ、だと？　これをか？
おそるおそる金属光沢に輝く腹を撫でる。
げしょしょ、とカエルをつぶしたような声が身体の中から響いてきた。どうやら口はないようだ。
「可愛いでしょ？」
「はっきり言って気持ちわりぃ」
「残念だわ。みんなそう言うの」
ミリアムが肩をすくめた。
「まあ、けどすげえのは認める。導力で動く古代文明の機械人形なら見たことがあるが……。こいつは小さい上に言葉を理解するんだな」
ナイアルの感想を聞いたティータが嬉しそうに頷いた。祖父の発明品を誉められたからだろ

う。

「四八の駆動箇所があって、二五六通りの動きができます。口頭で指示できる命令セットは一〇二四にものぼるんですよ！　本当の犬みたいに人間の何倍もの嗅覚や聴覚を持たせてあるから、例えば猟犬の代わりにしたりとか。とっても役に立つんです」

「へえ……」

そいつはますますすごい。ナイアルはさすがはラッセル博士だと感心して。

それから気づいた。

こんな素晴らしい発明品ならば、ニュースになっているはずだ。だが、ナイアルはそれらしい記事を読んだ覚えがない。

「こいつ、何か問題あるのか？」

ナイアルが問いかけた途端に、ふいっとミリアムは視線を逸らし、ティータが笑みを引きつらせた。

†

「実は、ボンテーヌの頭脳はこの身体の中に納まらなかったんです」

ティータが言った。

「脳が、ない？」

「はい。音声を認識して行動パターンを実行させるには、とっても賢い導力駆動の演算機がいるんです。でも、さすがにおじいちゃんも、ここまで小さくはできなくて……」

導力犬を撫でながらティータが言った。げしょしょ、と相変わらず犬とは思えない声でボンテーヌが鳴いた。喜んでいるのだろうか。

「じゃあ、こいつはどうやって動いているんだ？」

「この子の脳は、中央工房の《カペル》なんです」

「《カペル》……ってのは、確かこの工房にあるでっかい計算機のことだよな」

巨大なデータベースをもち、複雑な計算を瞬時にこなすというツァイス中央工房自慢の高性能演算処理装置だ。

確か黒のオーブメントの解析にも力を発揮したと聞いている。

「はい。ボンテーヌは、起動させると無線による導力通信で《カペル》と繋がるようになっていて、指示した命令を解釈してこの子を動かすんです、けど」

「けど？」

「あの……そんなに遠くまでは命令が届かなくって、せいぜい、動かせるのは工房の中くらいまでで」

ナイアルはようやく理解した。つまり、複雑な命令を理解して実行するためには《カペル》

級の計算機の支援が必要で、しかも限られた範囲でしか動かせない。
なるほど。それでは実用にならない、わけだ。
――動かなかったら、ぬいぐるみ以下だもんな、こいつ。
「止まっちまうんじゃ仕方ねえな……」
「いえ、その」
「ん？　違うのか？」
「動かなくなるだけならいいんです、けど……たまに、暴れたり、噛みついたり」
「か、噛みつくぅ？」
「だから、あの、口を取っちゃったんですけど」
ナイアルは導力犬を見下ろした。
腹を見せたまま耳をぱたぱたさせてやがった。短い脚をゆらゆらと宙を泳ぐように動かしていた。断末魔、という単語が頭をよぎる――煙をあげたりしねえだろうな？
先ほどのラッセル工房での事件を思い出す。
なんとなく、発明品を見せてくれと言ったときのティータの反応が理解できたような気がした。
「それでも可愛いから、たまに取り出して動かしてあげてるの。倉庫に置きっぱなしだと可哀そうじゃない？」

ミリアムがポンテーヌを撫でながら言った。
「その意見には……」
「賛成してくれなくて残念だわ」
ミリアムが残念そうに言った。
ティータが頷く。
「まあ、それで、こいつだけ医務室にあった理由がわかりましたが。……残りは倉庫なんだな？」
「あの……よろしければ案内します」
「そうだなぁ。頼んでもいいか？　こっちもまあ世に出なかった発明品ってことで取材に来てるわけだし。博士の名誉を落とすような記事にはしねえからさ」
「あのあの、斬新な発明には失敗がつきものなんじゃ、って、おじいちゃんが」
「ああ。わかってる」
――天才の所業がはた迷惑なのもな。
ナイアルはちらりと相棒のほうを見た。
猫を抱きかかえていたドロシーがちょうどこちらを向く。なんですか？　とばかりに首を傾げた。
その隙にアントワーヌが腕から逃れて床に着地。たたっと部屋を出ていってしまった。
「ああっ！　猫さぁん！」

「逃げられたぞ。構いすぎだったんじゃねえのか」
「そんなことないですよう」
「ヤキモチ焼いちゃったのかもしれませんね。みんながポンテーヌに注目していましたから」
ティータが言った。
「可愛かったのに……ぬくぬくさんでしたよー」
「あら。こっちだって、抱きしめるとひんやりして気持ちいいのよ。特に夏」
張り合うなよ、とナイアルとしては言いたい。それに冷涼さは、犬に求めるものじゃないんじゃないか？
それはさておき、仕事だった。
「じゃあ、残りの発明品を見せてくれるか？」
「はい」
発明家の孫娘は、ナイアルとドロシーの前に立って歩き出した。
腕の中に導力犬を抱えたミリアムが、手を振って医務室を送り出してくれる。
三人が昇降機で向かったのは地下だった。

†

中央工房――。
中・高層建築物がほとんどないリベール王国において、地上五階、地下一階のこの工房は群を抜いた巨大さだ。北部の丘の上に建てられていて、何十人もの技術者が昼夜を問わずに働き続けている。
リベールが、導力器技術で頭ひとつ抜けていると他国から言われる由縁は、七耀石を豊富に産出するからだけでなく、この中央工房の存在が大きかった。
巨大な建物だけに、上下の移動には箱型の昇降機が利用されていた。もちろん階段もあるのだが、そちらを利用する者は滅多にいない。
ナイアルたちは昇降機で地下工場へと降りた。
ベルトコンベアと呼ばれる荷物の配送機の前に、ひとりの女性が待っていた。
フェイ、と名乗る。
ひとりでこの配送機を動かしているらしい。
メモ紙をティータがフェイに渡した。
「おじいちゃんの発明品は、ぜんぶ同じ番号を頭に付けて仕舞ってあるんです」
フェイが番号を計器盤から打ち込むと、コンベアが動き出して荷を運んでくる。工房内のあらゆる部署に繋がっているという配送機が、倉庫の奥からラッセル博士の発明品を運び取って運んできた。

「とりあえず、十個くらいでいいですか？」
ティータが言った。
「ああ。充分だろう。おい、ドロシー。カメラを用意」
「はぁい」
ポショットからオーバルカメラを取り出すと、あちこちいじり始めた。地下だけに明りは導力灯のみ。少し薄暗いから、その調整かもしれない。
「えっと、えっと」
届いた箱をティータが漁っている。
「あ、これはどうでしょう？」
手にした小さな品をナイアルに渡してきた。
「メガネですかぁ？」
「眼鏡だな」
それは確かに眼鏡だった。それ以外には見えない。透き通った丸いガラスを鼈甲のような赤い縁で支えていた。蔓の部分がやや太くて小さなクオーツが嵌っていた。
ナイアルがメガネを手にすると、ドロシーがカメラを構えた。
――ちょっと待て。そうなると、ひょっとして、必然的に俺がぜんぶを試すことになるのか？
「先輩、掛けてみてください」
「あ、ああ……」
掛け心地は普通だった。度は入ってないがクリアによく見える。
「それはえっと、導力眼鏡です。蔓の右側にあるクオーツで導力器を起動させられます」
ティータが言った。
「あー。これか」
指でなぞりあげる。
「動かすと、導力波、つまり、導力エネルギーの流れを見ることができるんですよ。七耀石の鉱脈を見つけるのに役立つかもしれない、っておじいちゃんが言ってました」
「ほう、そいつはすごいな」
本当ならば画期的な発明品だ。導力波の流れが見えるなんて。
「その代り、導力波しか見えなくなります」
目の前が真っ暗になった。
何も見えない。
「はい、チーズですぅ」
シャッター音とともに、今度は真っ白な光が視界いっぱいに広がる。太陽を直接見てしまったときのよう。思わず目を背ける。身体を捻ったらバランスを崩した。
「うあっと！」

転んで、したたか腰を打った。痛い。涙が滲んでしまう。

「い、いきなり閃光なんて焚くな！　びっくりするだろうが！」

眼鏡を外しながら怒鳴ると、ドロシーがぽかんとしていた。

「いえ。標準でしか撮ってないのですが。先輩がいきなりのけぞるから、何が起こったのかと……」

「なんだと？」

そこでようやく気づいた。

つまり、あの光はオーバルカメラの導力の輝きか！

腰を打ったナイアルに、ティータが申し訳なさそうな顔で謝ってくる。

「こいつは……使えねえな」

「はい。おじいちゃんも改良が必要だって……あの、だいじょうぶですか？」

「あ。ああ。どんどん見せてくれ」

なんとか笑顔を作る。

子ども相手に不機嫌な顔をしても仕方ないだろうと思ったのだ。なんといってもティータは一生懸命に説明してくれているのだし。

それにしても、風景を見るときは導力波が見えず、導力波を見るときは風景が見えない眼鏡とは……。それでは掛けたまま作業を続けることなどできない。

使い勝手が悪すぎる。

お蔵入りなのも道理だ。

「こっちは導力掃除機です」

今度は、ピザを五枚重ねたくらいの円盤を取り出してくる。下側にモップのような毛が生えていた。駆動させると、自動で床を掃除してくれる導力器らしい。しかも、ゴミを吸い取ってくれるという。便利なシロモノに思える。

「ただ、吸引力が強すぎて、中がいっぱいになっても吸い込もうとしちゃうんです。吸い込んでいっぱいになるたびに爆発しちゃうから……」

かえって掃除が大変になっちゃうんですよね、あ、あはは、とティータが申し訳なさそうに言った。

試しに動かしたら、ナイアルのズボンの裾を無理やり吸い込もうとした。引き千切られ、片方の裾が短くなってしまった。

「ご、ごめんなさい！」

「いいっていいって。次だ次」

次に見せてもらったのが体重計だ。

単に身体の重さを計るだけではなく、いくつかの身体的な数値を同時に知ることができるという。その値が、標準から大きく逸脱していたら警告が出る。

ナイアルが乗ると、不吉な警告音とともに、あなたは重すぎると指摘され、踏み台の表面が変化して、いきなり自動歩道のように動き出した！　ぐいっと足下が引っ張られ、転げ落ちそうになる。

「うおおおお！」

落ちないように必死で走った。

「ととと、止めてくれえええええ！」

「ご、ごめんなさい！　それ、停止スイッチないんです……」

ティータが無情な事実を告げる。

降りることに成功したときには汗だくになっていた。何度も荒い息を吐く。

体重が減った。

苦しそうに走るナイアルを、ドロシーが何枚も写真に撮ってくれたが、その写真だけは使わないからなと釘を刺す。

卵ひとつを加熱してくれる調理器というのもあった。生卵を固ゆで卵にしてくれる導力器なのだ。だが卵しか調理してくれない。

「それ……だけ？」

「はい」

ナイアルの視線がやさぐれつつあった。自分でも自覚できてしまう。

「と、導力器を家庭に普及させるためには、こういうものも必要だって」

「あー……。わからねえでもないが……。こいつも爆発したりするのか？」

倉庫にしまってあるということは、どこかに欠点があるのだろう。

「おじいちゃんが半熟卵のほうが好きなんです」

「お蔵入りの理由そこかよっ！」

卵があったら床に叩きつけていたところだ。

「わたしはどちらも好きですよぅ」

ドロシーが言った。聞いてないっつーの！

そんなこんなで、十点の発明品の説明をすべて聞く頃には、ナイアルは心身ともに疲れてしまっていた。ご機嫌だったのは写真を撮っていたドロシーだけだ。

苦労に見合う記事になるかどうか微妙なところだと思いつつ。

「お……終わりか？」

「はい」

ほっと息を吐いた。

そのとき、注意を促すような音が部屋に鳴り響く。通信機が鳴っている。フェイが慌てていた。

「どうした？」

一瞬で疲れが気にならなくなる。

記者の直観だ。ナイアルには問題が起きたらしいことがわかる。

それはある意味で、取るに足らないほどの些細な出来事で……だが、中央工房で働く人間たちにとっては重大な事件だった。

猫のアントワーヌの姿が見えない。捜索中だという知らせだった。

†

中央工房三階、設計室。

技師フーゴの証言。

「ここんところは、毎日のように午後のこの時間になると設計室に来てたんだよ」

フーゴは蓋を開けた猫缶を手にまくしたてた。

「この猫缶がお気に入りらしくてさ。あいつ、頭のいい奴だから、まだ残ってるの判ってるはずだし。食べに来ないなんておかしいなって」

フーゴは、中央工房に勤める技師だ。日夜、新型エンジンの設計で頭を悩ましている。

だが、今この時だけは彼の悩みはアントワーヌの所在だった。

アントワーヌが猫缶を食べに来ないなんて。

そんなことはこの三日間なかったことなのだ。心配でしかたがない。フーゴの表情がそう語っていた。猫のアントワーヌが、この工房でいかに愛されているかをナイアルは垣間見た気がした。

アントワーヌ失踪す――。

そのニュースは、またたく間に中央工房全体に広がり、上を下への大騒ぎになってしまい、ナイアルたちも捜索に手を貸すことになった。

ティータも含め、工房のみながアントワーヌ探しに出向いてしまうのであれば、取材も棚上げするしかない。

「しかし、猫一匹なんて、どこに潜り込んでてもおかしくねえぞ」

「でも、頭のいい子ですから、そんな変な場所には行かないと思うんです」

ナイアルのつぶやきにティータが応えた。

地下一階から、フーゴのいる三階へと上がったナイアルたち――ナイアルとドロシーとティータは、そのままひとつ上の四階へと探索の網を広げる。

「なんで、突然いなくなってしまったんでしょう？」

ドロシーの疑問に対する答えは、四階、医務室のミリアムが持っていた。

「すねちゃったかなぁ」
「すねた？」
「さっき、わたしがポンテ……ポンテーヌばっかりを構ってたから」
ナイアルの挟んだ問いかけに、わざわざ言い直してくれる。あの導力で動く犬もどき機械人形のことか、とナイアルは理解する。
「あー」
ドロシーが納得した顔になった。
「ヤキモチ焼いちゃったんですねー」
「猫がか？」
「猫さんだって、焼きもちやきますよー」
「そんなもんかね」
「センパイは人に構われようが嫌われようが気にしない人ですからねー。よくも悪くも。ここーの人ってやつですよぅ」
「ここー？ ……ああ、孤高か」
「それです」
まあ、新聞記者なんてやってると、どうしてもそうなりがちだ、とナイアルは心の中で思う。嫌われることを恐れていては真実は書けない。

「っと、そんな話は今はいいんだ。どうするよ。このまま闇雲に探すのか？ なんか心当たりとかないのかよ」
「暑い季節だと涼しい処に、寒い季節だと温かい処にいますよね、猫さんって」
「そういえば、冬だとたまに《カペル》の上で寝てたりします」
ティータが言った。
「高速処理中の《カペル》ってけっこうな熱を出すんです。だから……」
ツァイスが誇る高性能演算処理装置も、猫にとっては暖炉の代わりらしかった。
まあ、《カペル》が酷使されることなんて、この前の黒のオーブメント事件のような事でもない限りはそうそう起きないはずだ。たいていの演算は朝飯前らしいから。
ん？ ——何か引っかかったぞ。
「ベランダで寝てるほうが多いですけど」
「だろうな。それに、今は暑くも寒くもねえし」
「なるほど。では——わかりましたよ、センパイ！ 暑くも寒くもないのならば、アントワーヌはちょうど良い所にいるんです！」
ドロシー名探偵がえっへんと自信たっぷりに胸を張る。
「じゃあ、そのちょうど良い所ってどこだ？」
「それがわかれば見つかってるのでは？」

しれっと返された。
「おい……殴っていいか？」
ナイアルは丸めたメモ帳で叩くふりをする。
本気で叩いても痛くはないはずだが、ティータが怯えそうだ。かといってボケに突っ込まないでいられる性分でもなかった。
「冗談はさておいてですねー」
「おまえが言うと冗談に聞こえないんだよ……」
「あと探してない所は？」
「この四階の実験室と五階だけです」
中央工房は地下一階、地上五階だ。
「上まで行って見つからないときは、また戻って探すしかないです。どうしよう？……」
ティータが眉根を寄せて考え込んでいる。
探している他の職員からもまだ発見の連絡はなかった。捜索を始めてそろそろ一時間になる。
ナイアルは先ほどから何かが引っかかっていた。
さっき、ふと思いついたことがあるのだ。だが、ドロシーのボケに突っ込んでいる間に、霞となってそのアイデアは消えてしまった。
「なあ、ドロシー、もう一回ボケてくれないか？」

「は？」
「今さっき、何か思いついたんだがな。おまえがボケてくれたせいで、そのアイデアが吹っ飛んだんだよ。もう一度やってくれれば思い出すかもしれん」
「センパイ……何を馬鹿なことをおっしゃるんですか」
「おう。俺が悪いってのか」
「はい。わたし、生まれてこのかた、ボケたことなどありませんよう」
「ありがとう。ナイスボケだ」
「だから、ボケてませんってば」
「わかったわかった。おまえはボケてない。天然なだけだよな」
ドロシーがぷっと膨れっ面になった。不満そうだ。脇に立っているティータが困った顔のまま額に汗を流し、ミリアム先生が苦笑を浮かべている。
——しかし漫才やってる場合じゃねえな。
「思い出しましたか？」
「いやぜんぜん」
「忘れないためにメモ帳を持っているのでは？」
「うぐ」
正論だ。まさかドロシーに諭されるとは。だが、ナイアルにも反論はある。メモを取るため

にはそれなりの時間が必要だ。風景に限るとはいえ、一度見れば忘れない、というドロシーの記憶力が尋常ではないのだ。

ふつうの人間は機械ではないから、そこまですべてを覚えていられない。

――待て、今何か引っかかったぞ。

「機械……そう、あの犬だ。《カベル》の脳……高速演算処理の脳との組み合わせ……確か言ってたよな。『人間の何倍もの嗅覚や聴覚を持たせてある』って」

†

がしょん、がしょん、がしょん。

機械音を立てて導力犬ポンテーヌが廊下を歩いている。

時折り立ち止まると、左右に首を振ってからまた歩き出す。

「あれで臭いを追っているんです」

ティータが言った。

「なるほど」

「犬の嗅覚は人間の一億倍って言われてます。臭いの種類にもよるんですけど。ポンテーヌも、同じくらいは可能だって、おじいちゃんは言ってました」

「一億……想像もつかねえな」

「えーと。わかりやすく言うとですね。靴下の臭いを覚えさせれば、その靴下を一億個に切り裂いた欠片のひとつでも残っていれば後を追えるということだ――って、おじいちゃんが」

「その例えはわかりにくすぎる！」

――一億個に切り裂いた靴下とか想像できねえし。

まあ高性能であることだけは理解できるけれど。

「でも、さすがはナイアル先輩です！　ポンテーヌに、アントワーヌの後を追わせるなんて、よく思いつきましたねー」

ドロシーが言った。

「おまえがボケなけりゃ、もっと早く思いだせたんだがな」

猟犬の代わりもできる、というティータの説明が頭の隅に引っかかっていた。

行方不明の猫を探すのに役立つかもしれないと思ったわけだ。

ミリアム先生にポンテーヌを再び引っ張り出してもらい、アントワーヌを追わせることにした。

アントワーヌがいつもじゃれているというぬいぐるみを嗅がせて臭いを覚えさせ、ナイアルたちが最後にアントワーヌを見たこの医務室から後を追わせてみた。

事前にプログラムされていれば、調練なしに実行できるのが機械のいいところだ。融通は利

かないが。
　四階の医務室からスタート。廊下を歩いて左へと曲がり実験室へ。いつもならそこに立ち寄るのだというが、ポンテーヌは見向きもせずにさらに歩いてゆく。
「やっぱりすねてたんでしょうか」
「かもな」
　がしょん、がしょん、がしょん。細い廊下をポンテーヌは突き進む。
　扉の前で止まった。
　げしょしょしょ、と鳴いてから、しん、と静かになる。
　動かない。
「追って……いるんだよな？」
「はい。たぶん」
　ティータが申し訳なさそうに言った。
「動かなくなった機械は蹴ってみろって、編集長が前に言ってましたですよう」
　ぴこーんという音とともに、目にあたるライトが赤と青に目まぐるしく点滅した。
　ぎゃぎゃぎゃー　と叫ぶ。
「ドロシー、おまえな、不要に怯えさせるなよ」
「編集長が言ったんですってば」
「わかったわかった。……ティータ、どうして動かなくなったんだ？」
　ポンテーヌを抱き上げて、ためつすがめつしていたティータに聞いてみた。
「故障じゃないみたいです……けど……あっ！」
　わかりました、と言ってから犬を下ろし、正面に立ちはだかる扉を開けた。
　扉の向こうは階段になっていた。
　利用する者が少ないと言われる地下から五階までを結ぶ階段だ。なるほどとナイアルは思う。見つからないのはこの階段に来たからかもしれない。
　ふたたびポンテーヌが歩き始める。
「なんだ。扉が開けられなかっただけかよ」
「取っ手に前足が届きませんもんね！」
「届いても無理だろ」
「いえ――」
　ティータが言った。
「それはできます。おじいちゃんのプログラムした二五六通りの動きの中に確かあったはず」
　後ろ足で立ち上がったポンテーヌが、両前足で扉のノブを回しているシュールな光景が頭に浮かんだ。
「なんでそんな動きだけ器用なんだよっ！」

「おじいちゃんが『役に立つから』って」
「愛玩動物犬にいらねえよな、そこー　明らかに！」
ティータが首をすくめた。
そんなティータをかばうようにドロシーが抱きかかえる。
「センパイ、こんなかわいい小さな子を怯えさせちゃだめですよぅ」
「あのな……」
――頭、痛ぇな。
ポンテーヌは上下に続く階段のうち、昇り階段のほうへと歩いていって、階段の一番下で止まった。
今度はナイアルにも理由がわかる。
「昇れねえんだな」
「ですねー」
導力犬の短い脚では段差を昇れないのだ。
同時にナイアルは気づいた。ポンテーヌは上を目指している。だが、缶詰を抱えてポンテーヌを待っていたフーゴは三階の設計室の住人だ。
「けど、今日は三階に降りなかったわけだな」
「上に用があったんでしょうか」

ドロシーが言って、ナイアルが「どんな用だよ」と突っ込んだ。
そのときナイアルは気づくべきだった。
ナイアル自身が言った言葉なのだ。
ポンテーヌには扉が開けられなかった。ならばアントワーヌには可能なのか。
そんなはずはない、と。
五階へと辿りつき、再び扉を開けて廊下へと出る。
リベール王国一の演算装置《カペル》のある部屋――演算室から、黒尽くめの男が廊下へと飛び出してくるところに出くわした。男の腕の中には激しく暴れる猫が一匹抱えられていて、扉の奥からは「ドロボーだー！」と叫ぶ職員の声が聞こえた。

†

ティータがとっさに叫ぶ。
「ポンテーヌ、攻撃(ゴー)！」
階段を昇るために抱えていたドロシーの腕の中からポンテーヌが飛びだした。
そのまま黒尽くめの男へと向かってゆく。
ガウウ！

と唸って噛みつこうと飛びかかる。
男の脚にぶつかって、そのまま床に落ちた。
「大変です、先輩！　口が無いから噛みつけません！」
「見りゃわかるよ！」
だが、ボンテーヌは健気にも床に叩きつけられても再度飛びかかっていった。
今度は前足の爪を思い切り伸ばして引っ掻きにかかったのだ。
爪が男のズボンを切り裂き悲鳴をあげさせる。
その間、ナイアルも黙って見ていたわけではない。
「おいこら、ちょっと待て！」
男の元へと走り、捕まえようと手を伸ばす。だが手は空を切った。
黒尽くめの男は、五階の南側にある扉を開いて外へと出る。そこはベランダになっているのだ。
脚にボンテーヌを絡みつかせたまま男はベランダに出て、そこで立ち往生した。
「残念だったな――」
ベランダは幅にして二アージュもない狭い張り出しだった。遥か向こうにツァイスの街並みが見てとれるし、真下で営業している大きな屋台が、ドロシーの持っているカメラくらいの小ささに見えてしまう高さだ。

「ここは五階だ。うっかり落ちたら助からねえぞ？　逃げられねえんだから観念しろって。ほら――」
大勢の足音が近づいてくるのが聞こえる。
「みなさんも、お揃いだ」
くそっ、と叫びながら男は脚を振り回して爪を立てていたボンテーヌを振りほどいた。
がしゃん！
嫌な音を立ててナイアルのいた扉のすぐ脇の壁にぶつかり――落ちた。
首を一度だけ持ち上げてボンテーヌがアントワーヌのほうを見る。
目の光が消えた。
「ボンテーヌー！」
ティータが叫んだ。
「往生際が悪いぞー！」
ドロシーが涙声になって言った。
「ひどいですー！」
「にゃぁお～～ん!!!!」
ナイアルたちに負けじと叫んだのはアントワーヌだった。最大級の警戒を声で表現しながら、男の腕に噛みつき引っ掻いた。

うわああと叫び、抱えていた男はたまらずにアントワーヌを放り出す。

——今だ！

ナイアルは飛びかかった。

男が出してきた右の拳がナイアルの頬をかする。びっと肌の裂ける音が耳に聞こえ、頬に刺すような痛みを感じたが、勢いを止めずに身体ごとぶつかった。

そのまま押し倒して、相手にのしかかりながら、顎に肘を叩きこんだ。

うめき声をあげて、男が顔をのけ反らせる。

肩を押さえつけ、動きを封じているうちに、どやどやとベランダに飛び出てきた工房の職員たちが男の手と足を抑えて無力化させた。

それを確認してからナイアルは男から離れる。

「先輩、血が！」

頬から流れた血が口許まで垂れてくる。舐めると、錆びた鉄の味がした。

「この野郎……手袋の中になんか仕込んでやがった」

ドロシーが心配そうな顔をするので、ナイアルは無理をして微笑む。

「かすり傷だ。舐めときゃ治る」

「ナイアルさん。あの、これ使ってください……」

ティータがハンカチを差し出してくる。わりいな、と言いつつも遠慮なく使わせてもらった。

傷を見せたままだとドロシーが心配し続けるだろうから。幸い、この工房には保健室もあるから止血だけして後で見てもらえばいい。

血で汚れたハンカチは洗ったくらいじゃ落ちないので、ティータには買い直さないとダメだろうが。

捕まった男はそのまま工房の警備員に引き渡された。

「しかし、泥棒とはね……」

「《カペル》から機密情報を盗み出そうとしたようです」

先ほど、泥棒だと叫んだ男が言った。演算室に務めているトランスという名の主任だそうだ。

「あまり賢い奴ではなかったようですが」

「そうだな」

ナイアルも同意する。

《カペル》の端末から重要な情報を引き出すにはパスワードが必要だし、昼夜を問わず演算室から人がいなくなることはないので、結局は盗みもできずに、こうしてあっさりと追い詰められてしまったわけで。

「中央工房で働く人全員を建物から追い出すくらいの工夫をしないとね」

トランス主任が言った。

すこし口調が苦々しげなのは、それを実行した奴らがちょっと前にいたからだろう。

比べて、今回のヤツが小物の泥棒であることは確かだ。
受付の目をどうにか誤魔化して工房の中に入り込み、人けのない階段を上下して忍んでいたところまでは上手かったが、四階をふらついているところを、アントワーヌに見つかり、関心を引き付けてしまったわけだ。
——っと、そうだ。そのアントワーヌはどしたよ。
首を巡らせて、ナイアルはげっと呻く。
事態が悪化している。
「なんでまたそんなところに……」
行方不明をやっと見つけたと思ったら——。
猫は壁から突き出した煙突の傘の上にいた。
男の手から逃れようとしたアントワーヌは、ベランダから外へと飛び移ったのだ。
煙突は二本あり、上に円錐形の傘が取り付けてある。傘は、おそらく雨が煙突の中に入らないようにだろう。煙は傘と円筒の隙間から出てくるようになっていた。
そのふたつの傘のうち、大きな傘の上にアントワーヌは飛び乗ったのだ。
だが、逃げたのはいいが戻ってこれなくなっていた。
「みゃーうー」
アントワーヌが鳴いている。
滑りやすそうな斜めの傘の上に必死に爪を立ててしがみついていて、ティータが驚かさないように優しい声で呼びかけているが捕まるのに精一杯だった。
例え猫でも、この高さから落ちたら無事では済まない。
「先輩っ、あれじゃ、そんなにもたないですよぅー」
「わ、わかってるー」
だが——どうしたらいい？

†

壁から煙突までは一アージュほど。
飛べない距離ではないが、むろん落ちたら助からない。五階の高さがあるのだ。
見下ろせば煙突管は三アージュほど下で壁と繋がっていて、Lの字型に折れてベランダの高さまで伸びてきている。
トランス主任が煙突工に連絡を入れたものの、到着するまでアントワーヌが持つかどうか……。
それで助かるものかはわからないが、落下しそうなところにクッションを敷く準備は進められている。

「梯子を渡してはどうでしょう？　ここだったらいくらでもあるのでは？」
ドロシーが珍しくまともな提案を出してきた。だが――。
相手が人間ならそれでいいだろうが……。
「猫だぞ？　下手に梯子を掛けたら、驚いて身をすくませた時点で落ちねえか？」
「あ……そうですね……」
しょぼんとうな垂れてしまう。
ドロシーとは思えない。
ナイアルは無意識にドロシーの頭を掴んで、髪の毛をわしゃわしゃさせていた。
「ちょ、ちょっとセンパイ！　髪が痛いですー」
「だが、アイデアはいい」
「あ、はい」
思いがけずに褒められて、にへらっとドロシーの眼鏡の奥の目が弛む。すぐに真剣な目つきに戻ってしまったが。
「いちおう梯子は用意すべきだな。で、もうちょい何か思いつかねえか？」
「はあ」
そうですねえ、と腕を組んで唸り始めた。
ティーナはその間も、アントワーヌがパニックして落ちないように声を掛けていた。

「あの……」
声に振り返る。
保健室のミリアム先生がいた。腕に、動かなくなった導力犬を抱えている。目の光が消えた導力犬を撫でていた。
「すみません。部外者の方にまでお手伝いしていただいてしまって。お怪我の具合を見ますから、どうぞ保健室のほうへ」
「どうせ乗りかかった船ですからね。あの猫が助かってからでいいです。そいつ……やっぱり壊れちまったんですか」
「そうみたい。でも心配しないで。この子の頭の中は〈カベル〉だから、ラッセル博士に身体のほうさえ直してもらえば元通りになると思う」
「ああ……そいつは」
良かった、とは簡単には言えないナイアルだ。安易に「直せばいい」なんて言うもんじゃない。例え生きていなくても、壊れることに悲しみを感じる人の心はそれでは癒されないものなのだ。
「頑張ってくれたよ。さすがはラッセル博士の発明品だ」
「そうね……」
ポンテーヌを撫でながらミリアム女医が目を細めて微笑みながら頷いた。

「それですー」
　ドロシーが叫んだ。
　心臓が止まるかと思った。
「み、耳元でいきなり怒鳴るんじゃねえー」
「それですよ、センパイー　発明品の中に役立ちそうなもの何かないでしょーか。遠くのものを掴める機械とか。空を飛べる機械とか」
「は？　……ああ、なる」
　そうか。ラッセル博士の発明品か。
　ドロシーのアイデアをその場にいた主任に話すと、トランス主任はすぐに地下の在庫管理担当のフェイへと連絡を入れてくれた。フェイは登録データベースにアクセス。目録のアブストラクトを検索すると、ものの五分でラッセル博士の発明品の中から役立ちそうな品を突き止めてみせた。
　その足で荷を持って五階まで駆け上がってくる。
　扉の向こうにいるアントワーヌを心配する大勢の職員たちを掻き分けて、フェイが姿を見せる。
「そいつは？」
　荷箱を下ろして、発明品を取り出した。

「個人用空中浮遊器です」
　フェイが言った。
「空中——」「——浮遊器？」
　ナイアルとドロシーが機械を見て首を傾げた。なんだそれ？
「ティーちゃん、説明してくれる？」
　ドロシーに呼ばれ、アントワーヌを落ち着かせる役をミリアムに譲って、ティータがナイアルたちの元へとやってくる。
「あ、〈ジェッター三号〉ですね……！」
　ナイアルは、ティータが一瞬だけ眉をひそめたのを見逃さなかった。
「こいつはどうやって使うんだ？」
　その機械は見た目は腰に巻くベルトだった。ただ、腰の左右にあたるところにずんぐりとした巨大などんぐりみたいなものが付いている。
　ティータがこぶし三個分ほどの大きさの機械のどんぐりを指さして、
「これがジェットって言われる部分なんです。この開いた口から空気を強く噴き出して空に浮かぶことができます」
　なるほど、となんとなく納得する。腰に巻いて自分が飛行船になる機械だと思えばいいわけか。

山のようにある発明品から、求める概要を聞いただけでこれを引き当ててくるフェイの検索能力の確かさに舌を巻く。さすがは中央工房の在庫管理担当。確かに今必要なのはこれかもしれない。
「オーバルエンジンなのか？」
「はい。ジェットの部分に使われているのは、飛行船に使われているエンジンと原理的には同じものです」
ナイアルは目を瞠った。
ここまで小さいくせに人ひとりを空に飛ばすことができるのかと驚いたのだ。
「そういや、最近『ひとり用の小型飛行艇』が開発されたとか、されそうだとかどこかで聞いた覚えがあるが……」
「あ、それは多分おかあさんの発明です」
さらっとティータが言って、ナイアルは今度こそ本当に驚いた。なんて一家だ。
「で、おじいちゃん、あいつと同じことをやるのは好かん、って」
「それがお蔵入りの理由かよ……」
複雑な家庭事情……なのか。それとも頑固者一家ということなのか。
もったいねえな、とは正直なナイアルの感想である。
待てよ、と同時に思う。それだけが理由ならば、これはラッセル博士の発明品の中でもまともである可能性があるのだが……。
「ジェットの部分はこんな風に色々角度を変えられるようになっています。浮くだけなら、四つくらいを固定で噴射させれば簡単なんですけど、それだと空に向かってどこまでも飛んでいくだけになっちゃいますから」
言いながら、大きなどんぐりを様々な角度に傾けてみせる。
「この噴射角はこっちのコントローラーで動かせます。遠隔制御（リモートコントロール）……いわゆるリモコンですね」
ティータが手にしたのは、弁当箱半分ほどの大きさのリモコンだった。
左と右にぐりぐりと動かせるスティックが付いている。それで左右のジェットを制御するのだろう。
ナイアルは最も肝心な点を聞くことにした。ティータが眉をひそめたのが気になる。
「で、こいつの問題点は何だ？」
う、と一瞬だけティータが口をつぐむ。
ナイアルの内心で汗が流れた――やっぱり只じゃ済まねえか。だが、もう時間がないのも確かだった。アントワーヌの鳴き声がさっきから小さくなっている。段々しがみついているのが難しくなっているのだ。
空中浮遊器。その名の通りの発明品ならばこいつで助けに行ける。壁から一アージュの距離だけ浮ければよしなのだ。もしものための命綱だって付けられるだ

ろう。ナイアルは言い出した自分がやる気だった。うまくいけば、こいつは記事になる、というジャーナリスト根性があったことも否定はしない。
「ジェッター一号と二号はお星さまになったんです……」
　ちょっと待てと悲鳴をあげるところだった。

†

　この発明品の欠点は制御の難しさだった。
　空中は三次元だから、制御するほうも立体的な動きを把握できなければならない。これがリモコンからでは馴れるまで難しい。下手なエンジンの噴かし方だと、コマのように身体が回り始めてしまう。そうなると、なかなか回転を止められない、らしい。
　さらに本来は飛行船に使うエンジンだから、導力エネルギーの供給が過剰気味で出力を絞るのが大変なのだという。目に見えないエネルギーというものの取り扱いの難しさを実感してしまう。
　人形に取り付けて実験したジェッター一号と二号は、空中でくるくる回転したあげく、暴走を始めたエンジンを制御しきれずに、空の彼方に飛んでいった。
　万が一のために付けていたロープを引き千切って、だ。
　三号機まで失うわけにはいかずにお蔵入りしていたというわけだ。
　だがそれを聞いたとき、ナイアルは閃いたのだ。
「あれ、使えねえか？　あの眼鏡」
　あっと小さく声をあげたのはティータだ。
　ラッセル博士の発明品。導力エネルギーの流れを見ることができるという眼鏡を使えば、出力の制御を楽にできるのでは、と思ったのだ。
「で、でも、ナイアルさん。あの眼鏡を掛けちゃうと周りが見えなくなっちゃうんですよ」
「そうだった！　そいつはマズイな」
　ベランダの端から端まで一アージュだ。わずかな距離だが、導力エネルギーの量だけ調節していればいいというものではない。ただでさえ難しい飛行制御を目を閉じてやるようなものだ。
「何がまずいんですか？」
　ドロシーが尋ねてくる。
「何がって、ここからあそこまで目を瞑ったまま歩けってことだぞ？　距離が短いって言っても、地面の上じゃなくて空中だからな。縦横高さを完璧に把握してねえと……」
「できないんですか？」
　不思議そうに言われて、かっとなって怒るところだった。
　思い出したのはツァイスに来た時の飛行船でのやりとり。

もしかして……。
いや、もしかしなくても。
「おまえ、できるの？」
「たぶん」
ドロシー・ハイアットは一度見た風景を忘れない。
だけではなかった。立体的に覚え込んでいるとドロシーは主張しているわけだ。
ごくり、とナイアルとティータはふたり同時に唾を呑む。
可能かもしれない。ドロシーの能力が本物ならば。だが——。
「みゃ～う！」
コソ泥第一発見者の英雄のか細い鳴き声が聞こえた。その声を聞いて、ナイアルの決心がついた。乗りかかった泥船だ。ドロシーはナイアルの相棒なのだ。
ここは賭けるところだ。
命綱は欲しいが。
「ティータ。こいつにリモコンの使い方を教えてやってくれ！　三分でだ！」
「は、はいっ」
「ティーちゃん、よろしくぅ」
こんなときでも口調は変わらないのがドロシーだった。

ナイアルはその間に、トランス主任からロープを借りる。自分の身体に結び付け、もう片側をベランダの柱に結んだ。身体のほうにロープを付けるのがポイントだ。いざとなればベルトを切れば自分は星にならずに済む。その余裕があれば、だが。
ティータのレクチャーが終わり、ナイアルはベルトを装着した。
「いーですか、センパイ？」
「お、おう。やってくれ！」
おっかなびっくりで背筋を伸ばす。
「ダメですよ、先輩。リラックス、リラックス」
「できるか！」
重心が安定しないからリラックスしろと言われていたが、どうしても全身が緊張してしまい、金属の棒でも呑み込んだみたいに動きがぎこちない。
「仕方ないですねー。では——行きます！」
眼鏡を掛け、ドロシーがリモコンのスイッチを入れた。
ナイアルの腰に巻いたベルトの左右からゆっくりと風が噴き出してくる。どんぐりの向きはまだまっすぐだ。ナイアルの足の裏が静かにベランダから離れた。
——浮いた！
「こいつは……すげえな」

「ドロシーさん、ゆっくりです」
「だめだよ、ティーちゃん！」
「え!?」
ティータが戸惑った。なんだ、とナイアルも思う。何かティータは間違ったのか？
「ドロシーお・ね・え・ちゃん、だってば！」
「そこかよっ！」
ナイアルはわめいた。その瞬間にバランスが狂って、空中で前のめりに倒れそうになる。足の裏はもう半アージュほどベランダから離れてたのだ。
「う、わあ！」
「センパイ！　動かないで！　っと、よいしょ！」
眼鏡を跳ね上げたドロシーがぐりぐりっと手元を動かした。何をどうしたのかはさっぱりわからない。ベルトについた左右のどんぐりが少し向きを変えたことと、一瞬だけジェットが強く噴いたのは辛うじて感じ取れた。
それだけでナイアルの倒れた身体がぐっと持ち上がって元の姿勢に戻る。
「す……ごい。三軸の制御ってただでさえ難しいのに」
ティータが感嘆の声をあげる。
しかも、ドロシーは即座に眼鏡をかけ直して導力エネルギーの流れをチェックしていた。いつものドロシーからは信じられない。

†

「ドロシーさ……おねえちゃん、ちょっとずつ動かせますか？」
「うん。だいじょうぶだと思うよう。ほら、これで前進っと……」
くいっとリモコンの両のレバーを倒すと、ナイアルの身体が空中で同じ姿勢を保ったまま、すーっと前に動いた。
「おお。すげえ」
「これで右回転」
くるっとナイアルの身体が右に回る。
煙突のほう――アントワーヌのほうに身体が向いて、ぴたりと止まった。
驚くのは、この時点では眼鏡をかけ直していてドロシーからはナイアルが見えていないということだ。つまり、ナイアルの姿勢も位置も、ベランダの構造もぜんぶ頭の中に入っているということになる。
――とんでもねえな……。
オーバルカメラの天才は、空間把握の天才でもあったわけだ。

「もう一回転だってできますよぅ」
　くるっと、さらに三六〇度回って止まる。
「左回転っと」
　逆回りに回った。
　目が回った。
「縦回転だって――」
「おいやめろー」
「やれるけど、今はそれどころじゃないですから、やらないですよぅ」
「ぜってー、やる気だったろー」
「やだなあ、センパイってば、あはは」
　ナイアルの身体がゆっくりと前進する。
　ベランダの柵を越えた。
　もう足の下には何もない。五階の高さぶんの空気があるだけだ。ナイアルは下を見ないことにした。絶対怖い。両手がじっとりと汗ばんでいる。喉がカラカラだ。
　もし、ここで空中浮遊器のエンジンが暴走したら……。
「ああっー」
　ドロシーが叫んだ。

　心臓が口から飛び出そうになった。
「ど、どうしたの、おねえちゃん！」
「あ～～～～～～～～っ」
　世界のすべてに絶望したかのような声をドロシーがあげる。
「――な、なんだよ、おい！」
　ナイアルの額に汗がにじむ。太陽が目に入った。ふいに自分のいる位置を自覚してしまう。
　ここからだと、ツァイスの街が一望できるのだ。
　南に広がるリベール王国一の工房都市の姿が視界いっぱいに見えている。
　街並みがまるでおもちゃのようだ。
　人の姿は豆粒で、それぞれが勝手気ままに動いている。
　絶景ではあった。
　けど、この風景が今生の見納めとか嫌すぎる……。
「お、おねえちゃん……」
「はあ。はあぁ」
　ドロシーがため息をついた。導力が見えている眼鏡は光を通さなくなっているので、ナイアルからでは黒メガネをかけたようにしか見えない。表情も見えなかった。
「おい、なんだってんだよ？」

「たいしたことじゃありません。先輩はどうぞそのままお願いします！」
そう言いながらリモコンを操る。ナイアルの身体は宙を滑るようにして、じりじりと煙突のほうへと進んでいった。
気にはなるが今はそれどころではない。
「よしよし。もう怖くないからな……」
文字通りの猫撫で声を出しながら、ナイアルはゆっくりとアントワーヌに向かって手を差し伸べていく。
警戒するように身体を遠ざけていたアントワーヌだが、煙突の傘の上をそれでも少しずつ動きながらナイアルのほうにやってくる。
伸びてきた腕に向かってアントワーヌがにじり寄り、ついに足の先が付いた。
そのままナイアルのシャツに爪を引っ掻け、腕を昇ってくる。ナイアルは両腕で無事にアントワーヌを抱え込み――
そのとき予期せぬ突風が吹いた。
「うわあああ！」
「にゃぁお～～ん！！！！」
身体が回転を始める！
「ナイアルさん！」
ティータの叫びが耳を打つ。
ナイアルの脳裏に星になったというジェフター一号と二号の話がよぎり、最悪の事態が来たかと覚悟を決めた。だが、なんとかアントワーヌだけでも――。
がくん、っと全身に衝撃が走る！
身体にロープが食い込んだ。
「おごわっ！　いてえぇ」
突風が収まり、ナイアルの身体はロープ一本で中央工房の壁沿いにぷらんと吊り下がっていた。
そのままゆらゆらと揺れる。
「だいじょうぶですか、先輩！」
上からドロシーの声が降ってくる。
「おう！　な、なんとかなっ」
「今、あげますからそのままで」
どうやって、と聞くまでもなかった。ふたたびジェットの噴射が始まり、ナイアルの身体がゆっくりと持ち上げられていく。
突風を受けてナイアルが悲鳴を上げた瞬間に、とっさに導力をすべて切ったドロシーの機転のおかげだった。

そうなれば、命綱があるから単純にぶらさがるだけで済む。
単純な解決法ではあるが、その判断は誉められていいだろう。
運もよかった。アントワーヌを助ける前だったら、ナイアルは助かっても、突風でアントワーヌのほうは落ちていたかもしれない。
アントワーヌを抱えたまま無事にベランダへと戻った。
見守っていた工房の全員から温かい拍手が降り注ぐ。フーゴが猫缶を持ってアントワーヌを迎えにきた。「にゃやゃあ～」と鳴きながらアントワーヌが猫缶にまっしぐらに突進する。
それを見ながら、ナイアルはようやく安堵の息をつく。
――今度こそ死ぬかと思ったぜ。
「ナイアルさん、ありがとうございます！」
ティータが深々と頭を下げてくる。
「あー、いや。なんてことねえよ」
「いえ、そんなことないです。工房のみんなもほんとに喜んでます。アントワーヌは大事な友人ですから」
ベランダで死にかけたこともとっくに忘れたとばかりに嬉しそうに猫缶を食べるアントワーヌを見て、みんながにこにこしていた。
「そうだな……ま、助かってよかったぜ」
「はい！　ナイアルさんも無事でよかったです」
「ああ。まったくだぜ。それと……」
ナイアルはベルトを外してティータに渡した。
「ラッセル博士の発明品が人の役に立つってことも実証できたしな」
そう言うと、ティータは驚いたような顔をしてから、誇らしげな顔になって、「はいっ！」と元気よく答えた。
問題点もあるものの、確かにアルバート・ラッセルは立派な発明家のようだ。
良い記事が書けそうだ。
ナイアルは思った。それから、ふと気づく。
「そういや、ドロシー。さっきの悲鳴はありゃ、なんだったんだ？」
ひとつだけ残った謎を問いかける。
「いえ、たいしたことではないのですが……」
「なんだよ」
「わたしがリモコンを操ってしまうとですね」
「おう」
「せっかくの、稀代の発明品を操っているわたしの勇姿を誰も写真に撮ってくれないじゃないですか。とゆーか、わたしは自分で撮りたかったです」

真面目な顔でそう言った。
「……それだけ？」
「まったく残念です。はあ……。絶好のシャッターチャンスだったのに……」
ドロシーは、ふかーいため息をついた。
ナイアルの心の中で何かがぶちっと切れた。
「よーしわかった。たっぷり撮らせてやる。ただし、今度は自分で体験しつつな！」
「えっ？　あの、えっ？」
ティータの持っているベルトを奪い取ってドロシーににじり寄ると、ドロシーはちょっと待ってくれと繰り返しつつ、じりじりと後ずさりをしてゆく。
「いえわたしは写真が撮りたいのであって、実験材料になりたいわけでは……」
「遠慮するなよ、なあ」
「いえ、遠慮しますよぅ。あ、あの、いやですー」
「あ、こいつー　逃げやがったー」
廊下へと逃げてゆくドロシーを追って、ナイアルも駆けだした。
猫缶に突っ込んでいた頭を上げ、ふたりの追いかけっこを見送るアントワーヌが、呆れた顔をしつつも、ありがとうと言うように「にゃゃゃあー」と鳴いた。

第3話　黄昏の少女

リベール王国、王都グランセル。
街の西区画にリベール通信社の編集部は存在する。
建物の二階にある狭い編集室には、ずらりとデスクが並べられていて、熱い報道魂を持つ記者たちの軽やかなタイプの音が、朝も早くから鳴り響いていた。
「君を除けば、だがな、ナイアル君」
「……えっ。何ですって？　編集長」
リベール通信の記者のひとり、ナイアル・バーンズはつっぷしていた顔をあげた。
目の前に立つ編集長の顔が怒っているように見える。
――おや？
「ナイアル君ー」
「っー　つう……へ、編集長……もうちょっと声を抑えていただけませんかね？　ああ、くそ、頭が痛くて……」
「ほう、そんなに痛いのか」
「そりゃもう。脳みそにぶっとい針を刺したみたいに――って言えばわかりますか」
「それはひどい」
「まったくです」
「最悪だな」
「頭痛です」
「ふむ。その頭の痛みはどうして生じているのかね？」
「どうしてですかね。俺も不思議なんです。ひょっとして編集長はご存じなんですか？」
「ああ、はっきりとわかるとも」
「と、いうと」
すうっと編集長は息を吸って、それから声を振り絞った。
「二日酔いだからだー」
キーーーーーン、と刺すような痛みがナイアルの頭のてっぺんから耳の後ろのほうにまで抜けていった。あやうく気絶するところだ。
「う……ぐうう」
「まったくー　自分がどれほど酒の匂いを撒き散らしてるか、わかってるのかね！」
「あー。そんなに？」
反対側の島に座っている同僚の女記者が、眉をひそめながら、「ひどいもんですよ、ナイアルさん」と言った。
その言葉に、ナイアルは頭の後ろを掻く。
「ハハ……」
「笑っとる場合かー　酒を呑むなとは言わん。だが、君はわたしの見ている限り、今日出社し

てからずっとそうして机につっぷしてるじゃないか」

「おっと、それは違いますよ、編集長」

「ちがう、だと？」

ナイアルは間違いを正すことにした。

「家に帰ってないので、正確には昨晩からずっとっていう……」

正直に言った。昨夜はこの部屋に泊ったのだ。椅子を三つ並べてそこで寝ていた。締め切り間際によくやることだったから慣れている。疲れも取れないし、起き抜けはちょっとばかり全身が固まって痛くなるけれど。

編集長の顔が真っ赤に染まる。

「ばっかも――――――ん！」

倍の声量で怒鳴られた。

窓がびりびり震えるほどの大声だ。

部屋の中の全員が思わず顔をしかめ耳を手で塞いでいる。

ナイアルの頭の痛みは倍に膨れ上がった。あ、死にそう。

「そんなんで仕事になるか！　お前は今日はもういい！　あがれ！」

「いやでも編集長。例の脅迫状の件の情報をまとめないとですね――」

じろり、と睨まれる。

[illegible]編集長の目はそう語っていた。

――まじだな、こりゃ。

「わかった。わかりましたよ。大人しく休みますとも」

「そうしろ。特別休暇を与えてやる。これは命令だ」

「へいへい」

机の上に放り投げてあった財布を掴み、尻のポケットへと捩じりこむ。よれよれの上着を羽織ると、「じゃあ」と軽い挨拶を同僚たちへと送る。

机の横に立ったまま睨んでいた編集長にも頭を下げてからドアを開けようとしたところで、ナイアルは振り返った。思い出した。

「編集長」

「なんだ？」

「こいつは有休あつかいになるんですかね？」

編集長のこめかみがピキッと引きつるのが見えた――ヤバイ。

「あ、じゃあ、あがるんで後はよろし――」

「減俸だ――――！」

背中のほうで編集長の声が響いたが、そのときにはナイアルは一階へと向かう階段を転がる

ように降りていた。
減俸の叫びは聞こえなかったことにする。
まあ、三日も経てば忘れてくれるだろう。
忘れてくれると嬉しい。
ただでさえ薄給なのだ。
「まいったな……」
建物の外へと出た。
明るさに目をしばたたかせる。
空が青かった。いい天気だ。今日は暑くなりそうだな。
通りの向こうに馴染みのコーヒーハウスが見えた。
「とりあえず、頭をすっきりさせるとするか」
通りを渡りながら、ナイアルは何気なく上着のポケットへと手を入れる。
何か、硬いものに触れて、おや、と思う。
つかみ出してから、ナイアルは思い出した。
「入れっぱなしだったか」
触れたものは手のひらに乗るほどの小さなカメラだった。最新型のオーバルカメラで、どんな素人でもそれなりの写真が撮れるという触れ込みのやつだ。
この[illegible]のカメラは[illegible]のカメラマンがナイアルに渡しにきたものだった。
「これ、ちび君です。わたしのいない間、ちび君をわたしだと思って大切にしてくださいね、ナイアル先輩」
そう言って、ボースへの出張前にトンチキ娘が置いていったのだ。
「んなこと言われてもな」
ナイアルは記者であってカメラマンではない。
カメラを渡されても困る。
手の中でぽんぽんと重みを確かめるように遊ばせてから、ナイアルはオーバルカメラを上着のポケットへと戻す。
——まあ、どうせ休暇だ。
一日カメラマンの真似事をしてみるのも面白いかもしれない。

†

通りを渡った先のコーヒーハウスで、カレーとコーヒーを胃袋に入れた。
「二日酔い、収まりましたかっ？」
マスターに訊かれて、まあな、とナイアルは曖昧に答える。

ひと息ついたところで、ナイアルは、昨夜のことを思い返した。
夜、あの遊撃士の娘エステルに呼び出されたのだ。
居酒屋《サニーベル・イン》を訪れたナイアルを待っていたのは、大勢の遊撃士たちだった。仕事が一段落したところらしく、せっかくだから皆で夕食を、ということになったらしい。何故そこに自分が呼ばれることになったのかは謎だったが。
見知らぬ顔も何人かいて、紹介されたはずなのだが、正直なところナイアルはよく覚えていない。
――まあ、あいつらとは腐れ縁だからなぁ。
とんでもない酒豪が居て、そいつに酒を勧められたのが運のつき。
ナイアルもけっして酒に弱くはないのだけれど、あれは異常だ。こちらが意識朦朧となっているのに、けろりとした顔でお代わりを注文しやがる。
おかげで家に辿りつくこともままならず、オフィスの椅子で夜を明かすことになったわけで……。
勘定を済ませて店を出た。
ポケットからカメラを取り出す。
――さて、何から撮るかな。
小路を散策しながら右に左に視線を振る。
工房の裏手の積み重なった木箱の上に猫がいた。
茶色の子猫が二匹。どうやら兄弟らしく、白地に茶の模様がよく似ていた。
ひょい、と一匹が隣の箱に跳び移る。
振り返って、どや顔をした。
遅れたほうの一匹が後を追おうとして跳んだが届かない。脚の先が木箱に引っかかったけれど、そのままずるっと落ちてしまう。
なー、と鳴いて、うらめしそうに兄弟を見上げる。そっくりなのに運動能力には差があるらしい。
思わず頬がゆるんだ。
カメラを構えて――シャッターを押したが反応なし。
「んん？」
改めて機体を見直す。確か、ほとんどの操作は自動でまかなえると聞いていたのだが。
シャッターを押すだけですよ、先輩――と。
ああ、と納得。メインの導力スイッチがオフになっている。これでは導力エネルギーが流れない。
スイッチを入れると、機体の背後にある投映板に画像が現れた。
ファインダーを覗かなくても、原理的には投映板を見ながらシャッターを押して撮影できる

わけだ。昔の光学カメラにはこれが無かったらしくて、どんな絵が撮れたかは、現像するまでわからなかったらしい。
それに比べればなんと楽になったことか。
ふたたびカメラを構え、ファインダーを覗こうとして、ナイアルは「あれ?」と声に出して言ってしまった。
——あいつら、どこへ行ったよ?
カメラから目を離したとき、にゃあ、という声を耳が捉えて顔をあげた。
いつの間にか、段々に積み重なっている木箱のいちばん上にいた。
ナイアルの顔からすぐ近くだ。目と鼻の先。カメラのファインダーで覗くと、猫の顔が大きくいっぱいに見えて——。
にゃーーーーー!
飛びかかってきた!
思わずシャッターを切ったが、子猫はそんなものには構わずにナイアルの顔へと飛び移った。
爪がナイアルの頬をかすめる。そのまま肩を踏んで、足下へと降りた。
脚の間をすり抜けて、小路の奥へと走っていった。
痛む頬を抑えると、かすかに血が滲んでいた。
ナイアルは投映板に目を下ろす。画面の半分を、飛びかかってくる猫の顔が占めていた。ぶれまくっていた。
「あちゃあ……」
見事な失敗写真だ。
「猫はやめだ。やめ!」
自分のような素人がやんちゃに動き回る子猫を撮ろうなどと考えたのが間違いだ。
ため息をついてしまう。やはりカメラマンの相棒のようにはいかない。
ナイアルは都一番の大通りへと出た。
通りの南の端には噴水があって、子どもたちと老人がひとり、鳥に餌をやっていた。
パンくずらしきものを千切ってはばらまいている。
ぜんぶで十羽ほどもいる小鳥たちが、石畳に落ちたパンをつついて食べていた。
これこそ平和な光景ってやつだ。
そう思ったナイアルは今度こそとカメラを構える。
よい構図を探してファインダーを覗きながらうろうろとしていたら、通りを歩く男とすれ違いざまにぶつかった。
思わずよろけてしまう。身体が前に泳いで、たたらを踏む。
「ぼさっとしてんじゃねえよ!」
怒鳴られた。

顔をあげると、いかつい顔に濃い口髭を生やした男が睨みつけていた。
「あ、すまん――すいません」
慌てて言い直す。
すいませんとか、柄でもない言い方だ。だが、これは明らかに自分が悪い。
そして写した写真はまたもピンボケである。落ち込んだ。
――だから、俺は記者であってだな、カメラマンじゃねえ……。
心の中でつぶやく。いったい誰に言い訳をしているのやらと自分でも思った。
「やめだ、やめ。柄じゃねえよ」
ポケットの中にカメラを落として、気を取り直して顔をあげた。
ナイアルにぶつかった髭面の男の背中が人ごみの中へと消えていこうとしていた。
あ、とナイアルは声をあげてしまう。道の先で、男とすれ違おうとした少女がナイアルと同じようにぶつかったのだ。
「きゃあ」という悲鳴があがった。
派手に吹っ飛ばされて石畳を転がる――なんてこった。
ぶつかった男がナイアルに対してと同じように怒鳴った。少女がびくりと身体をすくませ、石畳の上でみるみる顔を歪ませる。火がついたように泣きだした。
ナイアルは駆けだした。

[illegible]、ポケットに両手を突っ込むと、背中を向ける。
助け起こそうともしない。
――あんにゃろ！
「お、おい！　待てよ！」
ナイアルは背中に声をかけるが、男は振り返ろうともしなかった。

†

石畳にぺたんと腰をつけたまま、女の子は泣いていた。
通りを行き交う人々は遠巻きにしてちらちらと少女とナイアルを見ている。
――俺が泣かせたんじゃねえ！
誤解だ、と言い訳を言うよりも大事なことがある。ナイアルが泣かせたわけじゃないのだが、このままにはしておけない。
「大丈夫か？　ほら、立てるか？」
手を取って起こしてやり、服をはたいてやりながら、噴水の縁に座らせる。
泣き顔でもわかる。整った顔立ちをした、えらく可愛い子だった。
日差しを返して紫がかって見える珍しい髪の色をしていた。

その髪を飾るのは、頭の上で結んだ、子どもには似つかわしくない黒いリボン。
服も少しおとなっぽいような……。上下で柄を揃えた、白と黒を基本にしたふわっとした服を纏っていて、胸元を飾るタイの色だけが赤かった。
もう少し……十七、八の娘が着たら、さぞ映えるような落ち着いた服なのに、なぜか顔を歪ませて大泣きするこの小さな子には似合っているような気がする。
どうやら怪我はしていないようだが——。
「お、おい。そんなに痛かったか？」
少女は首を左右に振る。
「困ったな……」
泣き止まない女の子のご機嫌を取るには……。
——あれだ！
噴水の近くには屋台が何軒か出ていた。
そのうちのひとつに、クレープ屋があった。『すいーとクレープ』ってやつが三百五十ミラだ。
女の子ってやつは砂糖菓子でできているものらしいし。
「おい。ちょっと待ってろよ。今……」
尻ポケットに捻じ込んだ財布に手を伸ばして——はっとなる。
ない。

思わず何度もポケットを叩き、手でさぐる。確かにここに入れたはずだが。
焦る。左右の上着のポケットも漁るが、当然そこにもない。
「あれ？　いやまて、あれ？」
ナイアルは気づいた。
「まさか——さっきの……」
すれちがった髭面の男だ。ぶつかって、ナイアルをよろけさせた男。少女を転ばせた男のことだ。あいつがまさか——スリとった？
唇を噛みしめる。
気付かなかった。
「やられた……。なんてこったよ。あの野郎、ぶつかったのはわざとか！」
どうするナイアル？　自問自答してしまう。たいした額は入っちゃいないとはいえ、今日明日に使うくらいのぶんはあの中だ。
うつむいて考えこんでいた鼻先に、にゅっと財布がひとつ突きだされた。
ナイアルのだ。
「へ？」
蛇革の見慣れた財布。

「これ……って」
財布を握っているのは小さな手だ。上に向かって伸ばしてきている腕を辿って、相手を見る。
差し出してきたのは先ほどまで泣いていた紫の髪の少女だった。
「はい」
「へ？」
少女の瞳がナイアルを見上げている。琥珀色の吸い込まれそうな瞳。びっくりしたのは、その目に涙の欠片も見当たらないことだった。
「いらないの？　おじさんのでしょ、これ？」
澄んだ声でそんなことを言う。
「ど、どこでこれを」
「拾ったのよ」
「拾った？」
ナイアルが落としたのか？　いや、そんなはずはない。ナイアルはよろけはしたが、転んではいない。それに、ナイアルと男がぶつかったのは、この噴水の手前で――。
むしろ、ここであの男とぶつかって転んだのは少女のほうだ。
「拾ったのよ」
少女は繰り返した。

ナイアルを見上げて、にこりと微笑む。
「……ありがとう」
「お礼はあれでいいわよ？」
あれ、と言いながら、ちらりと屋台のほうを見る。先ほどのクレープ屋だ。
「……ちょっと待ってろよ」
ナイアルは財布から小銭を取り出して、「すいーとクレープ」をひとつ買う。もちろん、硬貨を取り出すときに、ざっと財布の中身をあらためた。何もなくなってはいないようだ。少女を疑うわけではなかったが……疑問は残る。
「ほら」
「あら、だめよ」
子どもっぽさの消えた表情。おとなびて見えた。
「……だめ？」
「そうよ。レディに贈り物をするのに、そんな言い方ってないと思うの」
そう言って、くすくすと笑うのだ。
「……。どうぞ、お嬢さん――これでいいか？」
言いながら、クレープを差し出した。
「ええ。ありがとう」

受け取って、少女が微笑む。その顔には涙の跡は見当たらない。どう考えても、あの泣いていたのは演技としか思えない。

「おい、あんた……」

そっぽを向かれた。

「よう。ちょっと話を聞かせて……」

「あんたじゃないもん」

「ああ？　あー、……お嬢ちゃん？」

「レン」

明後日のほうを見つめながら短く言った。

「は？」

「レン」

名前だと気づくまで、彼女の小さな口の中にクレープの残りが消えるまでかかった。

「なあ、レンちゃん」

そう呼びかけると、ようやくナイアルのほうに顔を向けてくれた。

「おじさんは？」

「へ？」

今度はなんだ？

「[illegible]ナイアルさん」

と[illegible]だったらしい。

ただ、奇妙だったのは、「そうだったわ」と少女が聞こえるかどうかの声でそうつぶやいたことだった。まるでナイアルの名前を知っていたかのように。

ナイアルのほうは覚えがなかったのだが。

†

噴水の縁石に腰をかけてナイアルはレンと名乗った少女に話しかける。

ナイアルが気になったのは、レンがひとりきりなことだった。

十一か、十二。それくらいにしか見えない。だがあたりに親のいる様子はない。大通りまで遊び場を広げにきた王都の住人にも見えなかった。ナイアルは日に何度もこの通りを歩いているが、今までこの子を見たこともなかったし。

「レンちゃんは――」

「呼び捨てでいいわよ、おじさん」

「俺も呼び捨てで構わないんだがな。だが、おじさんはやめてくれ」

「あら？　……おじさま？」

「丁寧に言えって意味じゃねえよ！」
「あら、まあ」
「俺はまだ三十だ！　三十だったら、レンの倍だわ。随分と長く生きてるのね！」
――ば、倍って……。
「こ、このガキ……。くそっ、俺ももうそんな言われ方する歳になっちまったか」
「で、何かしら？」
「レン、君の保護者はどこだ？　子どもがひとりきりでいちゃ危ないだろ」
「あら。お兄さん。レディのプライベートな事情を聞きだすときは、まず自分のことから話すのが礼儀っていうものだと思うわ」
こまっしゃくれたことを言った。
「あー。ああ、そうだな。俺はリベール通信社ってところで記者をやってる」
「きしゃさん？」
「新聞を作ってるんだよ。わかるか？」
「ええ」
「そりゃよかった」
「あら？　でもじゃあ、仕事もしないでこんなところで可愛いい女の子にクレープを奢ってい

[illegible]記者さんって忙しいのよね！」
「忙しいときもあるさ。生憎、今日は休暇だ」
あと、自分で可愛いとか言うか、と突っこみたいところだ。それも含めて、自分の言葉を自分で意識して操っているような節があった。言葉に拘る仕事をしているナイアルの勝手な思い込みかもしれないが。
なんとなくふつうの子どもと扱いできないような……。
レンが立ち上がった。
スカートを叩いて、食べたスイーツのくずを払う。
「ねえ、ナイアルおじさ――お兄さん」
「なんだ？」
「休暇中なら、レンに付き合ってちょうだい。レン、とっても退屈してたの」
「親が心配してないのかよ」
「あれもだめ、これもだめって言われてると、もう暇で暇でしかたないのよね」
ナイアルの問いには答えず、レンは言う。
その台詞をナイアルは勘違いした。
「親ってのは、心配性だからな。そうでもないけど。子どもにはあれこれ言うものさ」
「そう……？　そうでもないけど。普段は止めたりしないのよ。レンの好きなようにやらせて

くれるわ。そのほうがずっと楽しいの。でも、今回はやっちゃだめって言われてるの」

やっちゃだめ。

無邪気に言った他愛ない言葉に思えた。けれど、ナイアルの背筋は、その一瞬だけ、ぞくりと何故か冷たくなったのだ。たかが十かそこらの子どもの言葉に。

「せっかく王都まで来てるんだもの。もうちょっと見て回りたいのよね」

「グランセルの人間じゃないんだな？　旅行か？」

ナイアルの言葉には笑みを浮かべるだけで答えなかった。

「そうね。夕方まででいいわ」

「夕方……？」

「それ以上、はぐれていちゃ、ティータが泣いちゃうもの」

ぽつりと意味不明なことを言ってくる。

だが、どうやら親はおらず、誰かと別れてココにいるらしいことは感じ取れた。

となると、放っておくわけにもいかないだろう。無理に訊きだしても話してくれないだろうことは薄々わかる。一筋縄ではいかない子だ。

「わかった」

年端もいかない少女を放り出すこともできず、ナイアルはレンの退屈しのぎに付き合うことになった。

噴水の周りに群がる鳥たちに餌をやったり、大通りを歩いてウィンドウショッピングをしたりして時間をつぶした。レンは口を開くたびに、いちいちこまっしゃくれたことを口にするものの、それなりに笑顔を見せてくれる。

その笑顔を見てふと思いついたナイアルは、ドロシーから借り受けたカメラをポケットから再び取りだした。

レンへとカメラを向けた。

レンズを向けられたことを察知して、小物屋の棚をひやかしていたレンが振り返る。

まるで職人の作った人形みたいな端正な顔だった。ピントが自動で合い、フレームの枠内にレンの作り笑顔が収まる。

カメラに視線を向けて澄まし顔になった。

絶好のシャッターチャンスに思えた。

このままリベール通信に載せてもおかしくない。

だが、シャッターボタンにかけた指をナイアルは外してしまったのだ。

「撮らないの？　おすまししてあげたのに」

自分でも何かわからないことを、もごもごと口にしてしまう。いやちょっと、とか何とか。言い訳にもなってない。

「なあに？」

「[illegible]――」

レンが可愛らしく小首を傾げる。ナイアルに先を促した。

†

ナイアルはレンに向かって言う。

「あー、俺の本業は記事を書くほうでな。カメラについちゃ、詳しくないんでこんなことを言うと相棒に笑われそうなんだが」

「アイボウ？」

「ま、そんな感じのやつが同僚にいるんだ、カメラマンのな。おかしなやつなんだ。建物を撮るときも空を撮るときも、森や山を撮るときでさえ、人間を相手にするように、『はい、笑ってぇ』とかイチイチ言うやつで」

「ヘンなの。空や木は笑わないわ」

「ああ。笑わないな。俺もそうは思うんだがな……」

ナイアルはミニカメラをよれよれのスーツのポケットにねじり込む。

「そいつの言うことにはさ。自分がシャッターを押すんじゃない、んだとさ。風景が、自分にシャッターを押させるんだと」

レンが小首を傾げる。
本気でわからないという顔をしていた。
無理もない。ナイアルにだって全て理解できているわけではないのだ。
なんてったって、オーバルカメラの天才の言葉だ。
天才がそんなに簡単に理解できれば苦労しない。
もっとも、ナイアルは内心で小さな子を相手に、何を話しているのだろうとも思っていた。まるで何もかもわかっている、大人を相手にして話しているようじゃないか、と。
それでも言葉は紡がれていく。
「撮るべき瞬間は向こうからやってくる。その感覚に従って、自分はシャッターを押しているだけ——なんだとさ。俺はまあカメラは素人で、あいつのように天才じゃないからこんなことを言っても笑われるだけなんだが。なんとなく今は……」
「その撮るべき瞬間って気がしなかった？」
「そうか？」
「そんなとこだ。悪かったな、なんか面倒くさい話をしちまった」
「んー。よくわかんないけど、おじさんは別に悪くないと思うわ」
「でも、どうしてもすまないって思ってるなら、そうね……」
レンとナイアルは大通りに立ち並ぶ店をひやかしながら北へと歩いていてた。

ちょうど、昼食時、〈サニーベル・イン〉の前を通りかかったところ、
昼は軽食屋になっているその店を指さして、レンが言った。
「お腹空いちゃったわ。パイひときれでいいの。おごってくれる？」
にこりと笑みを浮かべながら、上目使いでナイアルの目を覗き込んでくる。
ちょっと小悪魔っぽく感じる笑みだ。
まあ——ナイアルには子どもに色気を感じる趣味はないので、苦笑いを浮かべるだけに終わったけれど。
「……よく食うやつだな。ま、パイひときれでいいなら奢ってやるよ」
〈サニーベル・イン〉に入った。
昼食時だ。けっこう混み合っていて、ナイアルとレンは通りに面した窓際の一角になんとか席を見つけた。
手作りパイもどき、と書かれた一品がランチのメニューにあった。
ナイアルはまだ朝食からさほど時間が経っていなかったのでさほど腹が減っていない。レンも半分でいいと言ったので、ふたりして運ばれてきたパイを分けて食べることになった。
美味しいわね、と言いながら食べていたレンだったが、その動きがぴたりと止まった。
「どうした？」
顔を上げたレンは、ナイアルの肩越しに店の奥へと視線を注いでいた。

その視線を追って振り返ろうとしたナイアルは、「振り返っちゃダメ」とレンにたしなめられる。
「ど、どうしたよ？」
「そうっと。見てるって気づかれちゃだめよ、ナイアルおじ――お兄さん」
レンが気付かれないように見ろと言ってくる。
くそ、無意識だとやっぱりおじさん扱いかよ、とか思いつつ、ナイアルは身体を半身にして、凝った身体を伸ばすふりをしながら、ゆっくりと後ろに視線を投げる。
奥の薄暗いテーブルに親子連れらしき男と子どもがいるのが見えた。
子どものほうは初めて見る顔だった。レンと同じくらいの歳に見えた。
だが、ナイアルは、男が、さっき自分にぶつかった髭面のスリだと気づいた。
「あの野郎……」
「あのひとたち、パイを二皿注文したのよ」
レンが小さな声で言った。
「……テーブルには一皿しかねえぞ？」
「食べ終わってから、子どもの服の内側に入れさせてたわ」
「無銭飲食かよ」

テーブルの上の皿を、こっそり子どもに隠させたわけだ。なるほど、だからあんな隅の暗がりの席に座っているわけか。
皿を盗むためではない。
二皿ぶんの勘定を一皿だけで済ませようというわけだ。皿を隠して、あくまで注文は一皿だったと言い張るつもりなのだ。
「呆れたな。一皿ぶんを浮かせるためだけにそこまでやるか？　たかが数十ミラの差じゃねえか」
「せこすぎる！」
「持ち帰った皿を売れば、もうちょっともうかるわよ」
しかも、よく見れば、子どものほうは怯えた顔をしている。びくびくしていて、自分がやったことがばれるのじゃないかと怖がっているようだ。
顔も似ていないから、ひょっとしたら親子ではないのかもしれない。だとしたら、ますますタチが悪い。ナイアルは怒りを感じた。
視線をレンに戻す。
「どうする気だ？」
ナイアルがそう言うと、レンはぽかんとした顔になる。
「どうするって？」

「ん？　おまえさん、なんか考えがあるんじゃねーのか？」
それは子どもに対して言うような台詞ではなかったと思う。ナイアルも自覚はしていた。無銭飲食をたまたま見つけた子どもに、どうする気かと尋ねるなど。
おもしろがるような表情がレンの顔に浮かぶ。
「レンが？　どうして？」
「違うのかよ」
「レンは子どもなのよ？」
「大人には見えねーな」
「お兄さんこそ、記者さんなんでしょ？　ああいうのを放っておけないんじゃないかしら？」
「……まあ、そうなんだが」
「レンみたいな子どもに、何かできると思う？」
もっともだ。
もっともだとは思ったし、そんなことを目の前の少女に言うのはおかしいことはわかっていた。だが、ナイアルは自分の直観を信じる性質だった。
「なんとなく、できる気がしてるんだが……」
「あら」
「わざわざ俺に教えて、俺を操らなくてもな」
「――ふうん。お兄さんって意外と……」
「なんだよ」
「アイボウってひとに、『いじめっこ』って言われてないかしら？」
「あー、そういやたまに言われるな。『ナイアル先輩ってばイジワルですぅ』とか」
「だと思った」
そう言ってから、椅子からすとんと降りる。
「話、合わせてくれる？」

†

ナイアルの返事を聞く前に、レンはもう行動を起こしていた。
奥の席の男が、ウェイトレスを呼び勘定を済ませようとしていた。
予想どおりだった。
二皿ぶんの代金を、勘定書きを見ながら受け取ろうとするウェイトレスに、俺たちは一皿をわけあったのだと髭面の男が主張したのだ。
ウェイトレスは「そんなはずは」と困り顔なのだが、男は強気で一皿ぶんの勘定しかテーブ

ルに置かない。
お客様、困ります、と抗議するウェイトレスに、男は顔を真っ赤にさせて、声を荒らげる。
「この店はぼったくりかよ！　倍も払わせようってのか！」
ウェイトレスがおろおろとうろたえ始める。
左右を見廻して他の客に助けを求めるのだが、髭面の男は目立たない隅の引っ込んだ席を選んでいたから、客たちも何も言えないようだった。
十八、九の臨時らしきウェイトレスは泣きそうな顔になる。
そんな状態の席に向かって歩いていったレンは、最後の数歩を小走りにして、男の子のほうに抱きついたのだ。
「ウィル！　ひさしぶりね！　元気だった？」
シャツの内側に皿を隠したまま男の脇に立っていた男の子は、いきなりレンにだきつかれて焦っていた。
大声を張り上げていた男が何が起こったかと男の子を見る。
男の子のほうも髭面の男を見上げた。
その一瞬の隙に、シャツの裏からレンがこっそり皿を抜き取ったのを、ナイアルだけは見て取ったのだ。
いや――。

おそらく、ナイアルにだけわかるように見せた。
――ああして、財布を取り返したわけか。
ナイアルは悟る。
おそらくあのときも、噴水のところでナイアルから髭面の男が財布を抜き取ったのを、レンは見ていたのだ。
レンは男の子にしがみついて動きを封じたまま、奪い返した皿をそっと髭面の男に悟られないようにしてテーブルへと返した。
当然ながら、男の子のほうも何をやられたかわかっている。
シャツの内側に冷たい皿の感触がなくなっているのだ。背格好が同じくらいの少女に抱き着かれているとはいえ、そこまでされてわからないはずがない。
男の子は明らかに焦っていた。
何とか男のほうへ何が起こったか訴えようとしている。
ちらりとレンが視線をナイアルに投げてきた。
――出番はここか。
「どうかしましたか？」
言いながら、ナイアルはさりげなく男とウェイトレスの間に割り込む。
背中のほうで、ウェイトレスがほっと安堵の息を吐いたのを感じた。

「なんだてめえは……」
「いえ、何か揉めているようでしたので」
そこでくるりとウェイトレスのほうへと向き直り、彼女の持っていた勘定書きに手を伸ばす。
「ちょっと拝見」
確かにパイを二皿と書かれていた。それだけ確認すれば充分だ。
「パイを二皿……ですよね、何か問題が？」
言いながら、ナイアルはわざとらしくテーブルへと視線を投げた。
ナイアルの視線に釣られて、ウェイトレスも男もテーブルを見た。
二皿、並べられている。
髭面の男が口をぽかんと開け、絶句していた。
「そんな馬鹿な、ちゃんと隠して」
とぽろっと言ってしまい、「ボ、ボスぅ」と男の子がますます怯えた顔になる。
自分の失言に気付いて、男も言葉を一瞬詰まらせ、
「二皿、ですよね？」
ナイアルは重ねて言う。
男がナイアルを睨みつけてきた。ナイアルは刺すような目つきで睨まれたが、なんとか笑顔を保ってみせる。男がはっとした表情になった。どうやら、ナイアルの顔を思い出したらしい。

ナイアルは笑顔を崩して睨みつけた。
ドロシーに言わせると、先輩は目つきが悪い、そうだ。睨むとおっかないと言われていた。
失礼なやつだよな、と内心思うが。まあ、こういうときは利用価値がある。
ちっと舌うちをして、「おい。けえるぞ！」と髭面の男が男の子の腕を乱暴につかむ。男の子が痛みに悲鳴をあげた。
形勢不利と判断したのだろう。
スリの男はテーブルに二皿ぶんのミラを叩きつけて逃げるように店を出ていった。
「ありがとうございます！」
ウェイトレスが頭を下げた。
ようやく騒動を聞きつけてやってきた店の主人からも礼を言われてしまう。
ナイアルは何もしていない。
やったのはレンだったのだ。だが、そうは言っても信じてくれないことは確実で、レンのほうも、「お兄ちゃん、怖かったぁ」などと猫をかぶる始末だ。
店の主人から、パイを追加で一皿お礼におごってもらってしまう。
ナイアルは追加の皿をレンの前へと滑らせた。
「いいの？」
「子どもは育たにゃならんだろ」

じゃあ、とレンは遠慮なくパイを頬張った。
にっこりと笑顔になり、忙しそうに口を動かすレンを、ナイアルは黙って見つめた。
——こいつ、何者だ？
そう思ってしまいながら……。

†

店を出るとすでに夕方だった。
あたりは暮色に沈み、通りの人影は減っていた。
「じゃ、レンはもう行くわ」
レンが言った。
「送らねえでいいのかよ。物騒だぜ」
「グランセルは治安がいいので知られてるのでしょう？」
「俺もスリに会うまではそう思ってたんだがな」
そう言いつつも、こいつにはナイアルの護衛なんていらないんじゃないかと漠然と思ってしまう。
しばらくふたりとも黙って見つめあった。

記事を書いても、応えちゃくれないんだろうな、とナイアルは思う。
「あの子……」
夕焼け空を眺めつつ。ぽつりとレンがつぶやいた。
あの子、というのが、先ほどのスリの男の手伝いをさせられていた男の子のことだとわかる。
「親を亡くした子が悪党の手先にされるなんてえのは、たまに聞く話だけどな。ありゃ、どう見ても親子じゃねえし。まさかこのグランセルで見るはめになるとはなぁ」
「むしろ王都だから……。豊かな街は暮らしていくのにミラがかかるもの」
レンの言葉に意表を突かれた。
それから、言葉の意味を理解する。豊かな街ってのは、たいてい物の値段が釣り上っていくものなのだ。仕事があればそれだけ稼げるから。
だが——一度、落ちてしまうと……。
生活はますます苦しくなる。物を買うにはミラがかかり、仕事を得ようにも、年端もいかない子どもを雇ってくれるところはない。
ひとりで生きていけないから、悪党でも頼らざるを得ないというわけだ。ひどい男のところに身を寄せたものである。
ナイアルは記者としては見識が甘かったなと反省してしまう。
こんな子どもに諭されるとは。

「そうだな。子どもだもんな。まだ親に甘えている歳だもんなぁ」
何気なく言った言葉だった。
「親？」
レンが妙な顔をする。ナイアルは「だろ？」と同意を促すがレンは何も言わない。
会話の流れが止まってしまい、ナイアルは頭の後ろを掻きながら言う。
「こういう件は七耀教会の出番なんだがな……。何にせよ、子どもに悪事の片棒を担がせるなんてのは見過ごせねえ。この件は、きっちり上と遊撃士協会に報告しておくから、お嬢ちゃんは心配しなくていいぜ」
ナイアルの言葉に、だが、レンは意外なことを告げる。
「心配はしてないわ。ミラはあげたもの」
「は？」
何を言われたのか、一瞬わからなかった。
「千ミラ渡したの。これで逃げてひとりで生きていきなさいって」
「なっ――ど、どこからそんなミラ」
「別に盗んだわけじゃないから心配しなくても平気よ」
「いやだけど、千なんてどこから……」
「あったのよ。いけない？」

「いけないってこたーねえが……」
ナイアルはまじまじとレンを見つめてしまった。
本当に何者なんだこいつは。
「後は知らないわ。きっかけは与えたもの。あれをどうしようとあの子の勝手。そのままボスに献上して奴隷のままいようが、一日で使い果たしてのたれ死のうが」
夕焼けの中、氷のように表情を固めたままレンが言った。
天使のように整った顔立ちなのに、凄味があって、もうとても単なる小さな子どもには思えない。
その無表情を崩して、作り笑顔で「今日は楽しかったわ」とレンが言った。
「あ、ああ」
「ありがとう、ナイアル・バーンズ」
そう言って、そのままくるりと背中を向けると通りを歩き去っていく。
ナイアルは一歩も動けず、ただ見送ることしかできない。
告げていない苗字までレンが口にしたことにさえ思い至ることはできず――。
ほとんど無意識でポケットからカメラを出してシャッターを切っていた。
黄昏の中に小さな天使の背中が消えてゆく。
闇が訪れた。

エピローグ

数日後。

出張先のボース地方から、リベール通信社のカメラマン、ドロシーが帰ってきた。

社に顔を出すやいなや、ナイアルのところまで小走りにやってくる。

「ただいまですぅ！」

ナイアルは顔もあげずに書類を読むふりをしていた。

いちいち付き合ってると、仕事にならない。

だが、ナイアルに無視されたくらいで堪えるドロシーではなかった。

ナイアルだって、それはわかっていたが。

「おやあ？　センパイ、それはなんでしょう？」

しまった、と思った。

無視してる場合じゃなかったのだ。うっかりしてた。

ナイアルの机の上には写真が何枚も並んでいたのだ。

ドロシーから借りたカメラ『ちび君』で撮った写真がちょうど工房から焼きあがって届けられたところだった。

「見るなよ」

「ほうほう。おー、ひっどい写真ばっかりですねぇ。ぼけてるわ、露出がヘンだわ。オートで撮ってるのに、手ブレとか。オーバルカメラに謝れって感じですよぅ」

「うるせえよー」

言い返しながら声に力がない。

ちくしょう。こればっかりは見られたくなかったのに。

「ああ、これ、返すからな」

小さなカメラをドロシーに渡した。

ドロシーはカメラを受け取りつつも、夢中になってナイアルの撮った写真を検分していた。

——恥ずかしいから、やめてくれ。

ドロシーの言う通り、まともな写真が一枚も撮れていなかったのだ。

「すっごいですねえ、ここまでひどいと芸術ですよぅ！」

「黙りやがれ」

「あれ、照れてますか、先輩」

「照れじゃねえよ……」

テーブルの上に視線を落とす。目に入った一枚を見つめた。ぼんやりと頬杖をつきながら見つめたその写真は、夕焼けを背にして映っている少女の写真だった。背中しか映っていないし、

夕暮れの中でフラッシュも焚いてないから、ひどく暗い。
失敗作のひとつでしかない。
今にも闇に呑まれて消えてしまうそうな後ろ姿に、だがナイアルは不思議と視線を外せないでいるのだった。
脇から手が伸びて、その写真をつまんでドロシーが口を開いた。
「あ、でも、これは良い出来ですよう」
思わず頬杖を解いた。
ドロシーの顔を見てしまう。
「それが？　いい？」
「はい。これだけですかね、ちょっとでもマシなのは」
「その一枚がねえ……。暗くて色も満足にわからねえし、背中だけで、しかも小さくしか映ってねえぞ」
天使のような美少女だったのだ。
それを知っているナイアルにはあまりにもその写真はひどいもので……。
「いえいえ。だって、写真が写してくれてありがとうって言ってますよ」
「そんなもんかね」
「もしここにわたしがいたら。わたしでも、この瞬間のこの構図を切り取ると思います。いい

写真です。見ただけでタイトルも浮かんじゃいますね。タイトルは、そう……」
オーバルカメラの天才が静かに言った。
「『孤独』ですかね」
ドロシーの言葉を受けて、
黄昏の中を立ち去っていった不思議な少女の面影が、ナイアルの心の奥にいつまでも残ることになった。

第4話　凸凹ベター・ハーフ

ミュラー・ヴァンダールは、エレボニア帝国軍の第七機甲師団に所属する軍人である。
階級は少佐。
現在、隣国のリベール王国に駐在武官として勤めている。
だが、それは表向きの任務であった。
その裏で、とある帝国の重要人物をリベール王国内にてサポートするという特殊任務を帯びていた。
サポート……お守りとも言う。
そのとある人物のことを考えるたびに、ミュラーは頭が重くなり、胃がしくしくと痛みだし、心は真冬の空のごとく淀んで憂鬱になる。ため息をつくのも毎度のことだ。
ミュラーは骨の髄まで軍人だった。
好きな言葉は規律と協調。
嫌いな言葉は自由と奔放。
——だったはずだ。
はずなのだが……。

帝国と境を接するリベール王国の北部。
霧降り渓谷の人目のつかない奥に、洞窟を抜けねば辿りつけない空地があり、そこに空賊たち[illegible]していた。
その空賊艇が帝国製であったために、ミュラーが引き取り役として赴くことになった。
ところまでは良かったのだが……。
目の前の眼鏡の女性を前にして、ミュラーは少々困惑を隠せない。
彼女の年齢は二十歳ほどだと思われた。
少女と言っては失礼になる。礼節に気を配るミュラーである。そこは間違えたくない。
ただ絶対にそれより上ではないはずだ。
この落ち着きのなさは——。
明るい色のブラウンの髪をしていて、頭の後ろで黄色いリボンで留めていた。
特徴的なのは、小さな丸い眼鏡と眼鏡の奥のきらきらした瞳。一刻も視線を留まらせることなく、あたりを探るように始終動き回っている。
空き地に鎮座し夜間照明に照らされて輝く空賊艇だけでなく、警備している兵士たちや、あたりの風景まで彼女の視線を逃れることはできていない。
守備隊長に訊いたところでは彼女はマスコミの人間だという。
好奇心旺盛なのだ。
ならば頷ける。
彼女はミュラーを見つけるとすぐに駆け寄ってきた。まじまじと遠慮なく見つめられてし

まった。
驚かされたのは駆け寄ってきた理由だった。ミュラーを見て、放った言葉。見たことがない制服だと言い、彼をリベールの人間ではないとおそらく一目で見抜いた。
だからこそすぐさまに近づいてきたのだろう。油断のならない観察眼を持っている。
こういう厄介な瞳を持っている人物にミュラーは心当たりがある。
ありすぎる。
そう……ミュラーにとっては嫌な予感しかしない、あの、とある人物。
首を振ってミュラーは予感を振り払った。
眼鏡の少女が自己紹介をしてくる。
「《リベール通信》っていう雑誌のカメラマンをしているドロシー・ハイアットで〜す」
そう名乗った。
ミュラーも自らの身分と名前を告げる。
「ちゅーざいぶかんさんですか」
「いつもは大使館にいる」
「では、そこを離れねばならないほどの任務なのですね〜」
「む……」
しまった記者相手にしゃべり過ぎたか、とミュラーは警戒した。

だが、自分の言ったことが判っているのかいないのか、ドロシーはすぐに話題を変えてしまった。
「わたしも、帝国の方を知っていますけど、ミュラーさんはそのひととは随分と雰囲気が違いますね〜」
「ほう」
「なんというか。その方はワッフルのように柔らかいのですけど」
「柔らかいことの例えだとはわかるが、なぜワッフル」
「美味しいからです〜」
「そ、そうか」
深い裏の意味があるのかと一瞬考えてしまったミュラーである。
「ミュラーさんはカチカチに冷やして固めたアルティマアイスみたいですよぅ。刺したスプーンが跳ね返るくらいの」
「硬いことの例えだとはわかるし、自覚もあるが、なぜ食べ物に拘る。そして何故そこまで冷やして固めるのか……」
「三日くらい冷氷庫に入れておくと、そーなるんですね。うふふ。融けるまで食べられないです。風味も落ちちゃいますけど〜」
「……試したのか？」

「アイスは凍らせたほうが美味しいかなあって思ったので」
そう言って、にっこりとほほ笑むのだ。
ミュラーはドロシーが怖くなった。
得体が知れない。なんというか、自分という人間とはどこかが根本的に違う気がした。
どこかでこんな感触を得たような気もするが……。
考えこんだときだった。砦の内から兵士が駆けだしてきて、司令部からの連絡が入った事を告げた。
ミュラーは意識を切り替える。
見張りの兵士に彼女の世話を言い残し砦の中へ。
早足になりつつも、隣に付き従う兵士に訊いてみた。
どうしてマスコミを立ち入り禁止の空賊艇の場所まで案内したのか。
ラケルという名の兵士は答えた。
とても止められるような方ではありませんでした、と。

†

時間を少し遡る。

兵士ラケルが、「止められないような方」、つまりドロシー・ハイアットと出会ったのは、空賊砦の入り口にあたる洞窟の中途だった。
うろうろと左右を見廻しながら彼女は歩いていた。
「ねーちゃん、何やってんだー」
「あー。人ですぅ」
「おいこら、ひとさまを指さすんじゃねえよ！　あと、あぶねえだろ、こんな処をひとりでウロツキやがって」
改造して、壁も地面も切り出した石で覆ってあるとはいえ、元は天然の細い洞窟である。ところどころ壁の崩れたところもあって枝道から魔獣が入り込んだりもする。
明りといえば十アージュごとに壁に取り付けられた燭台の炎だけだ。
ふつうの女性がひとりで歩いてよい処ではない。
「いえいえ――」
「なんだよ？」
「ひとりじゃないですよぅ。もうふたりです」
しれっとそう言って、自分自身とラケルを交互に指さし、にこっと笑顔になる。二十歳ほどに見えたが、笑顔はもっと幼く見えた。不覚にも眼鏡を掛けたその顔が可愛く見えてしまい、

ラケルはどきりとしてしまう。

「あ、あんたなあ～　出くわした俺が魔獣だったら、どうする気だったんだよ！」

そう返したら、丸いガラスの奥の目を細め、ころころと声を出して笑った。

「こんな可愛い魔獣さんはいませんよぅ」

「か――かわ……いい、だと」

「はい。まるでヒツジンみたいです。おひげが立派ですし。もっともふもふしてると、よりヒツジンそっくりに」

「単なる無精ひげなんだがな。てか、ヒツジンは魔獣じゃねーか！」

「あ、そうでした。ヒツジンさんは魔獣なのでした。ですよねぇ。これはうっかり」

てへ、と舌を出して、頭を下げた。

調子が狂うったらない。

ラケルは脱力してしまう。

と、いきなり目の前が明るく光った。まぶしさにラケルは目を細める。洞窟の壁が一瞬だけ昼間のように照らし出された。

「って、なんだ!?」

「記念写真ですよぅ。ほら、きれいに撮れました」

いつの間にか手のなかに持っていた機械をひっくり返してラケルに見せる。

画面はモノクロだった。オーバルなカメラだ。投映板に、顎の下から光を浴びて目を剥いているラケルが映っている。

「うぐ。こいつは……」

暗闇に浮かぶ幽鬼のごとく不気味な顔に映っていた。夢でうなされるレベルだ。

「可愛いですよ」

「絶対、可愛くねえよ！」

「そうですかぁ？」

「あのな。ったく……。カメラを持ってるってことは迷い込んだ観光客か？　出口まで案内してやるから付いてきな」

「いえいえ。わたしはココに用があるんです」

「は？」

「わたしはカメラマンなんです。雑誌の特集で、この訓練場の写真を撮りに来たんですよ～」

許可も取ってある、と許可証を見せてくる。

信じられないが本当だった。

王国印と、アリシア女王陛下のサイン入り取材許可証だ。陛下は毎日のように百を超える書類に判を押しサインをするというから、それ自体は珍しいものではないとはいえ、王国軍に所属するラケルをたじろがせるには充分な代物だった。

ドロシー・ハイアット。
王都にあるリベール通信社のカメラマン。
所属・年齢・性別・名前——書類に書き込まれたプロフィールと目の前の人物を見比べるが、どうやら本物らしかった。
「ちっ。マスコミか……」
小声でつぶやいたつもりだったのだが、しっかり聞こえていたようだ。
「はい。今日はナイアル先輩がいらっしゃいませんから、単独取材を敢行することに。緊張しますー。元空賊さんたちの秘密基地で、現在は王国軍の訓練場になっているこの洞窟を、隅から隅まで取材させていただきたくですね——おっ、あちらに何か見えてきましたよ？」
「っと、おいこら待てってのー！」
「おっと、分かれ道ですねえ。右と左と、どちらに行きましょう？」
聞こえているはずだが、ドロシーはスタスタと歩き出していた。
「聞けよっ、おまえ——」
くるっと振り返られた。
「あ、わたしのことは、ドロシーって呼んでいただけると嬉しいですー。『おまえ』じゃなくて」
そう言って、またにこっと微笑む。
「あうえっ!?」

キールは女性に免疫がなかった。
「はい、どうぞ」
「……と、どろって、おま、」
「ドドロじゃありません。ドロシーですよっ」
「じゃねえよ！　そこ、左だ！」
左に曲がれば司令室として使っている部屋がある。そこなら、砦の守備隊長も詰めているはずだから、このカメラマンだという娘の処遇も決めてもらえるだろう。好き勝手に砦の中を歩き回らせるわけには……。
「あ、はい。わかりました」
「と言って、なんで右に行く」
「面白そうなので」
歩き出した。
ちょっと待てと追いかけるが、意外と足が速い。
「こ、こら。待てってのー！」
「はいはい。了解ですー。聞こえてますよぅ。おおっと、階段発見！　階段は見つけたら昇らなきゃですねー！」
「なんでだよー！」

全然理屈がわからない。

子どもの頃に死んだ母も他人の話を聞かない人だったような記憶があるが……。

ひょっとして女性ってやつはみんなこうなのか!?

「だから待てってのー」

†

ドロシーは待ってくれなかった。

ゆるい階段を昇り、左手に見えてきた扉の前でようやく立ち止まる。

「ぜいぜい……。ったく、この――」

口にしてはいけない軍隊仕込みの単語をつぶやきながらラケルは追いついた。

背中に手をかけようとして、すかっとその手が空を切る。

目の前から背中が消えた。

腰を落とし、ドロシーがその場で這いつくばったからだ。

「ん～～～～んんん？」

肘を床につき、扉に張り付くような姿勢で伏せている。

スカート姿でないのが救いだが、その格好は年頃の女性としてどうなのか。

「ちょ、おまえ――」

目の前でラケルに向かって背中を向けた格好で這いつくばる若い女性に対して彼が取れる行動はひとつだけだった。すなわち――。

即座にバックステップを踏んで離れた。

「ななな、何やって――」

「ほほ～。ふむふむ」

カシャカシャとオーバルカメラをいじる音がする。

「あ、こら。ここで写真を撮るときはひとこと断ってだな――」

「おー」

何かを見つけたような声をあげながら、ようやく立ち上がる。

「ほらほら。見てください」

オーバルカメラの投映板を見せてきた。

部屋の中のようすが映っていた。

――部屋の、中？

ラケルは投映板から目を離して扉を見た。

床との間にわずかな隙間ができている。握りこぶしひとつぶんほどの、だが。

なるほど、あそこから映したわけか。

元々、天然の洞窟を改造した砦だ。扉がきちんと付いているだけマシであって、隙間のひとつふたつくらいはあってもおかしくない。
覗けるといっても、足下だけだ。
椅子の脚と、詰めている三、四人の兵士の脚しか映ってなかった。
「面白いですよね～」
「はあ？　面白いって？　この写真がかよ……」
「はい。のんびりしてるのがよくわかるかとぉ」
言われてもラケルにはよくわからない。
脚しか映ってないのだ。
それはまあ、ここは兵士たちの部屋として割り当てられている。非番の兵士たちが気を抜いていてもおかしくはないが、軍服を着たままで素足と無駄毛をさらしていないから、まだ弛み切ってはいないと思うのだ――というか、そーゆーのって脚を見ただけでわかるもんか？
「脚の組み方でわかります～」
「ほんとかよ……」
それが本当ならたいした観察眼だ。
「あと、これじゃ、鍵をしっかり閉めてあっても、覗き放題ですよ～」
「男の脚だけ覗いて楽しいか？」

「それはそれで楽しいものだとわたしは思いますが」
「見たくねえ！」
「ところで、この隙間、そのままでよろしいので？」
会話が成立してるように思えないのがつらいところだ。
「んなの、ネズミくらいしか通れねーだろ……」
「はあ。それはそうなのですが……」
それ以上は言わずに、ドロシーはちらっと上目遣いでラケルを見てくる。
どきりと、心臓が跳ねた。
――いったい俺に何を期待してるんだ。そんなに部屋が密閉されてないことが重要なことなのか？　さっぱりわからねえよ！
ラケルは兵士としてはまだ若かったのだ。
もし賊が侵入したら、とか。
その隙間から、そう、例えば催眠弾のようなものを投げ入れられたら、とか。
万が一の希少な可能性を想像してしまうような、有事に対して必要な臆病さをまだ備えてはいなかった。
大声の会話が聞こえたのだろう。扉が開いて、何事かと中の兵士が顔を覗かせる。
ちょうどいいとラケルは思った。

ドロシーの事を守備隊長に伝えるように頼む。

「ラケル、おまえが伝えないのか？」

「あの野ろ——いや、あの女は、誰かが見てないと、どこに行っちまうか知れたもんじゃねえから……」

「なるほど、そのようだな」

「えっ？」

振り返ると、もうドロシーの姿がない。

通路の先のほうから、

「では、次に行きましょうか。どんどん取材しますよぅ！」

声が聞こえた。

「もう取材始まってるのかよ！」

「すごいご婦人のようだな……」

「ったく……。じゃあ、頼むぜ！」

遠くに見える背中を追って走り出す。

「おいこら、待ちやがれ～～！」

言っても聞かないことはそろそろわかり始めていたが叫ばずにはいられなかった。

ようようドロシーに追いつく。

だが、そのあともラケルはドロシーに引きずりまわされ続けたのだ。

どんどん先へと歩いていく彼女を止めることができない。

ドロシーは好奇心の塊だった。

見つけた階段は昇らずにはいられない。

扉があれば鍵を確かめ、開けられるものなら即座に引き開けた。

許可証を手に入れた記者なのだから当然の行動なのかもしれないが、するするとラケルの手を逃れて、こうも好き放題に歩き回られると、後で上官に怒られるのではないかと冷や冷やだ。

伝言が間に合ってくれればいいが。

ここが訓練場であって、たいした機密がないことが幸いだった。

とはいえ砦の奥へと進むにつれて、どうにかして止めないと、と考えることも多くなった。

砦の奥では、洞窟の枝道や壊れた壁の隙間から魔獣が姿を見せることも多いからだ。

見つければ狩るようにしているとはいえ——それは兵士たちにとって良い訓練にもなったし——魔獣たちの数も多くて狩りきれていない。

ドロシーが危険を理解してくれることだけが救いだった。まるで遊撃士に知り合いでもいる

かのように、魔獣の影を認めるとぴたりと口をつぐんだ。
魔獣の脅威を理解しているのだ。
街に住むふつうの人々は意外とわかってくれない。
気づかれないようにして脇をすり抜けた。
それでも歩みそのものを止めてくれることはなかったけれど。
「はあはあ。どこまで見て歩くつもりだよ……。いい加減にしろってーの！」
「あ、外ですよ！」
声を弾ませて足を速めた。聞いちゃいない。
ドロシー・ハイアット、恐るべし。ラケルの脳裏にその名が刻まれてしまう。二度と忘れることはないだろう。そう思ってしまった。
ラケルとドロシーが辿りついたのは、洞窟を抜けた先の開けた土地だ。
ふつうの人間が入り込めない霧降り渓谷の奥の閉ざされたその場所は、山と谷との間にできた、差し渡し一セルジュほどしかない平たい大地で。
空賊たちがここに砦を造った理由がその場所にあった。
「うわ～、前来た時と、少し雰囲気が違いますね～」
そう言って、カメラを構えると、ドロシーは目の前の崖のほうへと走り出した。
「ちょー　おま――ドロシーさん、あぶねえっての！」
慌てて追いかける。
既に夜も遅い。空には星だけが散っていて、篝火の明かりも照明も崖のほうまでは照らしてはいない。万が一にも足を滑らせたら……。
「止まりやがれ、こら」
「わー、相変わらず、おっきな谷！　怖いですよぅ」
ぴたりと止まって、盛んにカメラの閃光を焚く。
「わわわー　こら、急に止まるなっ！」
目の前で急停止して写真を撮っているドロシーにぶつかるまいと、ラケルは避けた。
避けた先に黒々とした谷が口を開けていた。
「ひーっ！」
落ちそうになったところで踏みとどまった。
くん、と身体が引っ張られたのを感じる。
見れば、軍服の裾を小さな手が掴んでいる。ドロシーの手だった。カメラを持つ手の逆の手で、ラケルの服を引いたのだ。
ささやかな力だから、そのおかげで落ちなかったとまでは言えないが、それでもどうやら助けようとはしてくれたらしい。とわかる。
「ダメですよぅ。暗いところで闇雲に走っちゃ危ないですー！」

「だ、誰のせいだと……」
「良かったですね。落ちたら、助かりませんよ、ココ」
言って、ドロシーは足下を指さした。
細い指の向こうで、千尋の谷が闇の顎を開けている。ぞくりと背筋が凍った。
「う……。わりぃな」
「いえいえ。あーーーー！」
大声を上げながらドロシーが顔を横に向けている。
しまった、と思った。
この訓練所ゆいいつの機密というべきものがそこにある。
空賊たちが帝国から持ち込んだ飛行艇。彼らが山猫号と呼んでいた空賊艇だ。
照明がアーツの光を投げかけ、暗闇の中に鋼鉄の肌を浮かび上がらせている。
すでにドロシーの関心は空賊艇にあった。
「へ～、まだこんな所に置かれてたんですね～」
言葉から推し量ると、どうやら彼女はここに山猫号があったことを知っているようだ。
ラケルはほっとした。
してみると、どうやら彼女にはほとんど隠しておかねばならないことはないようだ。
写真を撮りまくるドロシーの向こうには、帝国のお偉いさん――駐在武官だと言うミュラー

うと、駐在武官の守備隊長の姿があった。
守備隊長がココにいるということは、ドロシーを連れてきたのはあながち失敗だったとは言えないかもしれない。
ラケルとしては、自分のほうが連れてこられたみたいだと感じていたが。
「……彼女は？」
と、ミュラー少佐が隣の守備隊長へと尋ねるのが聞こえた。
「はは、マスコミの人間ですよ」
どうやら守備隊長には既に伝わっていたようだ。
ラケルはようやくドロシーというバトンを他の人物へと渡せそうだと思った。
――という具合だったんです。
問われたラケルは、事の次第を帝国軍人の少佐に伝えた。
司令部に当てている部屋へと向かう途中だった。
通信器の備えてあるその部屋の前でラケルは少佐と別れる。本部から入った連絡を受けに少佐と守備隊長は部屋の中へと入り、ラケルは解放された。
一介の兵士には本部からの連絡事項を聞く権利はない。
休息部屋へと戻った。

落ち着く暇もなく、当直だったことを思い出し、重い腰を上げた。
担当の歩哨場所へと向かいながら、とんでもない女性だったなとラケルは振り返る。
あまりにも奔放でユニークだった。ユニークすぎる。
けど。
なかなか可愛かったな……。
まあ——相手をするには骨が折れそうだが。
果たして、あのカメラマンに付き合って行動できる人間なんているのだろうか。
そう、思わないでもない……。

†

ぐう、とドロシーのお腹が鳴った。
「はら～。そういえば、昼から食べていませんでした……」
ひととおり空賊艇を写真に収めたところで、ドロシーは砦の内へと戻った。
歩いている途中で自分が何も食べていないことを思い出す。カメラを構えているときは気に
ならなかったが、そろそろ限界だ。
通りかかった兵士に食事のできる場所を聞いた。
[illegible]皺の走った顔をぎゅっとして笑みだとわかる形に改
めて、ドロシーに言う。
「糧食でよけりゃあるぜ」
「はあ」
糧食というのは食糧のことだ。備蓄されたものや、旅人が携行する食糧のことをそう呼
レーションなどと言うこともある。ただ、軍人がこういう声音で糧食とわざわざ口にしたと
はたいてい——まずい。
「この先に部屋があったろ？」
「先ですかぁ？　えと、ここはどこでしたっけ？」
そう尋ねたら、呆れたような顔をされた。
「あんた、あれだろう？　リベール通信の」
「はい。ドロシーと申します。カメラマンですよぅ」
「聞いてるぜ。ここじゃもう知らない奴はいないだろうな」
「えっ。なんで？」
「なんでだろうな。わははは！　まあ、細けえことはいいだろ。リベール通信は俺もよく読んでる。
あんたんとこの、ライア——いや、ナイアルだったか？　いい記事を書く」
意外な名前が出てきて、ドロシーは驚いた。

「はあ」
「なんだ、自分の社の記者くらい覚えてねえのかよ。しかたねえな」
「いえその……」
「相手が国王だろうが貴族だろうが、言うときゃ言うってスタンスの記事だからな。反発するやつも多いが……近頃の若い奴にしちゃ骨がある。俺は前から公平な記事を書くたいした奴だと見込んでいるんだぜ」
「ほう、へえ、はあ」
「薄い奴だな。もっと喜べ！　てめえんとこの記者を誉めてやってんだぞ？」
　そう言って、ガハハと笑った。
「ま、いいけどな！　メシを食いたきゃ、とにかくこの先にずっと行け。右に扉が見えてくるからよ。食堂になってる。誰かに頼みゃ、糧食を出してくれるさ！」
「わ、わかりました。ありがとうございます」
　ドロシーは礼を言ったが、その軍人はひらひらと背中越しに手を振りながら、もう歩き去っていた。
　反対側にドロシーも歩き出す。
　道々歩きながら、ドロシーは老兵士とのやりとりを思い出して、思わず頬を弛めてしまった。
　――これは、ぜひナイアル先輩に伝えてあげましょう。
　ドロシーはナイアルが褒められるのは苦手だと知っているのだ。さぞかし、嫌がることだろう。
「うんうん。たまには仕返ししませんと。うふふ」
　ナイアルときたら、すぐにドロシーをトンチキだのポンコツだの言うのだ。うら若き乙女に対する形容としては如何なものかと思う。
　ドロシーには自覚がなかった。
「おっと、あれがおっしゃっていた扉ですね！」
　扉を叩くと、返事があった。
　中には年配の兵士が一名。
　食事をさせてもらえるだろうかと頼むと、その兵士は、テーブルに座って待っていろと言った。
　小さな部屋の中には、四人ほどが掛けられる四角いテーブルがひとつ。
　そこに座っていると、ノックの音とともに扉が開いた。他の兵士たちとは違う服を着た男がひとり顔を覗かせる。誰かと思えば帝国軍少佐ミュラーだ。どうやら先ほどの用事は済ませたらしい。
　部屋の奥へとひっこんでいた兵士が顔を見せる。
「おっと、帝国の旦那。どうしやした？」

「ああ、何か食べるものはないかと思ってな」
兵士が、わかりやしたと答えると、ミュラーはドロシーの目の前に腰を下ろした。
ふと顔をあげてドロシーを見る。
「君は……」
「ドロシーですよぅ」
「そうだったな。リベール通信の……」
「はい。カメラマンです～」
「いい取材はできたかな？」
「そりゃもう！　可愛い写真がいっぱい！」
か、かわいい？　と、口の中でミュラーがつぶやいた。ドロシーにはしっかり聞こえていたが、あえて咎めはしなかった。こういう反応には馴れている。
風景の表情が見えるドロシーだが、それを他人が理解してくれないことには、さすがにそろそろ気付いていた。
食事が運ばれてきた。
並べられた料理を見て、ドロシーは驚いてしまう。
白身魚のムニエル……霜降りヒレ肉のステーキ……アゼリアの実と完熟リンゴを入れたフルーツサラダ……コーンスープ。

[illegible]と言ったのは、
しかも、どれも温かいものは熱々で、冷たいものは冷やしてあった。
わずかな時間で調理して出してきてくれた。
「ほらよ。冷めねえうちに食いな、嬢ちゃん」
「あ、はい」
「帝国の旦那は酒はいくかい？」
言いながら、くいっと手でコップを傾ける仕草をする。
「任務中だ」
「かーッ！　相変わらず硬いねぇ。休憩時間に、ちこっとくらい呑んだって罰はあたらねえぜ」
「罰はあたらないかもしれないが――」
ミュラーが言った。
「自分が許せなくなる」
さらっと気負うでもなく言われ兵士が絶句した。
ドロシーも驚いた。これは想像以上の堅物だ。しかも、それが彼にとっての自然なのだ。規律を守ることに無理を感じていない。
気まずい沈黙があたりに漂う。
ぐぅ～。

ドロシーのお腹は残念ながら空気を読まなかった。
思わずドロシーの頬が熱くなった。
彼女だって恥ずかしくなることはある。滅多にないが。
「あ、じゃ、じゃあ、いただきます～」
「いただこう」
沈黙の中で食事が始まった。
――うう、気まずいです～。
ドロシーにしては珍しく気おくれしてしまっていた。
スプーンですくってコーンスープから口をつける。
はっと目を見開いた。
「こ、これは……」
「ほう」
「美味しいです～～～～っ」

†

強張った表情を緩めて、幸せそうにドロシーは言った。
ひと匙、ふた匙と進むに連れて、幸福感で満ちてくる。
食事の美味しさにドロシーの緊張はすっかり溶け切っていた。
いつもの調子があっという間に戻ってくる。
舌先も滑らかにまわるようになって、盛んにミュラーに話しかけていた。
ミュラーのほうも食事に驚いているようだ。彼はこの訓練所に来てからしばらく経っているはずだったが、帝国軍で出る食事と比べると天地の差だとまで言った。
「そう言ってくれると腕を振るった甲斐があるぜ」
兵士がにんまりと笑いながら言った。
ということは、調理の腕次第でここまで美味しくなるということだろうか？
何にせよ、食事は楽しくあるべきがモットーのドロシーとしては、ありがたいことだった。
と同時にミュラーに対しての認識を改める。
何よりも、素直に帝国軍と比べてまで誉めてくれたのが意外だった。
軍人というのは、どんなときでも忠誠を誓っている自国を一番と評するものだと思っていた。
だが、どうやらこのミュラーは違うらしい。
他国とはいえ認めるべきところは認める。
正々堂々とした堅物なのだ。

考えてみれば、敵の評価を誤るのは自軍に不利になるわけだから、ひょっとしたら当然なのかもしれない。
とはいえ、公平さというのは理屈ではわかっても実行するのは難しいと思うのだ。
不意にドロシーの脳裏に先ほどの老兵とのやりとりが浮かんだ。
『俺は前から公平な記事を書くたいした奴だと見込んでいるんだぜ』
確かそんなことを言っていなかったか？
「ははあ、なるほど……」
ドロシーは目の前の軍人に対して好感をもつようになっていたが、その理由がなんとなくわかるような……。
「こんなに見た目は違いますのにねぇ〜」
「……何か？」
冴え冴えとした瞳で見つめられて、ドロシーは思わず視線を逸らした。
どこかの先輩と比べて大きく違うのは、あっちが極めつきに目つきが悪いのに、こっちは十人女性がいたら十人ともが頬を染めてしまうような美貌を持っていることだ。
——とと、ごめんなさい。
「あ、そういえばですねぇ……」
取り繕うように言葉を紡ぎ始めてからドロシーはふと思い出した。

†

「魔獣を見た……？」
「はい」
ミュラーの問いかけにリベール通信社のカメラマンが答えた。
詳しく聞いてみると、ドロシーがこの訓練所に入ってから、空賊艇のある空地へとやってくるまでの間のことだったようだ。
通路を徘徊している魔獣に出くわしたらしい。気付かれないようにそっと脇を通り抜けてきたと語った。
外見の描写からすると小型の魔獣だ。
ゴールドラッフチュウかエルダーオウルあたり……。
ふむ、とミュラーは腕を組む。

「そのままにしてて、いいんですか？」

「いちおう報告をしておくが、報告までだな。俺はエレボニアの人間であって、この国の人間ではない。それ以上は越権行為だと思う。リベール王国の考えることだろう」

「そ、それはそうですが～」

「何か問題が？」

「危ないですよう。いくら軍人さんばかりだからと言って、たまにはわたしみたいな普通の人も訪れるんでしょうし。わざと放っておくにも限度があるかと……」

ミュラーは聞き咎めた。

――今、なんと言った？

「わざと？」

「なのだと思うのですけどぉ」

「ほう？　どういう理由でそんなことをすると思う？」

ミュラーは、もちろん答えを知っていたが、このカメラマンの意見を聞いてみたかったのだ。

「ええと……兵士さんたちの実戦訓練の相手、というのがまずあります」

「なるほど。他には？」

「警備上の理由かと」

その言葉にミュラーは内心で驚いてしまう。

「どうして魔獣を放し飼いにすることが警備上の理由なのだ？」

「天然の衛兵代わりになりますー」

ぽやぽやした天然口調で話すドロシーだったが、勘は鋭いようだ。自分の見つけた事実から因果を推定する知性もある。

「例えば、泥棒さんたちが忍び込んだりしても、まずは魔獣さんたちを相手にしないといけなくなりますから」

「それが……正しいのだとしたら、ここの兵士たちはある程度は魔獣たちをそのままにしておくだろうな……」

「わかりますけど、でも、わたしが歩くようなところにいるのはやりすぎですよぅ」

「討ち漏らしたのだろう。伝えておけば狩ってくれる。安心してほしい。帝国人の俺が請け負うことではないが」

そこで調理をしてくれた兵士が食後の紅茶をもってきてくれた。

しばらくは香りを楽しむために口をつぐむ。

芳醇な紅茶の味を楽しんでいると、ドロシーがふたたび口を開いた。

「そういえば、わたしも、エレボニアの方に知り合いがいますよ～」

「ふむ？」

「詩人さんなんだそうです。知り合いの遊撃士の子ととっても親しくて。一緒に仲良く旅をし

ていたり……」
何故だろう。そのときミュラーはぞくりと肌が粟立ったのだ。
嫌な予感しかしないというやつだ。
「音楽が得意でして、特にピアノとリュートですね〜。歌声もきれいで、時と場合を選ばずに弾いては唄ってくれるんですよね〜」
それは時と場合を選ばなくてはマズイのではなかろうか？
「お酒も大好きで、お金も無いのに、そのお店でいちばん高いお酒を呑んで捕まってしまったことがあったらしいです」
ダメ人間すぎる……。ミュラーは口の中だけでつぶやいた。
「きれいな女の人が大好きで——わたしも好きですけれど、だって写真映えするんですよね、すっごく。で、その人は、ところ構わず愛を語っては路上でも大声で愛の唄を歌ったり」
「いやもう結構だ」
ものすごい既視感を感じた。なんだろう、その残念な吟遊詩人は。同じエレボニア人として恥ずかしい。
「もうやめてくれ。なんだか頭が痛くなってきた」
「そうですかぁ？」
「思い出したくない知り合いを思い出してしまってな」
「はあ、あの……そのミュラーさんのお友達って、どんな方なんですか？」
友達、と言われて躊躇した。
自分は彼の友達なのだろうかと自問してしまう。
確かに、彼のほうはミュラーのことをしばしば「やあ、親友」と言ってはいた。
だが、王位継承権がないとはいえ皇族と、一軍人の、それも少佐に過ぎない自分とでは身分が違いすぎる。
そんなふたりに友情が成立するものだろうか。
恐れ多いのではないか。
「で、どんな方なんですか？」
ドロシーの質問は終わっていなかった。聞きだすまでは梃子でも動かないぞという顔をしている。

†

ミュラーはため息とともに持っていた紅茶のカップをソーサーに置いた。
かちんと音がする。
口を開いた。

「変人だ」
「は?」
「ひゃっ?」
「自由勝手で人の言うことを聞かず、始終あちこちうろつき回って騒動を起こしたあげくに、後始末だけは人に押しつけてくる……」
「なんと」
「口が軽く態度も軽く根性もないな。朝は起こさねばいつまでも寝ているし、夜は強引にベッドに叩きこまない限りはいつまでも騒いでいる」
「お、おかあさんの台詞ですよう……」
「寝つきがいいのは酒を呑み過ぎたときだけだ。あのトンチキのポンコツめ……」
　まったく、あいつにはどれほどの苦労をさせられたことか——。
　言っているうちに何だか無性に腹が立ってきた。
「ほえええええ。それはまた……」
「せいぜい悪友だ。いやいっそ腐れ縁かもしれん」
「良いお友達をお持ちですねえ」
「何?」

言い放った
　今の自分の言葉からどうしてその単語が出る。
「どこがだ?」
　ミュラーはつい無関係の民間人をきつく睨んでしまった。
　そんなことはミュラーとしては覚えがないことだ。ありえないことが起こったと、慌てて視線を逸らしてしまう。
　好きな言葉は規律と協調。
　嫌いな言葉は自由と奔放。
　理性的な振る舞いこそが栄えある帝国軍人として求められる行為であって一時の感情に任せて振る舞うなど許されない——。
「だってミュラーさん」
　リベール通信社のカメラマン、ドロシー・ハイアットが言うのだ。
「その方のお話をするとき、とっても楽しそうでしたから」
「っ——いや、その……」
　そんなまさか。
「安心しました〜」
「あ、安心?」

はい、とドロシーが頷いた。

「わたし、ミュラーさんがさっきまで、ちょっと怖かったですー」

「あ、ああ。すまないな。睨んでしまったりして」

「いえいえ、そうではなくてですねえ。わたし、ミュラーさんって、ほら、これ見てください」

そう言ってオーバル・カメラの投映板を見せてくる。

そこにはミュラーの顔が映し出されていた。いつの間に撮ったのか、それは空賊艇の前で最初に出会ったときのものだ。

帝国製飛行艇の前に突然現れた謎の人物――ドロシーのことだが。そんな胡乱な人物を見つけたときのミュラーの瞳は警戒を強く滲ませており、容易に相手を信じるような人物には見えない。

よくこんな表情をあの一瞬で捉えたものだとミュラーは内心で感嘆してしまう。

これを見れば、ミュラー・ヴァンダールという人物がどんな男なのか、誰でもわかるだろう。

警戒心が強く、猜疑心も強く、融通が利かなくて、堅物で面白味のない――言ってて自分が嫌になってくる……。確かに怖がられて当然な――。

「どんな顔もそのひとの一面でしかないですけど、他の顔がなかなか見えてこなくて心配していたんですよう。で、安心しました」

そう、ニコニコしながら言うのだ。

「ぐ」

「硬いように見えたけど、柔らかい表情もするんだなあって。よっぽどそのご友人が柔らかい方なんですねぇ」

「柔らかすぎるのも困りものだと思うがな」

「良いコンビってことですね！　相性って大事ですよう。ベターハーフってやつです〜」

ドロシーが言った。

憮然とした表情のままミュラーは指摘する。

「それは普通は伴侶に対して使う言葉だ」

「そーなんですか？」

「たいていは夫が妻に対して言う。マイ・ベターハーフと。だいたいそんなに凸凹な羽同士をくっつけても満足に飛べまい……」

そこで空を飛ばない鳥を例えに出されても……それに。

「きっと走ってるんですよ！　ベングーさんみたいに！」

「ベングーは魔獣だ！」

「おっと。そうでした。これはうっかり。でも可愛いですからー。ベングーの羽って柔らかそうですし」

そんなベターハーフは激しくお断りしたい！

だが、誰と言っても、目の前の[illegible]笑顔のままだろうことは間違いなくて。

言い負かされた気がしてミュラーはつい反撃してしまった。

「ということは、君にもぴったりのコンビがどこかにいるということかな」

「ああ、はい。そうなりますねー。たぶん、いるんじゃないでしょうかぁ」

その人物におおいに同情してしまうミュラーだった。

柔らかい人物に振り回される硬い人間の苦労は、おそらく大陸の誰よりも自分は詳しいに違いなかった。

賭けてもいい。帝国軍人は賭けなどしないが。

目の前で微笑みながら紅茶の残りを飲み干すドロシーを見つめる。

やれやれ、と。ミュラーは悟った。

どうあっても、自分はこのタイプの人間には勝てないらしい。

彼女が紅茶を飲み終わるのを待ってミュラーは立ち上がった。

「さて、では案内してもらおうか」

「はい？　わたしが、ですかぁ？　あの……わたしは、今日久しぶりにここに来たのですけれど。どこに案内すればいいのでしょう？」

「君がさっき言っただろう？　魔獣を見たという場所だ。食事も終えたことだし、仕事に取り掛かる前に運動不足を解消しておくのも悪くない」

「放っておくと言ってたような」
「たまたま訓練場内を歩いているときに魔獣に出くわし、襲われた。だから退治した。これで問題あるまい」
きょとん、とドロシーが目を丸くする。
一矢報いた、と思うミュラーである。
ようやく理解したらしいドロシーの顔に笑みが浮かぶ。
「やっぱり……」
「何を笑っている」
「真面目ですよう、ミュラーさんは」
それには答えずに先に立って部屋を出た。
「ま、待ってください。いま、案内します〜」
追いかけてくるのがわかるが振り向かなかった。
照れている顔など見せるものではない、帝国軍人は。
それに——。
うっかり振り向いて、今の顔をスナップショットに撮られるのだけは勘弁してほしいのだ。
その写真が万が一にもリベール通信に載ろうものなら、リベール中の人々に見られてしまうかもしれない。

見られたくない人物が少なくともひとり、ミュラーにはいる。
ひとりいれば。
充分だとも思った。

第5話 ナイアル&ドロシー

リベール王国の王都グランセルには、街の中央を王城に向かってまっすぐに走る大きな通りがある。
居酒屋『サニーベル・イン』はその通りの中ほどにあった。
すぐ近くにホテルのレストランもあるものの、お財布に易しいお手頃価格の品揃えと居心地の良さから、この居酒屋のほうを利用する者も多い。
ナイアル・バーンズもそうした客のひとりだ。
一階のカウンターの端に陣取り、固いパンをスープに浸して食べていた。
「給料日前には、この居酒屋の朝定食はありがたいよ」
「あらまあ、それは嬉しいわね」
カウンターの向こうで店主のクレディが微笑みを浮かべる。
「特にこのスープがいい。魚を卸したときの残りをくず野菜と煮込んで、塩コショウだけで味付けた、温かいことが最大の取り柄の、手をたっぷりと抜いたこのスープが美味い！」
ひくっとクレディの頬がひきつった。
「ケンカ売ってるの、ナイアルさん？」
「事実をありのままに伝えるのが記者の役割だからな」
「ん、もう！　そんなこと言ってると、次からはナイアルさんだけは倍の料金をいただきますよ！」

「俺が悪かった」
「まったく……。リベール通信社の誇る敏腕記者がそんなこと言って」
「俺は敏腕記者なんかじゃねぇよ。……っと」
また、だ。
ナイアルはおしゃべりをやめて口を閉じた。全身の感覚を針のように研ぎ澄ませる。
視線を感じた。
顔を動かさずに目だけを動かして左右を窺う。
――あいつか。
薄暗い奥の小さなテーブルにひとりで座っている男――いや、少年か。
見た目は十六、七といったところ。視線を隠すつもりか知らないが、つばの短い茶と黒の格子柄の帽子を目深に被っていた。
「へたくそめ……」
気配を消しきれてはいない。
明らかに素人だ。
「ん？　なんですか、ナイアルさん」
「あー、いやなんでもねえ。払いはココに置いとくからな」
ミラをじゃらっと置いて席を立つ。

戸口に向かいながらアレコレ考えたが、自分が見張られることに、どうにも思い当たる節がなかった。

ナイアルは新聞記者だから、敵がいないと言えば嘘になるが。

「様子を見るか……」

そのまま店を出て石畳を叩いて南へと歩く。

交差する道をひとつ過ぎると、すぐに遊撃士協会の『グランセル支部』だ。

ふと思いたって、扉を開けて覗き込む。

奥のカウンターで男が顔を上げた。

受付をしているエルナンだ。

「おや、ナイアルさん。どうしました？」

「別に何か用があるってわけじゃねえんだけどな。最近、どうだい？」

言いながら、ナイアルは扉の内へと入る。視線を遮るように後ろ手で扉を閉めた。

——さて、どうでるかな？

追跡者の次の行動を予測しつつ、ナイアルは部屋の中を見廻した。

「どう、と尋ねられましても……まあ、相変わらずですが」

エルナンが穏やかな口調で言いながら、手をひらひらと掲示板のほうへと振る。

遊撃士協会の支部はどこも似たり寄ったりの造りをしていて、遊撃士たちへの依頼のメモを

[illegible]掲示板が部屋の隅にでんと立っており、奥に受付のカウンターが設置されている。

掲示板には様々な依頼を書きとめた大小の紙片が所狭しと貼られていた。

相変わらず遊撃士たちは大忙しのようだ。

「へえ。少しは世の中も平和になったかと思ったが」

「大きな事件は減りましたよ。リベールの行く末を左右するような事件は、ね。おそらく……ですが。それでも人の世に悩みの種が尽きることはありません。子どもの進学問題から、ご近所の不法ゴミ投棄まで、なべて世は事も無し——とはいかないようです。残念なことですが」

「おいおい。それ、遊撃士の仕事じゃねえだろ」

「仕事は選べないから仕事なんですよ？」

人々の安全と平和を守ることを目的として設立されたのが遊撃士協会のはずだ。

「確かにな」

「おや、ナイアルさんもでしたか。これは意外です」

「ちょっと待て。俺が仕事を選んでるって言ってるか、それ！」

「そうですよ。ゴシップが苦手で、事件記事にばかり熱を入れるジャーナリスト。それがナイアル・バーンズと聞きました」

痛いところを突かれてナイアルは思わず声をあげる。

「こら待て。誰に聞いたんだよ！」

「ヨシュアさん」
「ぶっ−」
「ああ、もちろんエステルさんもですよ」
「エステルもかよ−」
　若き遊撃士コンビの名前を言われて大声を出してしまった。
　女装が似合うほどの優しい顔立ちをしているが、ヨシュアが時に辛辣であることは薄々とナイアルも気づいている。だが、天真爛漫を絵に描いたような少女であるエステルにまで言われていたとは。
「あいつらぁ……」
「ナイアルさん、好かれてますねぇ」
「年下にからかわれて何が嬉しいんだよ」
　じろりと睨むが、エルナンはにこにこと笑うばかりだった。
　これだから遊撃士というやつは厄介なのだ。一癖も二癖もある連中が揃っている。
　まあ——彼らのおかげで何度も事件の取材に成功していることも確かなのだが……。
「ったく」
　当人たちがいないのに文句を言っても愚痴にしかならない。それは彼の主義ではない。ナイアルは気持ちを切り替えて、エルナンとしばらく取り留めもない会話を交わした。

こうした些細な言葉のやり取りから、厄介な事件に関する重要なヒントを得られることもある。記者としては常に耳をそばだて目を開けていなければならない。
　というのは建前で、今は単なる時間つぶしだ。
——さて、どうなったかな。
　適当なところで会話を切り上げて、ナイアルは遊撃士協会の支部を出る。
　街灯の影に隠れていた人影が動きだした。
——諦めてなかったか。

†

　大通りを西へと渡り、武器商会と工房の間を抜けた。
　その先は住宅地になっていて、狭い路地が多い。まっすぐに仕事場に向かうことはせず、ナイアルは歩調を徐々に早めて路地をぐるぐると回ることにする。
　右、左、右と曲がって、一度大聖堂の前へと出ると、そこから一気に駆け足に。
　走って狭い路地へと飛び込む。息が切れたが背後の気配は消えていた。
　どうやら撒けたらしい。
「やれやれ」

脚のふくらはぎのあたりがやや痛い。ナイアルは日頃の運動不足を実感してしまう。何かスポーツでも始めるかなと、やりもしないことを毎度のように決意するナイアルだった。

コーヒーハウス「パラル」へと辿りつくと、テラスに置いてある椅子にへたり込んだ。

マスターがナイアルに気付き、注文を取りにきてくれる。

「コーヒー。ブラックで」

淹れてもらった黒い液体をゆっくりと喉に流し込んでいると、向いの建物からふたり組の人物がナイアルのほうへとやってくるのが見えた。

手前の人物は良く知っている。明るい色のブラウンの髪を風になびかせ、頭の後ろで束ねた黄色いリボンをぽんぽんと跳ねさせている。

鼻先に乗った小さな眼鏡がトレードマーク。

同僚のカメラマン、ドロシーだった。

ほんにゃりとした笑みを浮かべ、ナイアルを見つけていつものように手を振ってくる。

ただ、子犬のように走りだしたドロシーの後ろには、もうひとり、見慣れない顔が付いてきていた。

若草色のスーツを着た若い——男？

いや、女だ。

近づいた顔を見ればまだ若い。十四か、五。だが、すらりとした細身の身体に男物のスーツ

を着ていて、ネクタイまできっちり締めている。頭にはどこかで見たような茶と黒の格子柄のハンチング帽を乗せていた。

スーツ少女を従えたドロシーが声を掛けてくる。

「ナイアル先輩！　やはりココにいましたかぁ！」

「おう。どうした」

ドロシーに返事を返しながらも、ナイアルは後ろの少女を観察している。

その少女が肩から斜めに提げているのはオーバルカメラだった。

——カメラマン、か？

帽子から覗くのは明るい金色の髪で、サファイアを嵌め込んだような青い瞳を持っていた。

まるで人形のように綺麗な娘だ。

ただ、惜しいかな、目つきが悪い。

何かを企んでいる悪人みたい、と評されるほど目つきの悪いナイアルには、他人のことは言えないが。

「どうした、じゃ、ありませんよぅ。遅いですってば」

「今月分はもう校了したろ」

「そっちじゃないです。編集長がお呼びなんです」

「編集長が？」

ナイアルは首を傾げる。

「何かやらかしたか、俺？」

「そこで素直に自分の悪行に思いを馳せてしまうところがセンパイですねぇ」

「ぐっ。……俺、今日は責められる運命なのか？」

「はい？」

「なんでもねえよ。このまま帰って寝ちまうかな……」

痛いところを突かれてばかりなのは、日が悪いということだろう。

「ダメですよぅ」

席から動かないナイアルの腕を引っ張ってドロシーが立たせようとする。

そんなふたりを氷のようにクールな瞳で見つめていたスーツ少女が、視線を外し、ナイアルの肩口から背後を見た。

薄い桃色の唇を開く。

「あんた何やってんのよ」

視線を追ってナイアルは振り返る。

見覚えのある茶黒の格子柄の帽子をかぶった少年がよれよれになっていた。

——追いついてきやがったか……。

だが、朝の面影はもはやない。

髪は乱れてあちこちかぎ裂きになっており、ネクタイは弛んでしまって辛うじて首からぶら下がっている状態だ。帽子も斜めになって今にも落ちそうだった。

「こ、このオヤジ、妙にすばしこくて……」

「おいこら。その、オヤジってのは、俺のことじゃないだろうな」

釘を刺すように言ってやったら、死んだ魚みたいな目で見られた。

「俺は村で一番速かったんだ」

「じゃあ、今日から二番目だな」

「こ、この街は俺の村じゃない。そっちのホームグラウンドじゃないか」

「知るか」

相手に合わせる義理はない。

「先輩、お知り合いで？」

ドロシーが会話に割って入ってきた。

「知らん」

「はあ。さすが先輩です。見ず知らずの人とそこまで険険漫才ができるなんて」

「漫才じゃねえ！」

ナイアルの叫びはドロシーの耳には届かなかったらしい。

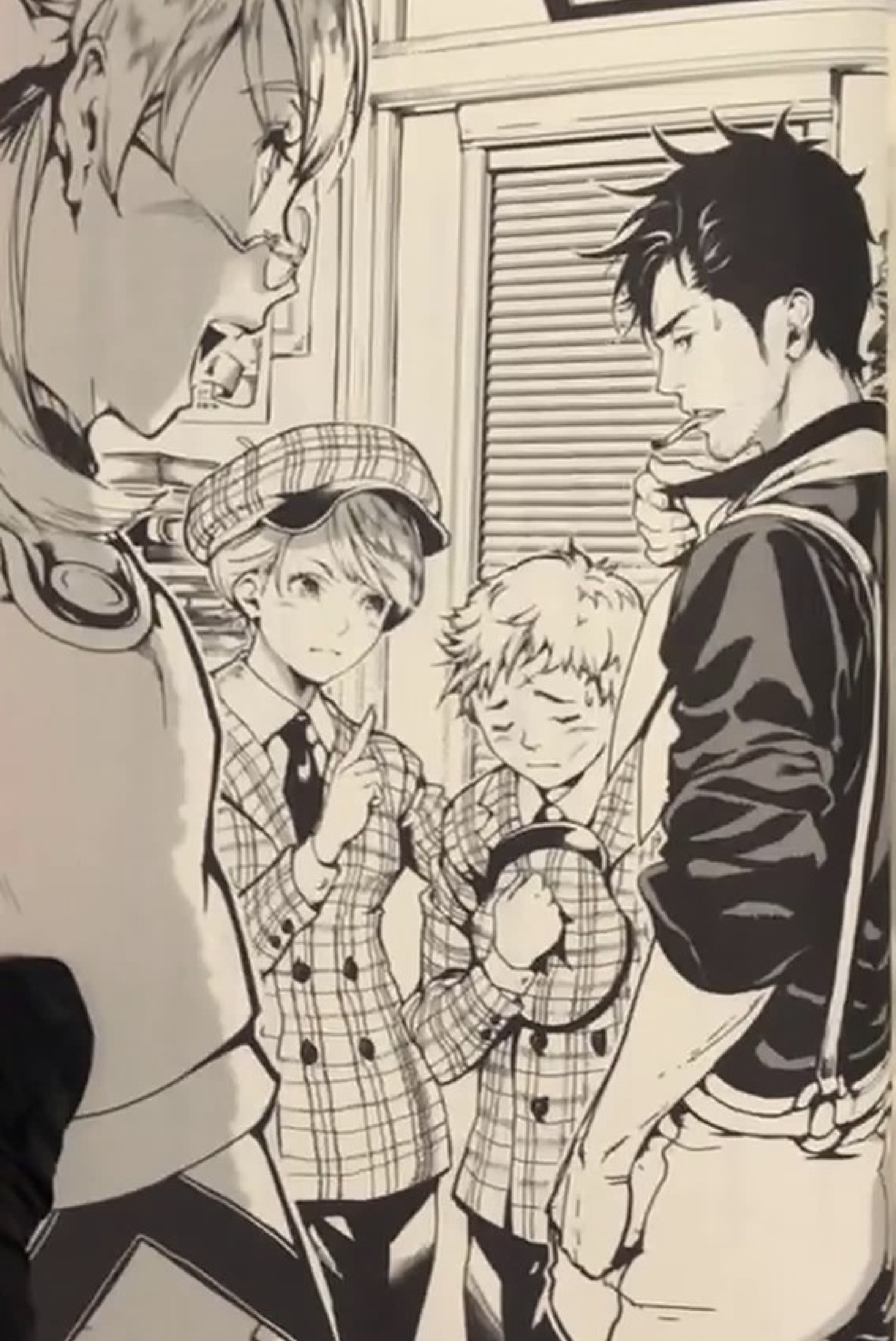
「ということは、ああ、なるほど、あなたがシオンさんですね？」

何が「ということは」なのか「なるほど」なのか。
ナイアルにはさっぱりだったが、どうやらドロシーの指摘は正しかったらしい。
「シオン・フォレストです」
「それにしてもボロボロになりましたねー」
「追っかけてたら、側溝にはまるし、散歩中の犬に追いかけられるし、鳥に糞を落とされるし、踏んだカエルにはケロケロ啼かれてからかわれるし。俺、もう……ぐす」
「ださいわね」
　きっぱりと断言したのはスーツ少女のほうだった。
「ひ、ひどいよ、ケイ。苦労したんだよ！　もっとねぎらってくれたって」
「涙声で言うほどのことかしら。三十路に尾行を撒かれたなんて、恥にもほどがあるわね。あんた、体力だけが取り柄なんだから、もっと頑張んなさいよ」
　聞き捨てならない台詞に思わずナイアルは声を張り上げてしまう。
「ちょっとまてコラ。俺はまだ二十九だ！」
「……やや三十路？」
「曖昧にして正当化すな！　俺はまだ二十代だって言ってんだよー！」
「自信のない人ほど大声になると言いますが」
「ぐぬぬ」

ああ言えば、こう言う娘だった。
「はらー。すごいですねー。ナイアル先輩を言い負かした人って初めて見ました」
　ドロシーが感心していた。
　厳密に言えば初めてではないと思うが、珍しいことは確かだろう。ナイアルもここ最近では覚えがない。だからといって怒りが収まるものでもなかったが。
「いったい、何者（ナニモン）だよ、こいつら！」
「ええと……」
　宙を見つめ、顎にひとさし指を当てながらドロシーが答える。
「後輩さんだそうです」

†

「ドロシー君の言うとおりだよ」
　椅子にふんぞり返ったまま、編集長が小気味良さげに言った。
「呪われてしまえ……」
「ん？　何か言ったかい、ナイアル・バーンズ君」
「いえ……」



落ち着け、とナイアルは自分に言い聞かせる。
たった今編集長から聞かされた話が信じられない。
おそろいの格子柄の帽子をかぶったふたりは、新聞記者志望の学生だというのだ。
しかも、ふたりがココにいる理由は——。
「もう一度繰り返そうか？　彼らは君に逆取材に来たのだ。『フューリッツァ賞』を受賞した我がリベール通信社きっての敏腕記者ナイアル・バーンズにね」
「俺を取材ですって？」
「厳密に言えば、君とドロシー君をだ」
「あら、わたしもでしたか」
「はい」
頷いたのはスーツの少女だ。
確か、ケイと呼ばれていた。
「彼らふたりは、君たちとちょうど同じようなコンビになるわけだな」
「俺、卒業したら新聞記者になろうと思ってるんです！」
「わたしはカメラマンに」
「そしてできれば俺、リベール通信社に入りたいんです！　だって、リベール通信は王国最大にして最高の報道機関だし、お抱え記者の『ナイアル＆ドロシー』と言えば、あの『フューリッ

ツァ賞』を受賞したばかりじゃないですか！」

語りながら、シオンはどんどん自分でテンションを上げていった。

どうやらスイッチが入ると抑えの利かない性質らしい。

確かにシオンとケイは、記者志望の少年とカメラマン志望の少女という点ではナイアルたちと同じだ。ただ、性格のほうはナイアルたちとは逆のようだった。突っ走る性質と慎重派という意味で。

「『フューリッツァ賞』ですよ、『フューリッツァ賞』！」

シオンのテンションは一向に落ちない。

「あの、世界的に有名な盲目の記者、マルセル・ニールセンとかと並ぶんですよ！　我が国のジャーナリズムの誉れです！　俺、リベール通信に載った記事は、ぜんぶ切り抜きにして取ってあるんです。リベール通信の凄腕コンビ、ナイアル&ドロシーといえば、今では世界に通用する記者ですよ！」

「凄腕コンビねえ」

「すごいですねー、ナイアル先輩って、ひょっとして凄かったんですねぇ」

「あのな。おまえも言われてるんだからな？」

「えっ？　誰がですか」

――そーいや、こーいう奴だったっけ。

ドロシーのほんにゃりした顔を見ていると、力が抜けてしまう。何に怒っていたのか判らなくなりそうだ。

「俺は、ホントに会うのを楽しみにしていたんですよ。それが……こんな冴えないオッサンだったなんて」

「おいマテこら」

「そうよ、シオン。その発言はいただけないわ」

意外なことにケイも反論した。

「見た目で判断するなんて記者としては最低よ。わたしたちは何のために取材にきたと思ってて？」

「ケイ……？」

「ポンコツ呼ばわりするなら証拠を集めてからよ」

きっぱりと宣言した。

そしてポンコツというところに疑いを持っていないようだった。

「てめえらなぁ……」

精一杯おどろおどろしい声を出そうとしたが、ナイアルのもくろみはあっさりと潰えてしまう。

大声で編集長が笑いだしたからだ。

しばし爆笑してから、編集長は宣言した。

「いいね！　確かに百聞は一見にしかずは記者のイロハだ。他人からの情報を鵜呑みにせず、自らの足と目を用いて真実に迫るのが記者魂と言える」

編集長から持ち上げられて、シオンが感激に頬を紅潮させた――って、ちょっと待ってくれ。こいつは嫌な流れじゃないか？

「よし。では、実際にこいつがポンコツ記者かどうか自分の目で確かめてみたまえ。シオン君、ケイ君。今日一日、君たちの取材を許可する！」

「本当ですか！　やったああ！」

「ありがとうございます」

ふたりが揃って頭を下げた。

「ちょおおおおっと、へんしゅうちょうおおお！」

「ナイアル。君とドロシーは、進んで彼らの取材に協力したまえ。若き新聞記者見習いに現場を見せてやるんだ」

「あ、あのですね、編集長」

「なんだね？」

「俺たち――俺とドロシーはこう見えても取材で忙しくてですねぇ。子どものママゴトに付き合ってる暇なんて……」

「ナイアル・バーンズ君」

うっすらと微笑みさえ浮かべて編集長がナイアルの名前を呼んだ。フルネームでだ。目がちっとも笑ってなかった。

ナイアルの心の内側で警報が鳴る。

――ああ、何か俺、ヤバイものを踏んだぞ。

「先ほど正午の鐘がなり、今はもう午後一時を回ろうとしているわけだが……」

編集長の言葉にナイアルはぎくりと身を強張らせる。

「きよ、今日は時間の過ぎるのが早いですね。あ、あははは」

「知っているかね？　今日は平日で、我が社の記者は昼前にはみな出社している」

「と、飛び込みの取材が……」

「先ほど『サニーベル・イン』からメッセンジャーが来てな」

編集長の笑みが一段深くなった。

歯をむき出して魔獣が笑ってるみたいだった。

「ナイアルさんの払いが二十ミラ足りなかったから払って欲しい、と」

「そ――そいつは……」

「聞けば、ずいぶん遅い朝食だったようじゃないか。で、なんだね、ナイアル君。取材がどうとか言っていたようだが……」

「あ、う……ええとですねぇ……」
すうっと編集長が息を吸い込む。
——こいつはだめだ。
顔を真っ赤にして編集長が口を大きく開けた。
「ドロシー！　仕事だ！　取材に出るぞ！」
叫びながら、ナイアルはもう扉に向かって走り出している。財布もメモ帳もポケットの中だ。
背広を脱ぐ前で助かった。
「わわわ！　せ、センパイ！　どこへ！」
「どこでもいい！　どこかだよ！」
扉を開け、後ろから足音が付いてきているのを確認している余裕もなく、一気に階段を駆け下りる。
「ばっかも————ん‼　誰にツケを払わせてると思ってやがるか————！」
壁を震わせる大声が背中を押してくる。
——二十ミラくらい勘弁してくださいよ！
言って収まる怒りなら言っていただろう。ナイアルは不幸にもそれで収まらないことを知っていた。
初めてじゃないからだ。

——次の給料は下がるかもなぁ。
休暇がなくなるのと、どっちがいいだろうかと不毛なトレードオフを検討しつつ。
ナイアルは建物から外へと飛び出した。
通りに飛び出して振り返る。
息を切らしつつすぐにドロシーが追いかけてきた。
シオンとケイが付いていた。

†

ナイアルは振り返らなかった。
足音の数が減っていないから、シオンとケイが付いてきていることはわかっていた。
——ガキのお守りかよ。しかも二人ぶん。
内心で頭を抱えてしまう。
「センパイ～、いったいどこへ行くんですかぁ」
空気を読まないドロシーがいつものように声を掛けてくる。
大通りを渡りつつ、ちらりと視線を後ろに送った。
すぐ後ろにドロシーが眉を下げて困った顔をしながら付いてきている。

ドロシーの背後にシオンとケイが並んで歩いていた。二人並ぶと、スーツの色が違うものの、同じようにネクタイを締め、同じ柄のつばの狭い帽子を被っていた。

立ち止まって振り返る。

「その格好。そりゃ、いったいなんだ？」

よせばいいのに訊いていた。

仕方ない。好奇心は記者の本能だ。

ドロシーが自分の服をばたばたと手で叩いて、はてな、という顔をしているが、おまえじゃねえよ、と目で合図する。おまえは常に同じ格好だろうが。

「これですか？」

「新聞記者の制服です！」

シオンが胸を反らして言った。

「リベール通信社は制服なんてねえぞ」

「存じてます。まあ……シオンに合わせました」

「記者といえば、スーツにネクタイ、チェックの柄のハンチング！　絶対、これですってば！

俺、ずっとこの姿に憧れてたんです！」

脇でケイがじと目で睨んでいることも気づかずにシオンが力説する。

心なしかケイの頬が赤い。少し恥ずかしいらしい。

「あー、わかりました！　ほら、あれですよぉ先輩、お芝居であったじゃないですか、お姫さまと新聞記者が王都をデートするお話が」

ナイアルもようやく思い出した。

「『グランセルの休暇』、か」

「はい。あれです、あれ。二年くらい前にけっこう流行った覚えが。お姫さまが可愛かったですー、そういえば、あのお芝居に出てくる新聞記者が、ケイさんたちみたいな恰好をしていました」

「俺、あれを見て、新聞記者っていいなって思ったんですよね！　まあ……王女さまとデートなんて、それはフィクションだってわかってますけど」

如何にも自分は嘘とホントが判ってますよという顔をした。

事実は小説より奇なりって言葉を知らねえな、とナイアルはこっそり思う。

「あ、でも、確かバーンズさんは王家の人にも取材してるんですよね！」

いいなあ、という憧れ目線を向けられてしまった。このふたりに、紙面には書けなかった女王陛下や皇太女の話を語って聞かせたら、いったいどんな顔つきをするのだろう？

「まあ、恰好はなんでもいいんだけどな」

「でしょうね」

ケイがナイアルを見ながら言った。

褒め言葉でないことはわかる。

「ナイアル先輩は実はお洒落さんで、いくつも同じ服を持っていて、わざわざいつもだらしなく着ているんですよぅ！」
「誉めてねえよ、おまえも！」
「ええっ？」
――やべえ、いつもの三倍疲れるぞ、これ！
「……付いてくんのはいいけど、邪魔すんじゃねえぞ」
「やった！」
「ナイアル先輩、いいんですかぁ？」
「編集長のお達しじゃ、しょうがねえだろ」
逆らうより流されるほうがいい時もある。主に心理的な理由で。あげく心労で倒れるかもしれないが。
「で、我々は何の取材でどこへ向かっているのでしょう？」
ケイが、ようやくかという表情をしてナイアルに問いかけてきた。
「もう、着いてる。ここだよ」
リベール通信社から東へ歩き、大通りを渡った先にある建物。
『釣公師団本部』と看板には書かれている。
シオンとケイと、ついでにドロシーまでがぽかんとした顔をしていた。

「ここは？」
ケイが一番早く立ち直って尋ねてくる。
「書いてあるとおりだ。釣り好きの集まるところだな」
「いえ……それは知っていますが」
「今日の取材はここだ。付いてくるのが嫌なら、遠慮なく帰っていいぞ」
そう促した。
ここで言うことを聞いてくれれば苦労はないのだが……。
「わかりました。ご一緒させていただきます」
ケイが言って、肩から提げたオーバルカメラをケースから出した。そうして、ちらりとドロシーのほうを窺う。
ドロシーのカメラは既に首からむき出しの状態で下がっている。鞄のベルトと交差するように掛けてあった。この娘は、長距離を旅するときでもなければ、愛用の「ポチ君」を仕舞い込むことはないのだ。
常にシャッターを切れる状態にしてあることは間違いない。
「念のために言っとくけどな。俺が許可するまでカメラは使うなよ？　こういうところじゃ、やたらと写真を撮られるのを嫌う人もいるからな？」
「だ、そうですよ、ケイさん」

「おまえにも言ってるんだよ、ドロシー！」
「うえぇ？」
「意外そうな顔をしてるんじゃねえ！　いつもいつも突っ走ってシャッター切ってるのはおまえだろうが！　後から誰が頭を下げて回ってると思ってるんだ」
「でも、良い表情って一瞬で消えちゃうこともありましてですねー。と、とと。わ、わかりました～」
じろりと睨んだら口を閉じた。
「それで……ここで、どんな事を取材するんですか、バーンズさん」
シオンが言った。
「あー、ナイアルでいい」
「そんなっ。『フューリッツァ賞』受賞記者を名前で呼ぶなんてできませんよ！」
「それも禁止だ。以後、『フューリッツァ賞』がどうとか言ったら、同行を断る！」
「な、なぜ——あ、はい。わ、わかりました」
こちらも、じろりと睨んだら口を閉じた。
——やれやれ。
「それで——取材理由は？」
ケイが改めて問いかけてきて、ナイアルはにやりと笑ってみせる。

ドロシーが震えあがった。
長年の付き合いだから感じる予感ってやつだ。
「ここの保存資料の中に暗号が隠されているというタレコミがあった」
重々しく宣言する。
「あ、暗号、ですか！」
釣りの取材と聞いて嫌そうな顔をしていたシオンが予想通りに食いついてきた。

↑

石畳から短いステップを上り呼び鈴を押す。
扉を開いて待つと、通称《釣り男爵》と呼ばれるハーバート・フィッシャーが出迎えてくれた。ハーバートは『釣公師団本部』の代表者だ。
これなら話が早く進みそうだ。
入ってすぐの部屋には、壁一面に墨で描かれた魚の絵が掛けてある。
正確に言えば、これらは絵ではなくて『魚拓』と呼ばれるものだ。釣った魚の記録を残すために、魚に墨を塗って紙に写し取ったもの。
おそらく歴代の『釣公師団』の団員たちが釣った魚のものだろう。

飾ってあるのは一部で、立派なものだけを選んでいると思われた。中には、両腕を広げたよりも大きな魚のものもある。

「ここに保存されている、ロマール池で獲れるリベールブナの魚拓を見せて欲しいんだが……」

ナイアルの願いを、ハーバートはこころよく聞いてくれた。

「吾輩たち釣り好きにとって、釣果を誇れるチャンスは逃さないものなのである！」

そうのたまって、《釣り男爵》はナイアルたちを続き部屋へと案内してくれた。

縦横十アージュほどの大きな部屋だ。

部屋の中に棚がずらりと並んでいる。

手前の棚の引き出しひとつをハーバートは引いて、そこに魚拓がぎっしりと保存されているのを見せてくれた。

「ここから探して欲しいんである」

「げっ！　こ、ここから？」

「全て年代順に保存されておる。だから、ロマール池だけと言われても困るのだ。我が釣公師団は王国全土に広がっているのだからして！」

「あー……それは」

「心配ない」

縦に一アージュほどもある細長い魚拓を取り出して、ハーバートはそれを広げつつ、

「このように、魚の名前だけでなく、釣った日付と場所と釣り人の名前が書かれているものなんである！」

そして、自由に調べてくれて構わないが、取り出した魚拓は元にちゃんと戻してくれと言って部屋を出ていった。

「まあ、やるしかねえか」

「ナイアルさん、俺も手伝いましょうか」

シオンが言ってきてくれたので、ナイアルは遠慮なく頼むことにした。

「見ると、棚に通し番号が振ってあって、こっちの魚拓のほうにも同じ番号が振られているみたいだな。年代が同じなら、日付はどうでもいいようだ。これなら、ロマール池のものだけ取り出して、後で通し番号を見ながら戻せばいい」

「なるほど」

「俺はこっちからやるから、おまえさんはあっちのほうから見てくれるか？」

「はい！」

元気よく返事が返ってきた。

よしよし、とナイアルはほくそ笑む。

部屋の反対側の棚から調べ始めたシオンは、片端から棚を開けると、ロマール池で釣れたリベールブナの魚拓だけをより分け始めた。

これが、早い。
見る見るうちに棚のひとつを終わらせて、次の棚に移った。
「ナイアルさん、俺もうひと棚終わりましたよー」
「おお、そりゃすごいな。やるなぁ。調べ物が早いのは良い記者の条件だぞ」
「そ、そうですかー」
ナイアルの言葉に、シオンのより分け速度が倍にあがった。
一時間後には、棚の三分の一が終わっていた。
ナイアルはゆっくりと最初の棚を終わらせた。
二時間後、シオンは三分の二を終わらせてしまい、ナイアルはふたつめの棚がようやく終わるところだった。
「おー、早いなー」
「任せてくださいー!」
軽快な声が返ってくる。昼飯も食べていないはずだが、若いというのは素晴らしい。
三時間後にはすべての棚から必要な魚拓を抜き終わった。最後はちょっとだけ頑張ったので、ナイアルは棚四つぶんほどまで進んでいた。
空き部屋をひとつ借りて、すべての魚拓を抱えて移る。
部屋の床に、年代順に魚の絵を並べていく。

全部が終わったときには、さすがに疲れたらしく、シオンは床にへたり込んでいた。
「お昼、買ってきましたー!」
ケイとシオンが百貨店で買ってきた弁当を掲げて戻ってきた。
「おう。ありがとうよ。んじゃ、ちょっと飯にすっか。ほれ、ここだと資料が汚れちまうから、向こうで食うぞ」
「は、はい……」
言葉もロクに返せないようだ。
疲れた顔をしてふらふらと立ちあがる。
休憩部屋として団員たちが使っている部屋のテーブルに弁当を広げ、ナイアルたちは休憩に入った。
もう夕方に近いが、いちおうこれが昼飯だ。
「で、これからどうなさるのですか?」
ケイが食後の紅茶をすすりながら訊いてくる。
「並べてある魚拓を保存したい。ぜんぶ撮ってくれ」
「わかりましたー」
ドロシーがポチ君を手にしながらほんにゃりと答える。
「それから社に戻って暗号解読ですね!」

シオンがようやく弾んだ声で言った。
ナイアルは「いいや」と答える。もう夕方だからな。まだ日が長いとはいえ、暗くなる前に行っておきたい」
「次はロマール池に行く。もう夕方だからな。まだ日が長いとはいえ、暗くなる前に行っておきたい」
ロマール池は、王都の郊外にある池だ。
南から街道に出て、キルシェ通りを東へと行った先にある。
池と言ってはいるが、ちょっとした湖なみの大きさがあった。
「池……ですか。あの、暗号は？」
「嘘でしょ、あれ」
ケイが言った。
シオンの目が丸くなった。
「えっ……」
「だから、嘘だってば。暗号なんて。ああ言えば、あんた一所懸命になるじゃないの」
どうやら長い付き合いらしいケイがシオンに言って聞かせる。
「まさか」
「いや、嘘だ」
ナイアルも教えてやった。

「よく頑張ってくれた。その熱意と根性は認めてやる」
誉めてやったのだが、ナイアルの言葉を聞いてシオンはテーブルにつっぷした。

†

広げた魚拓の写真を、ドロシーが写真に撮りまくる。
「おー、可愛いですねえ！　お魚さん、ちょっと泳いでみましょうか。はいはい。それでオーケーですよぅ。素敵ですー」
相変わらずだった。
何が楽しいのやら、始終ニコニコしっぱなしで、次々と床いっぱいに広げられたリベールプナの魚拓をカメラに収めていく。
こちらは終始無言。
その傍らに立って、ケイも同じようにシャッターを切っていた。
やることのないシオンは部屋の隅でふてくされて膝を抱えていた。
「ひどいや……」
つぶやきが聞こえた。
ナイアルはこのふたりの事が少しわかってきた。

記者志望のシオンのほうは熱意と根性はあるようだ。ただ、思いついたら即座に行動してしまうようで、ちょっと思慮が足りない。
ケイは逆だ。慎重派で理論派。冷静に分析してから物事を進めるタイプ。
どうやら、ドロシーの一挙手一投足に興味があるようで、彼女がシャッターを切る瞬間を逃さないようにと注視している。そして、ドロシーと同じ構図で写真を撮ろうとしているようだ。
だから苦労している。
ドロシーときたら、「あー、その表情いいですねえ、はい、チーズ！」なのだ。
あれは困るだろう。シャッターを切った理由がわからないからだ。
風景の表情が見える、というドロシーの主張を理解できるのは、同僚のカメラマンでもおそらくほとんどいないに違いない。
撮影はあっという間に終わり、棚に魚拓を返すのもさほど時間は掛からなかった。通し番号通りに棚に放り込むだけだから、選び抜くより簡単だった。
ハーバードに礼を言って、本部を出る。
「次は池に行くんだが……どうする？　ここで帰っても怒らねえけど」
「い、行きます！　こんなところで帰るなんて！」
熱意と根性はある。
見立ての通り、シオンは折れず、ナイアルたち四人は王都の外へと出た。

一時間も経たずに、ロマール池へと辿りつく。
日はだいぶ西に傾いていたものの、まだ夕方というには早い時刻で、あたりの風景を収めるには充分なだけの光が残っている。
資料調べに全力を尽くしたシオンはさすがに息を荒くしていたが、残り三人はまだ余裕があった。
「好きに撮っていいぞ」
ナイアルはドロシーに言った。
「好きにですか？」
「ああ。ロマール池と周りの風景が欲しいんだ。適当に見繕って撮ってくれ」
「わっかりましたぁ！」
元気よくそう答えて、愛用のカメラを手にすると、ドロシーはさっそく池の周囲を回り始めた。
ケイが後に付いていく。
ふたりの少女を見送ってから、ナイアルは池のほとりにある切株に腰を下ろした。
そのままぼんやりと池を見つめる。
ロマール池は王都近郊では最大の釣りのスポットだ。
地元の漁師や釣り好きだけでなく、観光客の中にもわざわざここまで来て釣り糸を垂れる者

がいる。
池の周りには木々がぐるりと生えていて、水面に緑の影を落としている。
うなじを通り抜けていく風が気持ちよかった。
魚の影がひとつ、すいっと手前をよぎってゆく。釣り上げても、魚拓にして残したくなるほどの大きさではなかったが。
「ナイアルさん……」
草地にへたりこんでいるシオンがナイアルを見上げていた。
「なんだ?」
「いったいここにはどうして来たんですか？　何の取材なんですか？」
「あー。ちゃんと取材だよ」
「取材……って、何の？　こんなところで一体どんな事件が起こるっていうんですか」
「事件じゃねえよ。『ロマール池の釣りスポット』って特集を今度の号で載せる。そいつの取材だ」
「か、観光記事ですか」
「まあそうだな」
「そんなの、『フューリッツァ賞』を取った記者の書く記事じゃありませんよ！」
「あのな」
ナイアルは嘆息しつつ言い聞かせる。

「言ったろ。それ、やめてくれねぇかな」
「あ、う、すんません。で、でも、事実じゃありませんか！」
シオンの言葉に、ナイアルは苦虫を噛んだような顔になってしまう。
——嬉しくないわけじゃねえけどな。
「賞をもらったのは記事を書いた結果だけどな。結果が欲しくて記事を書いたわけじゃねーからなぁ」
シオンがきょとんとした顔をする。
「じゃ、何のために書いてるんですか？」
「さあねえ……」
ナイアルは空を見上げながら言った。
そろそろ西の空が赤くなりつつある。太陽がだいぶ地平線まで迫っていた。
シオンの声にナイアルは顔を横に向ける——ケイちゃん？
「どうしたの、ケイちゃん？」
ケイがひとりで戻ってきたところだ。
疲れを顔に滲ませている。
「その呼び方はよして、シオン」
「あ、うん」

「どうした？」
「あのひと……なんなんですか」
「ドロシーか？」
ケイが頷いた。
「わけがわかりません。あのひと、『かわいい』『悲しそう』『もっと笑って』しか言わないんです！」
「あー」
「わたしに意地悪をしているのかと疑ってしまいます。わたしは理論を知りたいんです！　どうしたら良い写真が獲れるのか。構図はどう決めるのか。露出や感度を合わせるコツは何か」
「聞いたら教えてくれたか？」
首を振った。
「ぜんぜん。もっと直接的にも言ってみました。『賞を撮るような良い写真の撮り方を教えてください』と」
「そりゃまた……」
ほんとに直球だ。
「そうしたら、あのひと何て言ったと思いますか？」
「何て言ったんだ？」

予想はできたが、あえて聞いてみた。
「『相手がにこっとした瞬間にぱちりっと撮ればオッケーですよぅ』、と……」
悪いと思ったが笑ってしまう。
さすがはドロシーだ。
言われている当人がようやく戻ってきた。
おや、と思う。
こちらも元気がない。
「どしたよ」
ドロシーが顔を上げた。
「かわいくありません」
「は？」
ドロシーの答えに、ケイがげんなりとした表情を浮かべる。またか、と思ったのだろう。
「あー、もうちょっと聞いてみていいか？　何がかわいくないんだ？」
「あっちです」
ドロシーが指さしたのは、池の北側だった。
「あっち？」
「かわいくないんです。ずーっと不機嫌そうな顔をしていまして。ちっともにっこりしてくれ

ないんですよぅ。どんなに頼んでもダメなんですー」
「ほう……」
当然ながら、ナイアルにはさっぱりわからない。ロマール池の周りはどこも似たり寄ったりの風景で、違いがあるようには見えないのだ。
「絶対笑ってくれたほうがいい絵になるんですけど」
「撮ったのか？」
「いちおう。ナイアル先輩がそうおっしゃったので」
首を捻る。
「俺が言ったから？」
「ロマール池と周りの風景が欲しい、と。周りですから、一部だけ省略するわけにはいかないですし……。でも、かわいくないんですよぅ」
すでに涙声だ。よっぽど不本意だったと見える。
「まあ、……悪かったよ。けど、助かる」
「はあ」
ため息をついたのはケイだった。
「取材写真にかわいいも何もないでしょう。あなた——バカですか」
ぐさっと、ドロシーが胸に杭を刺されたような表情になる。
これはキツイ。
四つか五つも年下の後輩に言われりゃ、それはさすがのドロシーでも凹むだろう。
「ナ、ナイアル先輩、わたし、バカとか言われてしまいました……」
「心配するな。おまえはバカじゃねえよ」
「ホントですかぁ？」
ああ、と頷いた。
「ちょっと、うかつでドジでトンチキなだけだ」
「あうあうあー……あんまりですぅ」
その場にしゃがみ込んでしまい、梃子でも立ちそうになくなった。
——しまった。駄々っ子が増えちまった。
黄昏に空が覆われる頃まで宥めまくって、ようやくドロシーは機嫌を直した。
王都へと戻り、ドロシーだけは写真の焼き付けのために工房へ。他の三人はそのままリベール通信社の編集部へと帰った。
帰るや早々、ナイアルはタイプライターを叩く。
シオンとケイは疲れ果てたのか、編集部の椅子の上でぐったりとなっていたが、しばらくしてケイが立ち上がってナイアルのところにやってきた。
タイプライターから吐きだされた紙を指さし、「見ても？」と尋ねてくる。

「かまわねーけど？」
ナイアルは言った。
ケイは一枚目から順に読み始め、シオンも立ち上がってケイの脇から覗きこむ。
「ほんとに観光案内記事だ……」
失望を滲ませた声でシオンが言った。
そのまま彼は椅子に戻ってへたり込んでしまう。
疲れた、を繰り返している。
まるで導力が切れた人形のようだ。
だが、ケイのほうは、しばらく読んでいるうちに口数を減らして考え込み始めた。
気付いたらしい。

†

「シオン」
ケイがシオンに声を掛ける。
シオンが薄目を開けてケイを見た。
「飽きたのだったら、先にお茶しててください。ほら、あのコーヒーハウスで」

「あ、うん……わかった」
促されてシオンが編集室を出ていく。
ドアが閉まるのを待って、ケイがナイアルの傍に寄ってくる。
「釣りスポットの記事が池の南側に偏っているのはわざとですか？」
気付いたか、という表情をナイアルはしてみせる。
ケイはシオンを追っ払ったのだ。
「おまえさんが記者を目指したほうがいいんじゃねえの？」
「わたしにはタイプを延々と叩く作業は退屈すぎます」
「……なるほど」
「ああ見えて、シオンはそれが苦痛ではないらしいのです」
ナイアルは昼の出来事を思い出した。
延々と魚の魚拓を調べる仕事を、シオンのほうは文句ひとつ言わずにやっていた。
「確かにな」
誰にでも得手不得手というのはあるものだ。
それに、記者の全てが探偵もどきではあるまい。
もちろん空想で記事を書かれては困るが、丹念な取材をベースにして固い記事を書くというスタイルもありだろう。

「少しくらい種明かししてくれても？」
「そうだな」
ちょうどドロシーが戻ってきた。
焼き付けた写真を広げながら、ナイアルは語り始めた。
「こいつと同じものはあんたも撮っていたはずだな」
魚拓の写真を見せながらケイに問いかける。
「はい」
「っと、ありがたいな。言わなかったのに、この大きさにしてくれたか」
ドロシーに向かって言った。
写真は、一枚につき魚拓が四つ映っていた。そのサイズで写すと、書かれている内容まで読みとれる。一枚ずつ写真に収めたら閲覧性は下がるし、もっとたくさんを写し込んでしまうと、書かれた文字が読み取れない。
「ナイアル先輩がそうおっしゃったので」
ドロシーが言った。
池の写真を撮らせたときと同じ答えだった。
「俺は確か、並べてある魚拓を保存したいって言っただけだが」
「字が読めなかったら、保存にはならないですよぅ。お魚の絵が欲しいだけなら、そう言われると思いましたし」

「……なるほど」
無意識だったが、確かに閲覧性と保存を考えると、このサイズで写してもらうのがベストだった。
「そんなこと考えてたんですか」
ケイが信じられないというふうに言った。
「いえ」
ドロシーが否定する。
「あんまし考えてなかったですけど。なんとなく、こっちのほうがナイアル先輩が喜びそうだなあって」
——そこは嘘でも『考えた』って言っておけ。
ケイの瞳がまたジト目に戻っていた。
ナイアルは写真をつつきながら、「で、こいつを見て何か気づくことは？」とケイに促す。
ケイは考えこんで、それから肩をすくめた。
「さっぱり。わたし、こういうのは苦手なんです。シオンだったら何か気づくかもしれませんけど。彼、直感は得意だから」
「そいつも記者には大事な条件だけどな。じゃあ、こうしたらどうだ」

写真の中に映っている魚拓のいくつかにペンで丸を付けていく。
ナイアルのペン先を視線で追っていたケイが、はっとした顔になった。
「魚が……小さくなってる？」
「当たりだ」
にっとナイアルは笑みを浮かべた。
リベールブナ全体を見ていても、これは気づかない。
だが、中に書かれた釣りの記録から池の北側のものを選ぶと、そこに見えてくる。
数年前から、少しずつ魚の大きさが小さくなっている。
「で、こっちだ」
今度は池の周りの風景写真を並べる。
じっと睨んでいたケイが、小さく息を呑んだ。
「わかる……」
「ほう？」
「これは……どうして。同じように見ていたはずなのに、それに——」
ケイは自分のオーバルカメラを取り出して、背後の投映板に映した写真を次々と表示させた。
「わたしの写したものだと、ぜんぜん違いがわからないのに！」
「それはそうですよぅ。そのひとが笑ってるか泣いてるかなんて、後ろから見ててもわからないじゃないですかぁ」
ドロシーが言った。
「いやまあ言わんとすることはわかるけどな。その説明、わからないと思うぞ」
ふつうの人間にはそもそも風景の表情なんてものは見えないのだ。
「明らかにこっちの風景は変です……。葉の色？　それと、木々の隙間が少し大きいような……。それがちゃんと反映されているから、こんな風に……？」
考察は得意なケイは、いちど見えてしまえば差異を言葉で説明できるらしい。
愕然とした表情になった。
ドロシー・ハイアットという天才の技を目の前で見せつけられてしまったのだ。
ナイアルは種明かしを続ける。
「池の北側には、ここ数年で建てられた新しい工房があるんだ」
「それが？」
「その工房が、廃液をそのまま川に流しているという噂がある。川の水はあのロマール池に流れ込む。池の水が汚染されてるって言われててな。工房のほうは認めちゃいないが。そのせいで、あたりの植物や、魚の成長が阻害されてるってわけだ」
「これを調べるために、釣公師団本部に？」
「あそこなら、ここ数年の魚の資料があるだろうと思ったんだよ。ちょうど観光スポットの記

事を書くって言い訳もあったし。まあ、そっちの記事のほうは池の南側に絞って載せるつもりだけどな。ただでさえ魚の数が減ってる北側から釣られても困る」

「そこまで考えて……」

「ついでだ、ついでー」

「と、ナイアル先輩はいつも言いますよねー」

うるせえよ、とドロシーにはとりあえず怒るふりをする。

「はあ。教えてあげれば、あそこまでシオンもがっくりしないでしょうに」

「どんなに調べたって結果なんて出ないことのほうが多いんだ。今回だって、確信はあったが、取材してすぐに明らかになるなんて期待してなかった」

「そうですか……」

「まあ、それでも地道にやらねえと、そもそも記事なんて書けねぇんだけどな。情熱は不可欠だが、情熱だけじゃ続かねえよ」

苦笑いしながらナイアルは「ま、情熱だけは充分かな」と付け足す。

なるほど、とケイが頷いた。

「彼の情熱だけは認めていただけた、と」

「まあな」

「わたしも、見た目だけで侮ってはいけないと学びました。わたしの目はまだ節穴だったよう

です」

その言葉に、ナイアルはちらとドロシーを見る。

「そうかもな」

そう返すと、ケイもちらりとドロシーを見ながら、池の写真を見て、

「大変、不本意ですが」

出鱈目に撮ったようにしか見えなかった写真が、今の池の状態をつぶさに描き出している。

ドロシー・ハイアットは風景の表情が見えるのだ。

笑い顔や泣き顔や困り顔として認識できる。

「認めます。ドロシーさんは確かに『フューリッツァ賞』に値するカメラマンだと」

「なんですなんです？　わたしの顔に何か付いてるんですかぁ？」

「ああ。ほっぺたにクリームが」

「ええっ⁉」

「さては工房から帰ってくる途中でクレープを食ってきやがったな！」

「あう。ばれてしまいましたぁ」

ドロシーはごしごしとほっぺたをこすってクリームを落とした。

にやっと笑って、ナイアルは言う。

「ってことは、もう夕飯はいらねーってことだよな」

「これは、お、おやつですよ？」
「働かざるもの食うべからずー　いつもおまえが言ってるよなっ」
「ああ～。あんまりですよぅ」
　ドロシーをからかっていると、ケイがはあとため息をついた。顔を向けると、ナイアルたちを苦笑した顔で見つめていた。
「シオンが待っていますから、ここで帰ります」
「ん。ああ、わかった」
「わたしたちも、もっと精進して出直してきます」
　そう言って頭を下げるケイに、ナイアルはひらひらと手を振ってやる。これでも大サービスだ。ドロシーは「またお会いしましょうね～」と笑顔で送り出した。
　――すっかりバカにされたことも忘れてやがる。
　まあ、それがドロシーだった。

エピローグ

　書類と写真をまとめているうちに、編集部にはナイアルとドロシーだけになっていた。がらんとした机が並んでいる。

　残業する者たちは、みな夕食を取りに出てしまったのだ。
「出遅れたか」
　辛抱強く待っていたドロシーのお腹がぐうと鳴った。
「お腹空きました……」
「待たせたな。ほれ、メシを食べにいくぞ」
　言ったナイアルを、ドロシーがしみじみとした顔で見つめてきた。
「どうしたよ？」
「先輩、昔はもっと邪険でしたよねー」
「はあ？」
「覚えてますか。わたしと先輩が出会ったとき……」
「ああ」
　もちろん覚えている。
　カメラを見せたら、勝手に持っていって、好き放題に写真を撮りやがったのだ。当時は感光クオーツも今ほど安くはなかったというのに。
　素人に大事な機材を壊されたと思っていた。
　だが、生まれて初めてカメラに触ったというドロシーが映した写真は、どれも目を瞠るほどの出来栄えで……。

「……ってことは、おまえとカメラを出合わせたのは俺ってことになるのか」
今さらながらだが感慨深い。
「そうですよう。ナイアル先輩はわたしの恩人ですー！」
「それ以来の付き合いだからな。まあ、おまえさんの直観的写真術にも馴れた」
「はあ。そーゆーものですか」
「根拠なく言ってるわけじゃねえってこともわかったからな」
理論的な説明はできなくとも、直感的に周りの風景を解釈しているのだ、この娘は。
「根拠はありますとも。可愛いものは可愛いですから！」
「それは根拠じゃねえよ！」
「ですかぁ？　しかしナイアル先輩も辛抱強くなったもんです」
「おまえがゆーな」
「まあ、わたしのほうも先輩の横暴に慣れましたし」
「新入りを鍛えるのが先輩の役目だからな」
「あの子たちも、ですか？」
「は？」
言われて、シオンとケイのことだと気づく。
「後輩として入ってくるかもですよぅ」

「勘弁してくれ」
そうなったときは、また取材旅行に出るとしよう。
リベール王国はさほど大きな国ではないが、取材で回るには決して小さくはない。
追いかけてみたい事件もまだまだある。
ドロシーをちょっと小突く真似をしてから、ナイアルは財布をポケットに捻じ込んだ。
「ほれ、行くぞ」
「あ、はい！」
これだけは手放さないオーバルカメラを肩から提げなおして、ドロシーが立ち上がる。
そんなドロシーを見つめ、
小声で聞こえないように、
「まっ、これからも頼りにしてるぜ、相棒」
ナイアルはこっそり言うのだった。

あとがき

こんにちは、はせがわみやびです。

「英雄伝説　空の軌跡」の人気キャラクター、リベール通信社名物コンビの敏腕記者ナイアルと天才カメラマン少女のドロシー。ふたりを主役にした短編集の二冊目、「英雄伝説　空の軌跡　リベール王国スナップショット　２」をお届けします。

　ナイアル＆ドロシーについてのお話は、とりあえずはこの二巻でおしまい、ということになりますが、如何でしたでしょうか。

　カメラをもたせりゃ天才だけど、どうしようもなく天然なドロシーと、厳しい先輩ながらも、優しさを垣間見せるナイアル。ふたりの活躍を語り尽せたとは言えませんが、ＦＣ編とＳＣ編を背後にちらちらと感じさせながらの連載は楽しいものでした、読者のみなさまにも楽しんでいただければ幸いです。

　では、ここで短編集の各話を簡単にご紹介。

　ちなみに、お話の順番としては、空の軌跡ＳＣの展開に合わせて、ジェニス王立学園→ツァイス→グランセル→空賊砦と、ヴァレリア湖をぐるっと左回りに周って、最後に王都に戻ってくるという流れになっています。

『瞳にハイライト』

　ジェニス王立学園の名物トリオ、アリス・パープル・モニカの三人に焦点を当てています。

　女子寮の幽霊騒動の顛末と、三人娘の楽しいやりとりが見どころでしょうか。女の子たちがわちゃわちゃと元気に動き回る話は書いているほうも元気が出ますね。

『ラッセル博士の発明品』

　工房都市ツァイスに住むラッセル博士の（世に出なかった）発明品を紹介するお話。

　もちろん、孫娘のティータ・ラッセルも登場します。失敗作の発明品の数々を考えるのが楽しかったです。

『黄昏の少女』

　軌跡シリーズでも人気の高い執行者レンですが、大人顔負けの頭脳を誇るレンと、敏腕記者のナイアルを対決させたらどうなるか。そんなことを考えながらストーリィを作りました。

五本の話のなかでは、ちょっとだけ雰囲気がちがうお話になっています。

「凸凹ベターハーフ」

天衣無縫の天然な人物を友人に持つと、真面目な人間は如何に苦労するか、という教訓があるような、ないような。真面目な帝国軍少佐ミュラーと自由人オリビエのコンビと、ナイアル&ドロシーを対比させて描いてみました。実は短編集にはオリビエは登場しないのですが、なんとなくこの短編からでも、オリビエの人物像が見えるのではないかと……。

「ナイアル&ドロシー」

ナイアルとドロシーの成長を描くには彼らの後輩を出せばいいのでは？　そんなことを編集さんと語り合いながら書いたお話です。ナイアル&ドロシーのコンビに良く似た二人が現れます。ただ、性格だけはナイアル&ドロシーとは逆にしてみました。

さて、果たしてナイアル&ドロシーは先輩らしく見えたでしょうか？

最後に、謝辞を。

編集の小渕さま。ナイアル&ドロシーのお話はすべて楽しんで書くことができました。連載

時には苦労もお掛けしましたし、とても感謝しております。

イラストの西野幸治さま。今回も麗しいイラストの数々、ありがとうございます。ナイアルが渋カッコイイです。

そして、日本ファルコムさま。連載時から自由に書かせていただいて感謝しております。毎回、設定や台詞のチェックをありがとうございました。

今回でナイアル&ドロシーは一段落ですが、次は、「空の軌跡ＦＣ」の3巻が予定されております。空の軌跡FCはこの3巻目で完結の予定。できるだけ早くお届けするべく鋭意製作中ですので、今しばらくお待ちくださいませ。お楽しみに。

また、あとがきでお会いしましょう。